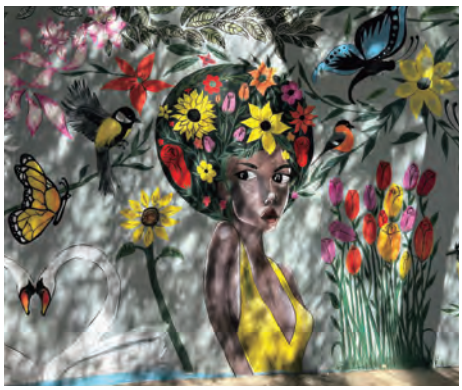


学びのプログラム集

― 2023年度 JICA中国・四国 教師海外研修 授業実践報告書 ―

はじめに

全世界196カ国のうち開発途上国と呼ばれる国は今だ140カ国以上もあり、それらの課題を解決する必要があります。また、日本含めた世界と開発途上国の関係性が高まり、我々の身近な存在になってきています。それらの国の現状や課題、あるいは歴史的背景や先進国との関係などを知らずして、世界の今は語れません。多様な民族、言語、文化、暮らし、考え方、宗教などがあることに興味を持つ好奇心と、その多様性や違いを尊重する謙虚な姿勢と寛容な精神がないと、グローバル人材は育成できません。一方、開発途上国に、日本との共通点を意外に多く発見し、共感することで、開発途上国をより身近に感じることもあります。開発途上国の現状を知ることで、日本や郷土のことを、新たな視点でふり返るきっかけになることもあります。

独立行政法人国際協力機構（JICA：ジャイカ）は、開発途上国における事業で培った経験と人材を活用し、日本国内の国際教育、ESDの発展に寄与するための活動として「開発教育支援事業」に長年にわたり積極的に取り組んできました。開発途上国の抱える問題に関心を持ち、全国の小・中・高等学校・特別支援学校において国際教育に取り組んでおられる、または今後それらに取り組むことを考えておられる教員の方を対象に実施してきた「教師海外研修」もその事業のひとつです。参加される教員の方々には、開発途上国の社会の実情や文化・習慣などを肌で感じ、JICAが実施する国際協力の現場視察を通じて、途上国のみならず世界共通の問題や日本と世界の国々の関わりを理解していただき、その学びや知見を日本で待つ子どもたちに還元していただくことを目的として実施しています。

コロナ禍で中断していた本事業も４年ぶりに再開されました。今年度は中国４県・四国２県から計10名の先生方がナミビア共和国を訪問され、この海外研修での気づき、そして渡航前後に実施した国内研修での学びを活用して、それぞれの学校で授業実践に取り組まれました。さらにその内容を、本研修に参加していない方にも分かりやすく、類似の実践ができるよう編纂しなおしたものがこのプログラム集です。

本冊子が、「持続可能な社会の創り手」である児童生徒の育成に尽力されている教職員の皆さまの参考となり、学校教育現場での取組みの一助になれば幸いです。

独立行政法人 国際協力機構
中国センター 所長　村岡 啓道
四国センター 所長　山村 直史

目　　次

研修国概要 …… 3

教師海外研修概要 …… 4

海外研修レポート …… 6

海外研修日程 …… 17

【学びのプログラム】

ともに支え合い、ともに生きる	井 上 裕美子	20
身近な多文化共生	荒 木 亜紗子	31
異文化理解、相互理解・寛容、多文化共生	勝 部 知早野	42
世界の国に親しもう	田 淵　野 藍	57
世界はみんなつながっている～多文化共生と地域の未来～	阪 倉　順 子	67
未知なるものへの好奇心を育てよう！ ～他国の人と理解し合うために大切なもの～	田 中　麻 生	86
大きく考え、小さく行動する	樋 口　一 貴	96
多様性を尊重し、課題解決を図る主体性を育む	寺 田　美 優	121
開発途上国援助の手だてを考えよう	島 田　修 司	136
幸福な社会を考えるヒント	藤 原　孝 夫	148

※各章の「参考文献・引用資料」にある動画および資料のURLは本冊子作成時（2024年３月）のものです。
※記載内容は執筆者個人の見解であり、所属校およびJICAの見解を代表するものではありません。

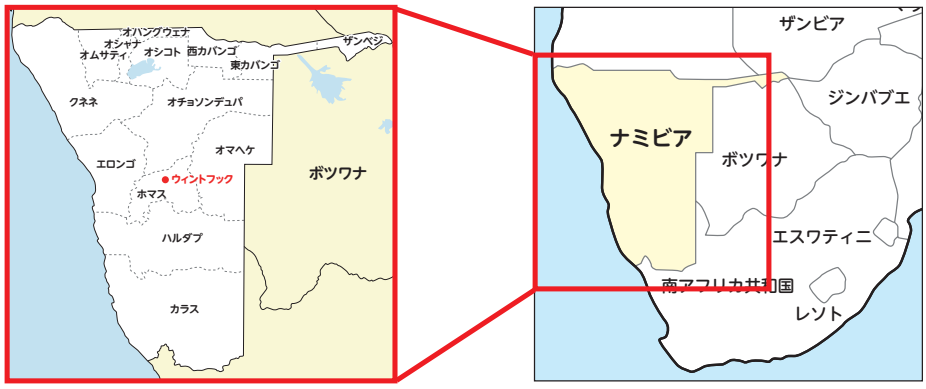
★本プログラム集はJICA中国HPでも公開しています。HPからのダウンロードも可能です。

JICA中国HP

研 修 国 概 要

ナミビア共和国

(Republic of Namibia)



首　　都：ウィントフック
面　　積：82.4万平方キロメートル（日本の約2.2倍）
人　　口：257万人（2022年 世界銀行）
政　　体：共和制
民　　族：オバンボ族、カバンゴ族、ヘレロ族、ダマラ族、混血、白人他
言　　語：英語（公用語）、アフリカーンス語、独語、その他部族語
宗　　教：キリスト教、伝統宗教
地理・気候：全土が乾燥帯に属し、海岸部および南部が砂漠気候、北東部はステップ気候に属する。
年間300日が晴天で、６月から８月の冬期は乾燥し、９月から11月が小雨季、２月から４月が大雨季。降水量は場所によりさまざまで干ばつも多い。世界でもっとも古いといわれるナミブ砂漠を有し、中部には天然の良港であるウォルビスベイがある。
通　　貨：ナミビア・ドル　※１米ドル＝約19.06ナミビア・ドル（2023年８月 Standard Bank）
一人当りGNI（国民総所得）：４,880ドル（2022年 世界銀行）
主 要 産 業：鉱物（ダイヤモンド、銅、ウラン、亜鉛）、牧畜、漁業（あじ、えび、かに）
主要貿易相手国：・輸出：中国（34.1%）、EU（17.4%）、南アフリカ（14.5%）
・輸入：南アフリカ（36.2%）、ザンビア（19.1%）、EU（9.2%）
経済について：豊富な鉱物やエネルギー資源（ウラン、ダイヤモンド、石油・天然ガスの他、レアアース、リチウム等のポテンシャルも有する）、世界有数の漁場、牧畜に適した温暖な気候に恵まれ、高い潜在力をもつ高中所得国（世界銀行カテゴリー）。また、豊かな自然や生物多様性を背景に、観光業も主要産業の一つである一方、失業率が22%（2022年 世界銀行）と高く、都市部と農村部の経済格差が著しい。2016年以降は経済が停滞、更に近年は干ばつや新型コロナ禍により経済活動一般が甚大な被害を受け、立て直しが急務。産業多様化や高付加価値化を目指している。

＜日本との関係＞
経 済 関 係：対日輸出 約33億円……自動車、機械類等
対日輸入 約19.7億円…えび・かに等の水産物、鉱物等
日本の援助実績（2020年度までの累計）
・有償資金協力：100.91億円
・無償資金協力：78.55億円
・技術協力：61.41億円
・2004年12月：青年海外協力隊派遣取り決め
・2006年４月：青年海外協力隊派遣開始
在 留 邦 人 数：42人（2022年10月 外務省）
在日当該国人：37名（2022年12月 法務省）

教師海外研修概要

JICAの国際教育プログラム

グローバル化が進む現在、地球に暮らす私たちが自ら足元を見つめ直し、日本を含めた国際社会が抱える課題に取り組むことが急務となっています。そのため、国際教育や開発教育、持続可能な開発のための教育（ESD）といった取組みを多くの教育機関が実践し、その関心と需要はますます高まっています。

また、改訂後の学習指導要領では「持続可能な社会の創り手」の育成がうたわれ、多様な価値観・生活習慣をもつ人々と国内外で共存できるよう、児童・生徒が互いの文化を理解し、尊重し合い、違いを認められるなど、新たな社会で生きていくために必要な資質・能力を育むことが求められています。

国際協力活動は主に開発途上国の現場で行われていますが、JICAでは途上国と日本の地域との懸け橋となるべく、国内でも様々な事業を行っています。中でも、長年にわたる国際協力の知見を活用して、小・中・高校や大学、教育委員会や自治体、市民団体などと連携して展開しているのが、国際教育プログラムです。

JICAでは、国際協力出前講座、JICA施設訪問、開発教育指導者研修といったプログラムを通じて、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりを支援しています。教師海外研修は、そのプログラムのひとつです。

教師海外研修とは

●ねらい

本研修は、国際教育・開発教育に関心を持つ教員を対象に、実際に開発途上国を訪問し、国際協力の現場を視察することで、途上国の現状や日本との関係性、国際協力への理解を深め、その成果を、学校での授業等を通じて、地球の未来を担う児童生徒への教育に役立ててもらうことを目的として実施しています。

国内で実施する派遣前・帰国後の研修では、ワークショップ体験などを通じて参加型学習の手法を学び、海外研修での知見をより効果的に還元するための授業づくりのサポートも行います。

帰国後は、教室にいる児童生徒はもちろん、地域において他の教職員や市民にもその経験を発信してもらい、持続的に国際教育・開発教育の担い手として活躍していただくこともねらいとしています。

主催：独立行政法人国際協力機構　中国センター（JICA中国）
　　独立行政法人国際協力機構　四国センター（JICA四国）
後援：外務省、文部科学省
　　鳥取県教育委員会、島根県教育委員会、岡山県教育委員会、
　　広島県教育委員会、山口県教育委員会、徳島県教育委員会、
　　香川県教育委員会、愛媛県教育委員会、高知県教育委員会、
　　岡山市教育委員会、広島市教育委員会

● 研修のながれ（2023年度）

募集・選考

○募集（４月～５月17日）　○書類選考、結果通知（５月下旬）　○面接選考（５月29日～６月５日）
○最終結果通知（６月９日）

派遣前研修

６月24日（土）～25日（日）　会場：NPD貸会議室 岡山駅前（岡山県岡山市）
○海外研修について：教師海外研修のねらい、研修日程と訪問先解説、安全管理について
○講義：「ナミビアの概要―歴史・民族・文化―」
　　高田 明 氏（京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究 研究科 教授）
　　「過年度参加者による体験談」（2019年度教師海外研修参加教員）

海外研修（ナミビア）　８月７日（月）～16日（水）

海外研修レポート提出　８月25日（金）

帰国後研修　９月２日（土）～３日（日）　会場：岡山国際交流センター（岡山県岡山市）

・海外研修で得た資料や情報を参加者全員で共有・整理。参加型手法を改めて学びながら、現地の知見をどう教材化するか考え、授業案を作成。
（助言指導：山中 信幸 氏（川崎医療福祉大学非常勤講師・開発教育ファシリテーター））
・中国、四国の教師海外研修過年度参加教員（2016年、2019年）による講義。授業実践への事前準備、テーマ設定や児童・生徒の様子、周囲の教職員の反応や今後の課題などを共有し、参加教員の授業案作成へのアドバイスも行う。

所属校での授業実践　９月～2024年１月

授業実践報告書提出　2024年１月15日（月）

授業実践共有会　2024年１月27日（土）　会場：岡山国際交流センター
海外研修参加者全員が所属校で行った授業内容、児童生徒の変容や課題などを報告。

授業実践報告会　2024年１月28日（日）10:00～13:30　会場：岡山国際交流センター
一般参加者30名を対象に開催。ナミビア研修の報告、小・中・高校の教員が行った授業をワークショップ形式で実施。

海外研修レポート

8月7日（月）、8月8日（火）

勝部　知早野

訪問先

①成田国際空港→タイ・バンコク→エチオピア・アジスアベバ→ナミビア・ウィントフック
②初日オリエンテーション

研修内容

世界のつながりを知る（国境を越えた移動、協力）、ナミビアを知る。

所　感

バンコクまでは、６時間45分、バンコクからアジスアベバまでは８時間40分、アジスアベバからウィントフックまでは５時間45分と、飛行時間が合計21時間10分のフライトでナミビアを目指した。乗り換えの時間も全て含めると時間にして、25時間20分かかってウィントフックに到着した。凝り固まった体で荷物を引きながら、ずいぶん遠くまで来たと実感しつつ、共に移動する民族多様な多くの乗客の姿に、長かった新型コロナウイルスの流行による海外移動の自粛が終わり、再び世界の人が国境を超えて動いているのだと感じた。

長いフライトの最中、何度も機内食が出た。“Beef or chicken?“とオプションがある。選べることに喜びを感じつつも、ふと、すべての乗客がどちらを選んでも良いほどの在庫があるということや、寝ているためにたくさん残している乗客が多いことに機内食のフードロスが気にかかった。調べてみると、SDGsに向けた取り組みを求める声から、事前にキャンセルできる制度や未着手の機内食を慈善団体へ寄付する活動が出来てきているということだ。過剰なサービスの提供に利用者も意識を向けることが重要だと感じた。

空港に着くと、JICAナミビアスタッフの坂田さんが温かく迎えてくださり、ホッとした。からっと乾燥した空気が半袖に気持ちよく、強い日差しを肌に感じた。この国は洗濯物が１時間くらいで乾くとか、鼻が乾燥して鼻血が出るため、リップクリームを鼻の中にも塗るとか、非常に乾燥していると事前に聞いていた。日本のじめっとした暑さとは対照的だ。

初日オリエンテーションの中で、JICAのナミビアでの取り組みを学んだ。そこで、世界の国が認める普遍的価値とは何かを議論する場面があった。日本がしているナミビアの経済発展を支援する活動は本当にナミビアにとっていい活動なのか。環境破壊や経済格差を助長することにならないか。それに対する答えとしては、失業者の多いナミビアについてはまず人の命が保証され、生きていけるようにするという普遍的価値のために活動をしているということだった。SDGsは17のゴールがあるが、それぞれの国によって現状と優先すべき事柄が異なるので簡単には全ての達成ができないということ、ナミビアにおける格差や失業者の多さは、取り組むべき喫緊の課題であるのだということを強く感じ、より良い社会を作る上で相手の見ている景色にしっかりと目を向けることが大切だと思った。

ナミビアの HOSEA KUTAKO 国際空港にて

２種類の機内食

多文化に合わせた空港内の礼拝施設

8月9日（水）午前

田淵　野藍

訪問先

NIED（国立教育開発研究所）

研修内容

●自己紹介→双方の自己紹介を英語で行った。
●所長挨拶と説明→NIEDについて・ナミビアの教育について聞き、その後に質問、各専門の分野の方から回答していただいた。
●施設見学（ティータイムを含む）→NIEDの方と会話をしながら施設見学。

所　感

NIED（National Institute for Education Development）が組織として行っていることは、大きく分けて２つあると説明を受けた。一つ目は、カリキュラムの構築、二つ目は、教員養成である。具体的には、教科書の選定や指導要領の開発、教員研修ということであった。これらを聞いて、NIEDがナミビアの教育の中核であることを改めて感じた。また、所長の話す言葉からは、力強さや強い思い、信念のようなものが伝わってきた。その中でも、「教育とは、質の向上が最も重要である。そのために改善を繰り返していく。」という言葉が印象的だった。独立から現在に至るまで、人種、肌の色、男女、貧困など多くの課題がある中で、ナミビアの教育を進めよう、改善しよう、よりよくしようという強い思いが伝わってきた。また、そのために、「Based on 4 national goals」（「access」「quality」「democracy」「equality」）の４つを目指して、「on going program」（開発し続けるプログラム）として教育を位置づけるということも知り、よりよい方向へと変化しようとするナミビア教育の力強さを感じた。そのために、JICAを含む様々な国際的な機関または機構に協力を求め、他国の教育の良さを取り入れたり、自国の良さや改善点を再検討したりすることを知り、国際的な視点から自国の教育を見る視点の良さや、多様な考え方を受け入れる寛容性を感じた。

一方で、質疑応答の時間から、ナミビアの教育事情における課題も改めてわかった。大きく分けて３つあったように思う。１つ目は、子どもたちの基礎学力の弱さ（計算、読み、書き）、２つ目は、母国語と英語の双方の教育を行う難しさ、３つ目は、教員の指導力の低さである。私たちの質問に、各専門分野の方が回答してくださった。どの回答においても、課題解決に向けて進めるためには、ナミビアの経済面、文化・歴史的な背景が必ず絡むことが印象的だった。考えてみれば当たり前のことであるが、国の将来を担う子どもたちの教育を考えるにあたって、国全体の課題は無視できないと改めて感じた。（これは日本においても同様であると思う。）

全体を通して、ナミビアの教育事情を知るにあたり、様々な立場の方から考えや意見をいただき、客観的にナミビアの教育を知ることができた。また、私たちの質問一つ一つにNIEDの全員が、丁寧に、詳細に、強い思いや考えをもって答えてくださったことが何よりも強く印象に残った。この時間に知ったことや感じたことをもとに、今後の現地の学校の視察を行いたい。

8月9日（水）午後

阪倉　順子

訪問先

Ebenhaser小学校

研修内容

●Ebenhaser小学校訪問、JICA海外協力隊活動視察（森結香隊員）
昼食会場で森隊員と合流、隊員活動等の話を聞く。小学校へ移動し２年生算数の授業見学。現地語を話す先生と協力しながらの授業の様子がよく分かった。その後、校内見学・森隊員への質疑応答となった。

所　感

午後は鉱山資源の町Karibibへ移動した。Karibibは山に囲まれた小さな町で大理石や宝石の採掘・加工、そして金の鉱山が有名である。人口は約5000人で母語の違った様々な部族が住んでいる。Ebenhaser小学校は日本の年長クラス～７年生（中学１年生）までの約1200人が通っており、教師は35人である。教師も教室も足りないために、子どもたちは学年ごとに午前と午後に分かれて登校していた。３年生までは母語ごとにクラスを分けて授業が行われるが、４年生からは全員が英語での授業となる。今回は、２年生算数「時計」の授業で、森隊員の英語を現地のギルソン先生が子どもたちの母語に訳しながら進める授業を見学した。

授業が始まると、子どもたちは後ろに並ぶ他国の参観者のことが少し気になりながらも、森隊員とギルソン先生の方をしっかり向いて集中して授業を受けていた。手元を見ると、段ボールや空き箱といった廃材を活用した手作りの時計を持っており、教師の指示のもと、自分の「起きる時刻」「朝ごはんを食べる時刻」「学校へ来る時刻」「家へ帰る時刻」「寝る時刻」等を表していた。森隊員とギルソン先生との二人の呼吸もピッタリで、全体交流では友だちの意外な発表を聞いて「え？そんな時間に起きているの？」と教室の中が笑いで包まれる場面もあり、子どもたちが時計に親しみながら楽しく学習を進めている様子を見ることができた。そして、授業の最後はお祈りで締めくくられ、日本では見られない厳粛な雰囲気に大変驚かされた。

授業後には校内を案内して頂いた。教室には現地語や英語で書かれた様々な掲示物、廃材を活用した教具など、先生方の工夫が随所に見られた。また、パップ（ナミビアの主食とうもろこしの粉からできたもの）を作る給食調理場、昼食が買える売店を案内してもらった時には、学校での給食しか食べていない一日一食の子どもがいることを聞き、キラキラした子どもたちの笑顔の裏にある厳しい現実に対してのやるせなさを感じた。

森隊員との質疑応答では、厳しい家庭環境に置かれた子どもたちが多い学校ではあるが、月２ドルを支払える家庭は毎月学校に納め、それを無料の給食配布や文房具代にあてるといった共助の意識があるということ、いろいろな民族が集まっているため違うことが当たり前で排除やいじめがないということなど、日本の学校とは違うプラス面についても聞くことができた。

この日のふり返りでは、午前中のNIED（国立教育開発研究所）で聞いた「研究の成果」と午後のEbenhaser小学校で見た「現場」とのギャップから、英語教育とは、特別支援教育とは、インクルーシブとは、いじめとは、地域とは…等教育の理想と現実を目の当たりした後に考えたことや、日本の教育を改めて見つめなおしたことを伝え合う貴重な時間となった。

現地語教師との授業

校内には図書室や売店もある

手入れが行き届いている校庭

8月10日（木）午前

荒木　亜紗子

訪問先

Ubasen小学校、JICA海外協力隊活動視察（豊田桃香隊員）

研修内容

●校内見学

自己紹介や校長先生からの学校紹介の後、校舎、運動場、授業の様子、調理場を見学した。

●豊田隊員の授業見学

４年Ｂ組の算数の割り算の筆算の解き方についての授業を見学した。

●交流授業

・４年Ａ組のクラスでは、まず「幸せなら手をたたこう」の手遊び歌を一緒にした。次に６人グループに分かれ、「ラッキーハンカチゲーム」という音楽が止まった時にハンカチを持っている児童に日本の教師が好きな食べ物や色など質問をする交流を行った。

・７年Ａ組のクラスでは、まず「幸せなら手をたたこう」の手遊び歌を一緒にした。次に５、６人のグループに分かれ、事前に用意してもらっていた将来の夢（やりたいこと）の絵を紹介してもらい、日本の子どもが描いた将来の夢も紹介する交流を行った。

●休憩時間

ナミビアの給食「パップ」を食べる様子や児童生徒の歌や民族ダンスの見学をした。

所　感

「児童生徒に対して、教室の数が足りないから、午前と午後に分かれて授業を行っている。」とお聞きした通り、１つの教室に約40名と、どの教室も子どもたちでいっぱいだった。そんな中、T1として算数の授業をされている豊田隊員の話を一生懸命に聞く４年Ｂ組の子どもたちの様子がとても印象的だった。３年生までは母語による授業だが、４年生からは全ての教科が英語による授業となる。さらに、多くの子どもたちが苦手意識をもっているとお聞きした算数の授業。しかも割り算の筆算。母語で教えても難しい内容だと感じたが、手作りの教材の１つ１つに工夫が凝らされ、視覚的に分かりやすく、イメージしやすいようになっていた。また、筆算を解く順番を繰り返し唱えて覚えたり、声に出しながら解いたりする工夫も浸透しているように見えた。たまたま私たちが参観させていただいた授業は、子どもたちにとってはハードルの高い内容の日だったと感じたが、それでもあきらめずに真剣な眼差しで話を聞いたり、問題を解いたりする姿を見て、言語の違いや教科の得意不得意以上に、子どもたちが理解できるようになって欲しいという豊田隊員の熱い想いが、子どもたちに伝わっていることが良く分かった。子どもたちに向き合う真摯な態度、教材の工夫や子どもたちに合わせた教授法の大切さなど同じ教師として学ぶべきこと、再確認できたことが多くあった。休憩時間には、豊田隊員の周りに多くの子どもたちが寄ってきていた。授業の始まりのタイミングには子どもたちに教室へ戻るように声をかけながら、寄り添って教室へ帰っていく姿に、いつも同じクラスに行っているわけではないと言われていたのに、きっとどのクラスでも豊田隊員の人柄が伝わっていて、良好な人間関係の構築がなされているのだろうと温かい気持ちになった。

交流授業では、４年生でも、７年生でも「幸せなら手をたたこう」の手遊び歌を紹介すると、スッと受け入れ、マネをして一緒にできるところが、さすが多様性を受け入れ生活しているナミビアの子どもたち！と感じた。４年生の「ラッキーハンカチゲーム」では、少し時間が余ったので、その時間を使ってグループの全員にいくつか質問をしてみた。好きな動物を尋ねると、「チーター」や「ライオン」といったアフリカならではの動物だけでなく、「犬」といった身近な動物も出てきた。好きな教科では、「自然科学

と健康」や「家庭科」という答えが返ってきた一方で、苦手な教科は「算数」と口をそろえて言い、前学期はどういう評価がついたかまで口々に教えてくれる人懐っこさには驚いた。７年生では、将来の夢（やりたいこと）について尋ねた際、英語への理解度は高いと感じたが、少し深い話になると難しく感じる児童もいた。しかし、他の児童が現地語でさりげなくサポートし、自然と共助ができていた。大統領や歯医者など大きな夢をもつ児童もおり、その夢が叶うような教育改革や身近なモデルとなるべき家族や地域の人の就業率を上げることの重要性を感じた。

基本は授業と授業の間に休憩時間はないが、４時間目と５時間目の間だけ休憩時間があった。子どもたちは全員教室から出る。多くの子どもは調理場に集まり、パップと呼ばれるトウモロコシの粉で作られたお粥のようなものを順に受け取り、美味しそうに食べ、食事が終わると自分で大きなバケツのような中にお皿を入れ、そこで洗ってから返していた。この小学校に通ってくる子どもたちの保護者のほとんどが失業中で、食事は一日でこのパップ一食のみという子どももいるという話を伺った。日本でも給食が貴重な栄養源となっている子どもも少なくない。状況は違っても、学校の果たす役割の大きさを感じた。休憩時間の終わりに、多くの児童が集まり歌を歌ってくれた後、１つの民族が代表してダンスを披露してくれた。私たちや、他民族の友人が見守る中、堂々と踊る姿に自分たちの部族のアイデンティティを大切にする意識と、お互いの民族を認め合っている雰囲気が漂っていて、心が揺さぶられ、自然と涙がこぼれ落ちた。日本の誇るべきアイデンティティやお互いを認め合える多様性について、自分自身が改めて見つめ直し、児童と共に考えていきたいと感じた。

豊田隊員の算数の授業

食器洗いをする子どもたち

将来の夢の紹介

民族ダンスの披露

8月10日（木）午後

藤原　孝夫

訪問先

NIMT（国立ナミビア鉱業技術研究所）、JICA海外協力隊活動視察（加藤穂高隊員）

研修内容

学校紹介および実習見学（副校長・加藤隊員）

所　感

NIMTは、エロンゴ州アランディスを中心に設置され、加藤隊員が電気・電子設備教師として派遣されている職業技術訓練機関である。NIMTの目的はナミビアの未来を担う質の高い技術者の輩出にあり、全12学科で約４,000人の生徒が在籍している。NIMTの教育は、理論と実践の二本柱で展開され、最初の１年で専門教育に必要な基礎的な知識と技能を学び、２年目以降に専門教育に移行する。また、１・２年生は、半年間をジョブ・アタッチメント（日本のインターンシップに相当）に参加し、３年生は約１年間のジョブ・アタッチメントに参加することで確かな技術と社会経験を積む。NIMTでは、放課後の掃除を通じて規律を涵養しており、このような規律とジョブ・アタッチメントを通じた確かな技術を育む教育は、企業から高く評価されている。

「過去３年間の経済危機と地政学的危機が絡み合った結果、労働市場に対する不確実で多様な状況が生まれ、先進国と新興国の間、および労働者間の格差が拡大した。」と『仕事の未来レポート2023』（世界経済フォーラム）は指摘し、企業による労働者に対するスキルトレーニングの重要性を示唆している。NIMTは、この様なグローバルな課題に資する教育機関であると感じた。また、NIMTで活躍する加藤隊員の姿からは、確かな技術教育・現場と共生する態度・ナミビアの未来を技術面から支えようとする志を感じた。そして、JICAナミビア支所の活動が、現地の人々と共に問題解決の方途を探るという、現地に寄り添った協力であることをここでも実感した。さらに、NIMTでは、長期にわたるジョブ・アタッチメントを通じて、企業が求める技術を実践的に習得することを目指している。この長期間のジョブ・アタッチメントは、科学技術イノベーション政策を推進する日本においても魅力ある長期研修制度であると考える。一方、NIMTの在籍は、ナミビアの性別役割分業観に由来して男子に偏在している（男女比は、男子10に対し女子１程度）。これは、理工系学部に男子学生が偏在する日本に共通する社会課題であると感じた。今回のNIMT訪問を通じて、確かな技術の習得がだれ一人取り残すことなく享受でき、格差が是正されていくことの必要性を感じ、そのために自分ができることについて自問する良い機会となった。

学校紹介

実習施設見学

実習風景

8月11日（金）

井上　裕美子

訪 問 先

ウォルビスベイ港視察（物流ハブプロジェクト）

研修内容

●ウォルビスベイ港視察（物流ハブプロジェクト）
　JICAの取り組みである、物流ハブプロジェクトの見学をさせて頂いた。
●JICA海外協力隊の方達との食事会

所　　感

　ウォルビスベイ港は、JICAも力を入れている取り組みの一つである。ナミビアは、日本と比べて面積が２倍あり、人口が半分ほどしかいない。ナミビアの持ち味を活かす取り組みとして、長いスパンをかけて行われてきたプロジェクトである。一つの港だけでなく、北港と南港を開発・運営している。小ぶりな船だけでなく、コンテナをたくさん積載できる大きな船を接岸できることが強みである。隣国のザンビア、コンゴでは銅が採れ、どの港から出すか選べるのでより安く、安全に輸出できる方法を教えて、他国ではなく、ナミビアを選んでもらえるようにコンサルタントしている。
　この後の食事会では、国際的に働く上で大切なことを教えて頂いた。桑原さんには「①途上国から求められる技術力、②相手の背景を推察するコミュニケーション力、③やる気」ということを教えて頂いた。自分の価値観を押し付けるのではなくて、相手と対話をしながらより良いカウンターパートの関係を築いていくことが大切である。また、松田さんからは、「自分が当たり前だと思っていることが当たり前じゃないと思える人になる。」と教えて頂いた。

ウォルビスベイ港にて集合写真

ウォルビスベイ港の説明を受けている様子

港のコンテナの様子

お昼のお食事会（松田さん）

8月12日（土）

寺田　美優

訪問先

①Sossusvlei　代表的な観光地（ナミブ砂漠の砂丘）視察
②サンセットツアー

研修内容

●ナミブ砂漠
ナミブ砂漠のなかでも代表的な観光地であるDeadvlei、Dune45を視察した。
●サンセットツアー
宿（Bushman's Desert Camp）のサンセットツアーに参加した。

所　感

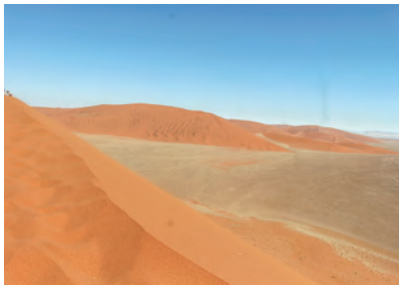
ナミブ砂漠は世界最古の砂漠であり、ナミビアの大西洋岸に沿って幅約100キロメートル以上にわたって分布する海岸砂漠である。その中でもSossusvleiと呼ばれる代表的な観光地を訪れた。その中のDeadvleiは、白い地面に、何百年も前に枯れたまま残った木が立っている場所である。有機物を分解する生命がおらず、枯れた木がそのまま残っているそうだ。過酷な環境であるが、キリアツメゴミムシダマシやアリなどの生物を見ることができ、その生命力に驚いた。木はすべて独特な形をしていて、それぞれお気に入りの一本を見つけ、写真撮影を行った。

Dune45では、ナミブ砂漠の砂を肌で感じるために、裸足で登った。砂はとても細かくさらさらとしていて足が沈んでしまい、上手く歩けない。砂はひんやりとしているが、表面の砂は太陽が強く照りつけると徐々に熱くなる。また、風が強く吹き、砂が体に当たってしびれるように痛くなった。風が吹き砂丘の尾根の形が変わるのも分かった。砂丘が絶えず変化していることから、自然の力を感じることができた。私は頂上まで登れなかったが、それでも砂丘からの眺めは美しかった。空の澄んだ青さと輝く砂の赤茶色のコントラストはいつまでも記憶に残るものになりそうだ。

Bushman's Desert Campに戻り、サンセットツアーに参加した。広い空の色は変わり続け、地平線の先に太陽が落ちるように沈んでいった。日本では体験できない、言葉では表現できない美しさに圧倒された。大地を前に、自分の悩みはとても小さいもののように感じた。

この日のふり返りでは、自然の偉大さや観光地のごみ問題について話が出た。世界各地の観光地ではごみ問題が課題となっているが、Sossusvleiではごみがほとんど落ちていなかった。美しい自然を前にごみを落としてはいけないという意識が人々のなかに生まれるのか、罰金があるのか、なぜかは分からないが、この環境から学ぶべきことがありそうだ。私たちは豊かな自然環境のなかで生活しているが、本体験から自然に生かされている存在であり、今後も共生するために何をすべきか考えていくことの大切さを再認識することができた。また、宿を経営している方はマラウイ隊員OVの方であった。これまでの経験やナミビアの現状について教えていただき、非常に充実した時間となった。

Deadvlei の木の前で


Dune45

地平線に沈みゆく夕日

8月13日（日）

島田　修司

訪問先

Bushman's Desert Camp → ウィントフック市街
Katutura
（市場、現地職員宅訪問）

移動途中、南回帰線を超える。英語のCapricornは「山羊座」の意味で、古代バビロニア時代の呼び方に由来する。

研修内容

●ウィントフック視察
●中間ふり返り（これまでの研修のふり返り、山中先生指導助言）

所　感

宿のオーナーよりブッシュマンについての説明を受ける。

サン族は毒矢を使って、人も動物も襲っていたため、人として扱われず、白人も黒人もサン族を狩っていたという歴史がある。移動民族で水分は獲物の血液などから得ていた。１回に10kgもの肉を食し、数日は何も食べずに生活できた。食事後のお腹は膨れ上がり、そのためお腹には深い皺が寄っていた。大地でそのまま食べることで、肉には砂などが付着していたため40歳ころには歯が擦り切れてなくなってしまっていた。寿命は50年くらいで、移動民族のために出産は10年に１度くらいのペースであった。他民族国家であり、様々な種族からなるナミビアの一面を知る機会となる。

また、荒野にたたずむ宿のため、水源や電気供給が気になるが、そのことについても説明を受けた。水源はボーリングによって地下約230mからくみ上げている。電機は太陽光発電、及び蓄電設備によって供給されている。また、周辺の植生について、この乾いた大地に根を生やしている樹木（アカシア）は地下80mまで根を伸ばしているとのこと。大自然の中で生きる動植物のたくましさと、そこで生活することの大変さ、そして人の英知と技術を感じる。

ウィントフックに帰着し、タウンシップのカトゥトゥーラ地区を訪れる。ナミビアが南アフリカに併合されていた頃のアパルトヘイト政策下における黒人居住区である。そこの市場を訪れ、牛肉とパップ（トウモロコシやヒエの粉をゆでて調理したナミビアの主食）を手でいただく。治安が悪く、要注意とのことであったが、日曜日ということもあり、とても活気があって、人々の生活の息づかいを感じることができた。（昆虫食にも挑戦したかったが、既に売り切れていたためいただくことができなかった。）

その後、現地職員宅を訪問。一般的中流家庭の生活を垣間見る。

宿舎において、これまでの研修視察で学んだことや感じたことなどについてふり返りと気づきを共有した。

8月14日（月）

田中　麻生

訪問先

在ナミビア日本大使館

研修内容

●表敬訪問…大使との昼食会（研修の所感など報告）
西牧大使、定本参事官、教師海外研修団12名、JICAナミビア支所洲崎支所長

●最終報告会に向けての準備

所　感

研修も終盤になり、みな緊張した面持ちで表敬訪問に向かった。挨拶を交わして、それぞれの席に案内された。大使、参事官のあいさつの後、各自、自己紹介と今回の研修についての所感を述べた。それら所感について、大使が思うところをお話しくださった。

まず、８月８日（火）西村経済産業大臣がナミビア共和国に来て、アルウェンド鉱山・エネルギー大臣及びイープンブ産業化・貿易大臣との間で、鉱業分野の協力、投資環境整備及び経済協力に関する共同声明に署名したことが話題になった。両大臣が、今後の鉱業分野での協力拡大についての原則を確認したことやクリーン水素の分野での協力の可能性についても議論していたことを教えていただいた。

次に、アフリカのお米の話が研修団から出て、ナミビアのお米プロジェクトについてもお話しいただいた。アフリカの多くの地域では、トウモロコシ類の粉をお湯に溶かしてつくる「ポリッジ」といわれるものが主食になっている。しかし、近年ではお米の消費が増え、需要が高まっている。また、作る側にとっても、トウモロコシよりもお米の方が２～５倍の値で売れることから、栽培する人が増えているという。また、国内の人口が少なくても、保存ができるお米だと他国に輸出できる利点もある。これもまたJICAのプロジェクトで、帰国後、サイトで調べてみるとナミビア通信～のんびり～2019年７月No.11にその記載があった。

最後に、外務省ODA出前講座の話を教えていただいた。調べてみると、100回以上の開催記録があり、主に高校や大学が利用していた。

研修の最終報告会資料作りの前に、大使とお話しでき、国家間で行われる経済活動や経済協力という、もう一つ新たな視点からナミビアを見る貴重な時間になった。

オゴンゴライス

表敬訪問　記念撮影

昼食会の様子

お話を聞きながら会食

8月15日（火）

樋口　一貴

訪 問 先

JICAナミビア支所

研修内容

●研修参加者発表

ペアでの５グループによるテーマに分かれての発表。以下、５つの発表テーマ。

① NIED　② Ebenhaeser小学校　③ Ubasen小学校　④ NIMT　⑤ ウォルビスベイ

所　　感

上記のテーマ別に、三観点（①所感：JICAの事業や関わり・国際協力の在り方　②授業づくりや今後の展望：どんな理由でどんな学びにつなげるか　③深めたいこと・疑問点など）に絞ってまとめた内容を発表した。各発表後には、さらに詳細な情報や疑問点への気付き等を洲崎支所長から即座に頂くことができ、より一層深く学べる時間となった。

これらの発表を通して、学校が果たせる役割は何か？その教育や施策がなぜ必要で、次にどんなことが起きるのか？限られた資源で最大限のパフォーマンスとは？どのような社会であることが望ましいか？魅力あふれる国際協力の職に対する保障とは？自分の思い込みでストーリーをつくらないようにするためには？などと、考えを巡らせることにつながった。

また、キャリア教育の視点において協力隊員の姿から「楽しみ・苦しみ・チャレンジ」を学ぶことができる、とふり返りの中から感じた。自分の意志を大切にできる、壁を乗り越えられる、働くことについて考えられる、このようなことを考えるきっかけを与えられる隊員たちの姿を、日本の子どもたちや地域の人々に伝えていきたい。

あっという間のナミビアでの研修を終え、空港に向かった。ウィントフックからアディスアベバ行きの機内で、ウガンダ人のトニーという男性と隣席になった。彼は、元々教師だったが現在は国連WFP職員を務めているようだ。お互いの情報を交換する中で、「日本といえば、JICAを知っていますか？」というトニーからの問いに対して『はい、私たちはJICA関連でナミビアを訪れました』と答えると、「JICAのつながりなのですね！ JICAはアフリカのあらゆる地域で活動してくれていて、その貢献度の大きさに大変感謝しています！」と話が広がっていった。ここでも「蒔いた種」を感じることができた。即効性がなかったり成功といわれているプロジェクトは少なかったりという話を各方面で伺ったが、確実に残っているものがそこにあった。これは、今後の私たちの活動にも通じるものがあると思う。

研修参加者発表

現地職員との集合写真

帰路航空機内

ナミビア研修日程

月　日		内　　容	移動・宿泊
8月7日（月）	午後	出発前オリエンテーション	
	夜	成田空港を出発、タイ、エチオピア経由でナミビアへ	
8月8日（火）	午後	ナミビアの首都ウィントフックに到着 JICAナミビア支所によるオリエンテーション、事業概要説明	ウィントフック
8月9日（水）	午前	【JICA海外協力隊活動視察】 NIED（National Institute for Educational Development）訪問	ウィントフック ↓ オカハンジャ ↓ カリビブ ↓ オマルル
	午後	【JICA海外協力隊活動視察】 Ebenhaeser小学校訪問	
8月10日（木）	午前	【JICA海外協力隊活動視察・子どもとの交流プログラム】 Ubasen小学校訪問	オマルル ↓ アランディス ↓ スワコプムント
	午後	【JICA海外協力隊活動視察】 NIMT（Namibian Institute for Mining and Technology）訪問	
8月11日（金）	朝	スワコプムントの中心地を視察	スワコプムント ↓ ウォルビスベイ ↓ ソリティア
	午前	【JICA事業視察（有償資金協力）】 「物流ハブプロジェクト」ウォルビスベイ港視察	
	夕方	マラウイで活動したJICA海外協力隊経験者が経営するホテルにて意見交換	
8月12日（土）	終日	ナミブ砂漠散策	ナミブ砂漠
8月13日（日）	午前	移動	ウィントフックへ移動
	午後	ウィントフック着、市場など市内見学	
	夕方	ホテルにて研修の中間ふり返り	
8月14日（月）	午前	市内にて教材収集 在ナミビア日本大使館訪問	ウィントフック
	午後	研修のまとめ、報告会準備	
8月15日（火）	午前	JICAナミビア支所スタッフへ研修報告	ウィントフック ↓ エチオピア
	昼	ホセア・クタコ国際空港へ出発	
	午後	空路にて乗継地のエチオピアへ	
8月16日（水）	夜	成田空港到着	エチオピア ↓ 成田空港

学びのプログラム

ともに支え合い、ともに生きる

はじめに

世界には私たちがまだ知らないことがたくさんある。食べ物、文化、そして音楽。世界にはそれぞれが大切にしている文化や、多様な価値観がある。日本にも、伝統的な文化や言葉があり、世界にも伝統的な文化がある。それらに目を向けることで、世界は多様であることや、異なる文化や習慣を尊重し合うことが大切であると気付く。そこで、ナミビアを通して異文化への興味・関心を持ち、広い視野で物事を考える力を養って欲しいと思い、教材づくりに至った。

この教材の使い方・参加のルール

この教材は、小学生の児童を対象としている。ナミビアを通して世界の文化や音楽を身近に感じ、多様な価値観に触れることができる。アフリカの伝統的な楽器「ジャンベ」を演奏することで、多様な文化の一つに触れることを想定している。

全体のねらい

国際交流の果たす役割を考え、表現することを通して、我が国と経済や文化などの面で繋がりの深い国の人々の生活は、多様であることや、異なる文化や習慣を尊重し合うことが大切であると気付く。学習したことを基に世界の人々と共に支え合い、ともに生きていくために大切なことなどを多角的に考えようとする態度を養うとともに、これからの自分の生き方について考える。

アクティビティ1　「アフリカの音」

●概　要

このアクティビティは、全学年・音楽科を対象としている。授業の導入では、「アフリカの音」という絵本の読み聞かせを行う。この中にアフリカで演奏されている太鼓「ジャンベ」という楽器がでてくる。赤ちゃんの誕生を祝うとき、みんなで力を合わせて働くとき、楽しむとき、祈るとき、そして心や身体の病気を治すときなど、生活や人生のどんな場面でもジャンベを演奏し、その周りで踊る。そうすることで人々は自然や祖先の魂や目に見えない力の世界とのコミュニケーションをはかる。そのジャンベを実際に叩き、アフリカ独特のリズム、アフロビート（ポリリズム）を演奏してみる。

●ねらい

世界の様々な音楽に親しみながら、音楽の面白さやよさを感じ取ると同時に、それらの音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みと結び付ける。

●主な対象

小学生～中学生

●用意するもの

・ジャンベ
・絵本「アフリカの音」
・アフリカに関する動画、写真など（著作権フリーのものを検索する）
・ワークシート①（P22）：全員分

●所要時間

45分

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1．絵本「アフリカの音」の読み聞かせをする。	アフリカで演奏されている楽器、「ジャンベ」について知る。 ※アフリカの写真を投影するなど、子どもたちのイメージを膨らませることができると良い。
2．ジャンベを叩く。	ヤギの皮であることを理解させた上で、ジャンベを叩かせる。
3．ワークシート①を配布し、アフリカの独特なリズムのアフロビート（ポリリズム）について解説する。ワークシート①に記載されたリズムに合わせてジャンベを叩く。（12拍子のリズムで、●のところでジャンベを叩き、○のところはリズムをとるだけでジャンベを叩かない）	アフロビートの独特なリズムの雰囲気を感じてチャレンジしてみる。 下記「用語の解説」にある動画等を使っても良い。
ふり返り アクティビティを通して気づいたこと、また実際にジャンベでアフロビート（ポリリズム）を叩いてみてどう感じたか、ワークシート①の記入を通してふり返る。	

●用語の解説、資料

アフロビート：音楽のジャンルの一種。ポリリズムとは、単純なリズムの組み合わせから現れる、より複雑なリズムのこと。

参考文献・引用資料

・『アフリカの音』沢田 としき（作・絵）、講談社、1996年
・動画「世界一わかりやすいアフロポリリズム解説！ West African Polyrhythm Analysis」
https://www.youtube.com/watch?v=RN0T8_P2WDc
・「Afriqua『ブラックミュージックの原則：ポリリズム』」
https://www.ableton.com/ja/blog/afriqua-presents-principles-of-black-music-polyrhythms/

アフリカの音

名前【　　】

♪ 演奏してみよう

典型的なアフロポリリズム

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●	○	●	○	●	○	●	○	●	○	●	○
●	○	○	●	○	○	●	○	○	●	○	○
●	○	○	○	●	○	○	○	●	○	○	○

♪振り返ろう

演奏してみて、気が付いたことや、難しかったところを書きましょう。

アクティビティ2　「世界の中の日本」

●概　要

このアクティビティでは、アフリカ大陸の一部にあるナミビアの学校生活について考える。外国の人々の生活の様子などに着目してまとめることで、日本の文化や習慣との違いを捉える。

ナミビアの小学生は宗教によって話す言語が違い、伝統的な衣装が違う。その伝統的な衣装を着て登校する日もある。ナミビアは、伝統や宗教が生活の中に根付いていることに気付かせたい。また、日本と比べてどんなところが同じなのかを考えさせたい。同世代の世界の子どもたちがどんなことを考えているのかを知ることで、ともに生きていることを実感し、距離は遠いが、身近な存在と捉えてほしい。そして、日本から遠く離れた国、知らない国を知ることで多様な価値観や文化を知り、良さを知るきっかけになると考える。

●ねらい

・ナミビアを通して異文化への興味・関心を持ち、広い視野で物事を考える力を養う。
・日本と世界との関わりについて考える中で、これからの自分の生き方について考える。

●主な対象

小学校６年生

●用意するもの

・パワーポイント①（P25参照）
・タブレット（Jamboard）または模造紙とふせん
・ワークシート②（P28）

●所要時間

45分

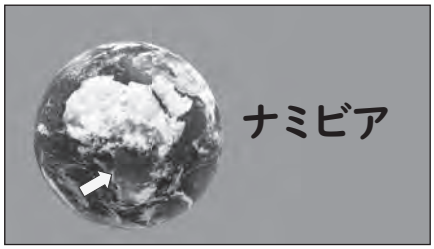
●すすめ方

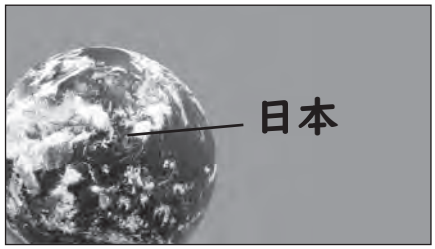
学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1．パワーポイント①を使ってアフリカ、ナミビアについて知る。	アフリカの気候や、面積など基本情報を学習する。 ※すでにアクティビティ１などで国や地域の概要を学習している場合は、これまでの学びのふり返りとしても良い。 ①全体に「ナミビアについて今までの学習でどんなことを学びましたか。」と問う。 （回答例：「自然が豊か」「伝統的な衣装を着て、登校する日がある」など） ②個人で考えた後に、さらに内容を詳しく捉えるため、ペアやグループで意見を共有する。

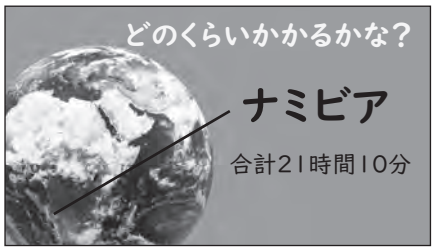
	※伝統や宗教・文化が生活の中に根付いていることに気付くように配慮する。
2．パワーポイント①を使って、ナミビアの小学校や小学生の生活について知り、日本の生活と比較する。まずは個人作業でふせん１枚に１つずつ、似ている点、異なる点をあげていく。	日本とナミビアを比較させながら、似ている点や違う点を意識して考えさせる。
3．グループで考えを共有する。 ＜想定される意見＞ （日＝日本、ナ＝ナミビア、共＝共通、似ている点） [衣] ・季節によって服装が違う（日） [食] ・給食がある。（共） ・世界中の料理が食べられる。（日） [住] ・校舎は１階しかない。（ナ） ・小３から英語の学習をする。（日） ・学校は午前と午後で子どもが入れ替わる。（ナ） 4．３．で出た意見をもとに、自分が暮らしている日本と比較し、疑問点や感想を共有する。（例：「なぜ、考え方や見た目が違う人と仲良く生活できているのだろう」、「互いを必要とすることが大切なのではないか」、「どんなことを考えながら生活しているのか、もっと話を聞いてみたい」など）	タブレットを使用する場合はJamboardを活用する。無い場合は、模造紙とふせんを使ってグループ内で出た異なる点、共通点などを整理していく。（P27「Jamboard見本」を参照）
ふり返り ワークシート②に感じたこと、意見をまとめる。	

パワーポイント①

ナミビアってどんなところかな？


ナミビア


日本


どのくらいかかるかな？
ナミビア
合計21時間10分

アフリカってどんなイメージ？

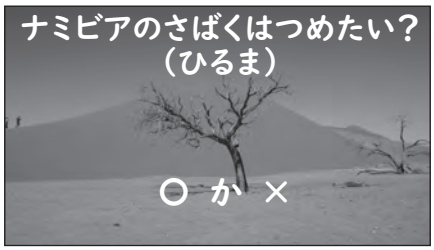
ナミビアのきれいなけしき

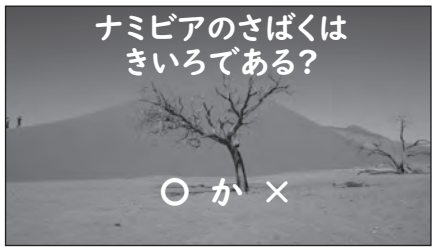
ナミブ砂漠（さばく）

DEADVEI（デットフレイ）

地平線（ちへいせん）

ナミビアクイズ


ナミビアのさばくはつめたい？
（ひるま）
○ か ×


ナミビアのさばくは
きいろである？
○ か ×

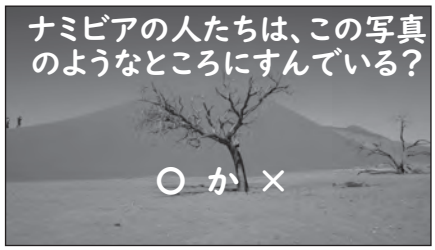
ナミビアでは、
日本人がすんでいる？
○ か ×

ナミビアでは、
オリックスという動物がいる？
○ か ×

オリックスを食べる？
○ か ×

肉（オリックス）

ナミビアでは
雨が少ないがお米ができる？
○ か ×


ナミビアの人たちは、この写真
のようなところにすんでいる？
○ か ×

ナミビアのまちのようす
どこがちがうかな？
どこがおなじかな？

ナミビアには小学校がある？
○ か ×

ナミビアの小学生

どこがちがうかな？
どこがおなじかな？

どこがちがうかな？
どこがおなじかな？

dala

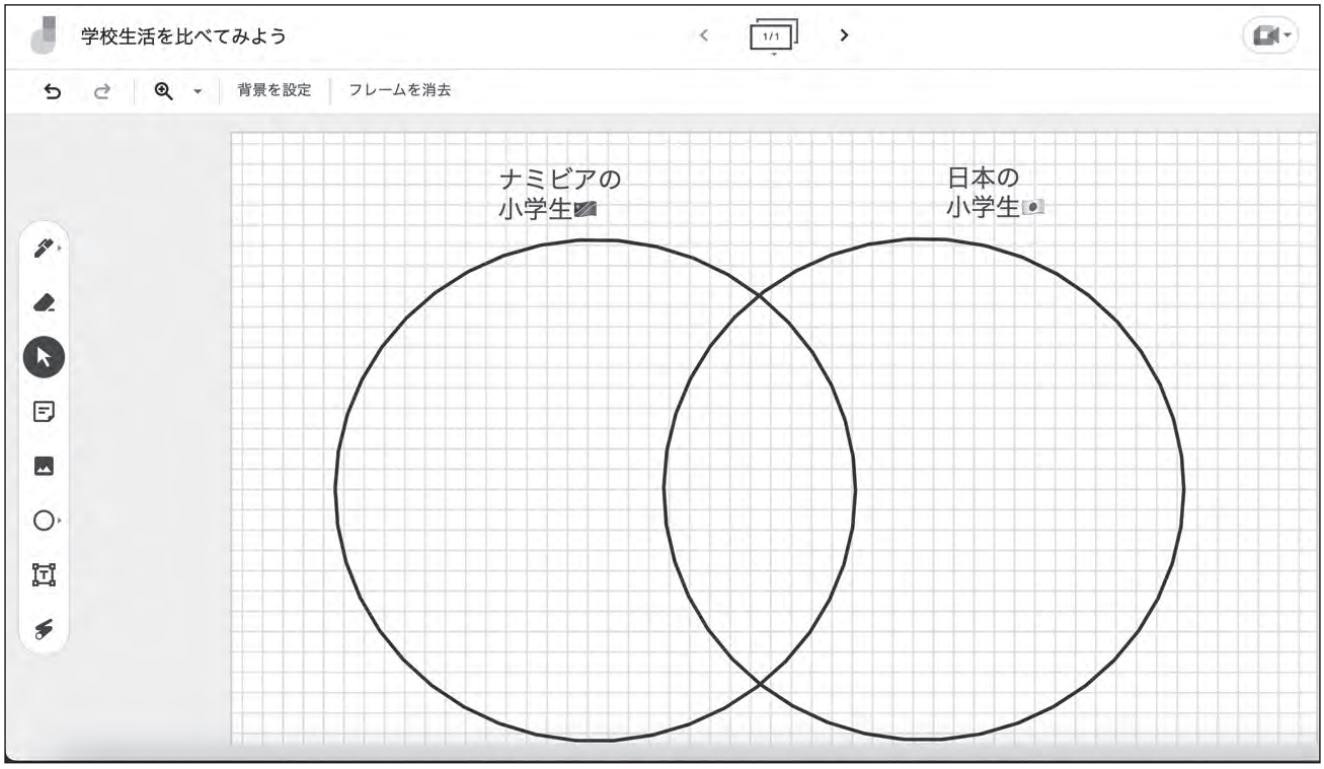
あるものを使って工夫!!

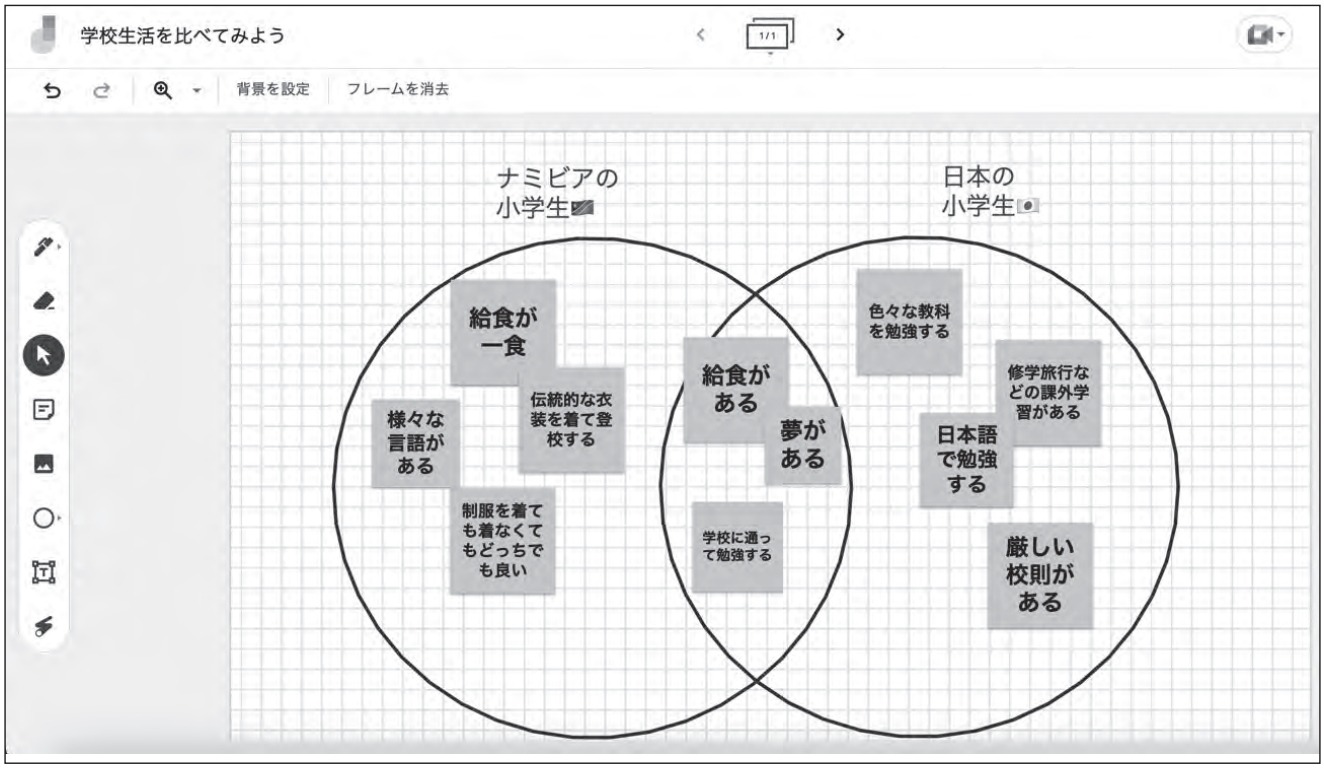
ここでは何をしているのかな？

どこがちがうかな？
どこがおなじかな？

Jamboard見本

※共通点、違う点を整理するためのものなので、ふせんの配置場所、まとめ方は教師や児童が自由に考えて良い。





ワークシート②

世界の中の日本

問題
　日本とナミビアの各国の文化・産業・自然などにはどのような特色があるだろうか。

	ナミビア	日本
衣食住の特徴		
学校の様子や子どもたちの生活		
季節の行事		
産業や自然		
日本とのつながり		

おわりに

　実際にナミビアで学んできたことを通して、子どもたちにナミビアを身近に考えさせたいと思った。子どもたちにとって、日本から遠く離れた国、知らない国を知ることで多様な価値観や文化を知り、それぞれの良さを知るきっかけになると考える。視野を広く持って新たな価値観に出会ったり、それを通じて日本の良さに気付いたりするができる。様々な価値観について認め合うだけでなく、多面的・多角的な視点から捉えられる力を養うことが大切だと思った。

実践事例報告

プログラム作成・実践者　井上裕美子　　学 校 名　西条市立田野小学校

担当教科　全教科

実践教科　音楽科（小学校６年生）、特別な教科　道徳・国際理解　国際親善

単 元 名　「世界の音楽に親しもう」

【授業の概要】

⑴ 単元のテーマ：「アフリカの音」

⑵ 単元のねらい

世界の様々な音楽に親しみながら、音楽の面白さや良さを感じ取ると同時に、それらの音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みと結び付ける。

⑶ 授業の概要

学習活動	時間（分）	○主な発問　◎中心発問 ・予想される児童の反応	○指導上の留意点 ◎評価
1　絵本「アフリカの音」の読み聞かせを行う。	10	○ジャンベってどんな楽器ですか。 ・アフリカの伝統的な楽器。 ・ヤギの皮が使われている。 ・いのちをいただいている。	○本時のめあてにつなげるために、「ジャンベ」について知る。
リズム、響きの特徴を感じ取りながら演奏の仕方を工夫して、演奏を楽しむ			
2　ジャンベを叩いてみる。	10	○ジャンベを叩いてみよう。 ・どんな風に叩くといい音が鳴るだろう。	○伝統が生活の中に位置づいていることに気付かせる。
3　アフロビート（ポリリズム）を叩く。	10	◎アフリカの独特なリズムを叩いてみよう。 ・いつものリズムと違って難しい。 ・何分の何拍子なんだろう。	◎ジャンベの演奏を工夫して行うことができたか。（演奏）
4　感じたことや考えたことを書く。	10 5	○伝統的な楽器を叩いてみてどうでしたか。 ・アフリカにはアフリカの伝統がある。	○「ジャンベ」が伝統的な楽器であり、いのちをいただいていることに気付かせる。

⑷ 指導上の留意点

世界の様々な音楽に親しみながら、音楽の面白さや良さを感じ取ると同時に、それらの音楽を特徴付けている背景（文化、民族、歴史など）と音楽の仕組みを結び付けていきたい。また、音楽を聴く中で感じ取ったことや聴き取れたことを言葉や文字で表現し、児童が互いに伝え合うことで、それぞれの感じ方や受け止め方の違いを認め合う態度、能力を育てたいと考えた。

⑸ 児童生徒の感想や学び・気づき

・ジャンベについて知ることができた。
・アフリカの伝統的な楽器を初めて知った。鳴らしてみると、とても響く音で驚いた。
・演奏会では、楽しんで演奏することができた。これからも、世界の音楽を演奏する機会があったら演奏してみたい。

⑹ 児童生徒の様子

音楽フェスティバルの様子

ジャンベを叩いている様子

【授業実践をした上での感想・ふり返り】

この授業を行った後の２ヶ月間、４～６年生の児童は「音楽フェスティバル」に向けて『ライオンキング」の合奏を練習していった。ジャンベを主役とした構成とし、本番ではアフリカの大地をイメージして、セリフやアフリカのダンスも交えて演奏を披露することができた。演奏曲のルーツとなった地域や国について一定程度の時間をかけて学ぶことで、アフリカの文化や伝統を身近に感じることができたのではないだろうか。世界の音楽を知ることで、日本の伝統的な音楽にも目を向け、お互いの良さを大切にして、音楽と関わっていって欲しい。

身近な多文化共生

はじめに

在日外国人の児童が在籍したり、転校してきたりすることが増えているが、ベトナムやネパールなど出身国や性別、日本語を理解できるレベルも異なり、教師も児童もどのように接すれば良いか戸惑うことがある。４月にベトナムから転校してきた６年生の児童に対し、日本人の児童が親切心から過剰に関わろうとしたことで、ベトナム人児童は、慣れない日本での学校生活に戸惑いを覚えている様子も見受けられた。一方で、同じく４月にネパールから転校してきた５年生の児童は、日本人の児童同士がじゃれ合うように、国籍や言語に関係なく、他の児童とじゃれあったり、コミュニケーションを取ったりしている。今回のプログラムを通して、「日本語が分からない外国人だから○○しなければならない」「日本に住んでいるから○○すべき」といった固定概念をもつのではなく、お互いを尊重し、多様性を認めて共生していける社会を小さな頃から自然と築いていけるようになってほしい。

この教材の使い方・参加のルール

最初に、多くの日本人が海外に住んでいること、児童が暮らす地域にも外国人が多く住んでいることに注目する。そして、身近な存在である外国語指導助手の先生から、実際にあった話を聞くことで、日本でも在日外国人に対する差別や偏見が起きていることを知り、より身近な出来事として捉えられるようにしたい。

「あってもいい『ちがい』・あってはいけない『ちがい』・判断が難しい『ちがい』」で最初に扱う事例は、誰にとっても分かりやすく「あってはいけない」と感じるものを選び、その後に使うワークシートには、意見が分かれるようなもの、各自に葛藤が起きるようなものを選ぶことで、話し合いがより活発になると思われる。

全体のねらい

・自他の違いや文化や習慣の違いに気づき、正しく相手を知ることで、肯定的に受け入れることができる。
・在日外国人たちの現状や課題を正しく理解し、同じ人間として多様な価値観を尊重し合うことができる。
・１つの答えを出すのではなく、人によって様々な考えがあることを理解し、お互いの意見を尊重できる。

アクティビティ　「あってもいい『ちがい』・あってはいけない『ちがい』・判断が難しい『ちがい』」

●主な対象

小学校高学年～中学生

●用意するもの

・パワーポイント（P34）（導入クイズやワークシートの使い方を提示）
　※ここに教師や外国語指導助手が体験したエピソードを入れると良い。
・個人作業用ワークシート（P37～38）：全員分
・「ちがい」カード（P35）：グループ分（予め切り離して４枚１セットにしておく）
・「ちがい」カードを置く用紙（P36）：グループ分

●所要時間

50分～

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1．クイズ形式で「地域に住んでいる外国人の数」「海外に暮らす日本人の数」などを考える（パワーポイント参照）	身近に外国人が多く住んでいたり、海外にも日本人が多く住んでいたりすることに気づくようにする。
2．日本に住んでいる外国語指導助手の体験談①～④を児童に読み聞かせる。（P33資料１参照）	身近な人から実際の体験談を聞くことで、より身近な出来事として捉えられるようにする。
3．ワークシートを全員に１枚ずつ配布し、①～④までの状況についてあってもいい「ちがい」、あってはいけない「ちがい」、判断が難しい「ちがい」のどれかに○をつけ、その理由を記入する。	どうしてその「ちがい」を選んだか、理由を大切にするように声を掛ける。
4．４～５人のグループに分け、「ちがい」カードとカードを置く用紙を１セットずつ配布する。	
5．カード１枚ずつに対して各自が自分の意見を出し合いながら、グループで「あってもいい『ちがい』・あってはいけない『ちがい』・判断が難しい『ちがい』」を考え、グループとしての意見をまとめて該当する枠にカードを置いていく。（この作業をカードの数だけ繰り返す）	自分と友達が選んだ「ちがい」の理由を話し合い、自分と異なる意見にも耳を傾けるよう促す。この時、多数決や正しい答えを見つけるのではなく、どうしてその「ちがい」を選んだか、その理由を大切にしたり、自分と異なる意見に耳を傾けたりするように促す。

6．グループの意見を全体で共有する。	
7．教師が体験したエピソードを読み聞かせる（P33資料２）。あらかじめ、グループごとに進行役と記録係を決めておく。進行役は、グループのメンバーに、自分自身が日常の中で体験した「あってはいけない」と思う『ちがい』について話すよう促す。記録係はそこで出た体験談をワークシートの「３．今までの経験を思い出してみよう。」の欄に記入する。	日本人が海外に行ったときは、私たちも外国人となり、「ちがい」を経験することがあることに気付くようにする。
8．進行役が中心となって、お互いの体験や考えを話し合い、グループで気づいたことを共有する。また、今後同じような場面に出会った時にどのように行動するかを話し合い、記録係はそこで出た意見を「４．今日のふり返り」の欄に記入する。	あってはいけないと思う『ちがい』に今後直面した時、自分ならどう行動するか、どうしたいかを共有し、解決法を考える。 日常生活の中での体験が思いつかない場合は、外国語指導助手の体験談をもとに話し合いをするようにする。 外国につながる子ども・当事者にとっては実体験のふり返りが辛いケースもあるため、参加者の状況に充分配慮する。
ふり返り 本時で学んだことや気づいたこと、今後の生活に生かしていきたいことについてふり返るようにする。	

●資料・解説

資料１：外国語指導助手の先生の話

①電車に乗っている時、満員で立っている人もいるのに、自分の周りの空いている席にはだれも座ろうとしなかった。

②お店やレストランで「外国人お断り」の表示を見かけることがあり、実際にあるレストランで食べようと思って入った時に、店員が英語を話せないからと断られた。

③アパートを借りたい時に、外国人だからという理由で断られた。

④口座の開設ができる銀行とそうでない銀行があり、困った。

資料２：教師の体験談（パワーポイント参照）

教師が海外に住んでいた時、友人たちと道を歩いていると自分に向かって道沿いの家の中から子どもがおもちゃのブロックを何個も投げてきた。一緒に歩いていた白人のフランス人の友人には投げないので、肌の色で差別を受けていると感じた。ただ歩いていただけなのに、このようなことをされ、ショックを受けた。しかし、フランス人の友人が、ブロックを投げた子どもに対して本気で叱ってくれる姿を見て、悲しい出来事であると同時に誰もが差別する訳ではないという温かい気持ちにもなった。

パワーポイント（見本）

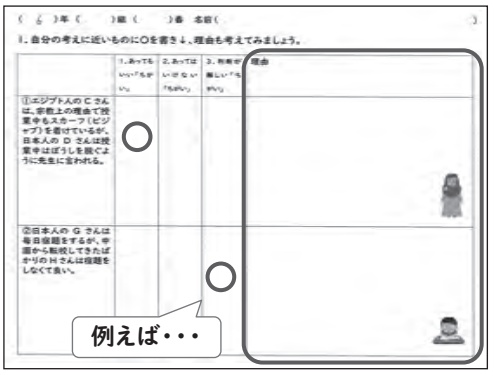
Quiz

Quiz1 ： 海外に住んでいる日本人の数は次の３つのうち、どれが正しいでしょう？

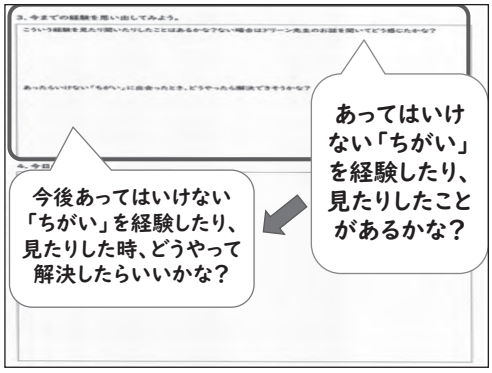
① 約3万人
② 約13万人
③ 約130万人

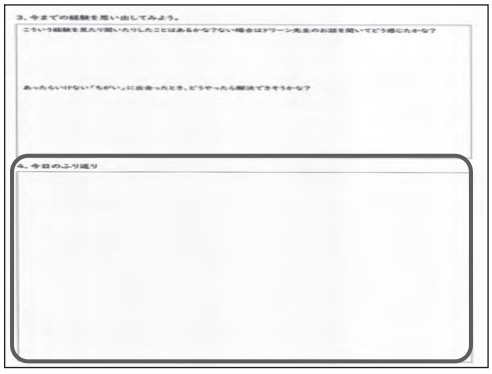
Quiz2 ： 倉敷市に住んでいる外国人の数は次の3つのうち、どれが正しいでしょう？

① 約1000人
② 約6000人
③ 約12000人



先生のイギリスでの体験





「ちがい」カード

※拡大コピーをするか、ウェブ上からダウンロードし、切り分けてカードにしてください。

あってもいい「ちがい」・あってはいけない「ちがい」・判断が難しい「ちがい」

例）日本で同じ仕事の内容で、日本人のＡさんのお給料は20万円、ブラジル人のＢさんのお給料は10万円。	①エジプト人の Ｃ さんは、宗教上の理由で授業中もスカーフ（ビジャブ）を着けているが、日本人の Ｄ さんは授業中はぼうしを脱ぐように先生に言われる。	②ご飯を食べる時、日本人の Ｅ さんは食器を持ち上げて食べるが、韓国人の Ｆ さんは食器を持ち上げずに食べる。
③日本人の Ｇ さんは毎日宿題をするが、中国から転校してきたばかりの Ｈ さんは宿題をしなくて良い。	④日本では、小学校から英語の授業があるが、外国語の時間だけ英語で授業を受ける。ナミビアでは、小学校3年生までは母語で授業を受けることができるが、4年生からはすべての授業を英語で受けなければならない。	

「ちがい」カードを置く用紙

※Ａ３に拡大コピーしてください。

班のカード置き場

☆あってもいい「ちがい」

カード置き場

☆あってはいけない「ちがい」

カード置き場

☆判断が難しい「ちがい」

カード置き場

個人配布用ワークシート（両面印刷）

※拡大コピーをするか、ウェブ上からダウンロードしてください。　（表面）

（　　）年（　　）組（　　）番　名前（　　）

1. 自分の考えに近いものに〇を書き↓、理由も考えてみましょう。

	1. あってもいい「ちがい」	2. あってはいけない「ちがい」	3. 判断が難しい「ちがい」	理由
①エジプト人のCさんは、宗教上の理由で授業中もスカーフ（ビジャブ）を着けているが、日本人のDさんは授業中はぼうしを脱ぐように先生に言われる。				
②ご飯を食べる時、日本人のEさんは食器を持ち上げて食べるが、韓国人のFさんは食器を持ち上げずに食べる。				
③日本人のGさんは毎日宿題をするが、中国から転校してきたばかりのHさんは宿題をしなくて良い。				
④日本では、小学校から英語の授業があるが、外国語の時間だけ英語で授業を受ける。ナミビアでは、小学校3年生までは母語で授業を受けることができるが、4年生からはすべての授業を英語で受けなければならない。				

（裏面）

2. 班の人とそれぞれ選んだ理由を話し合い、それぞれのカードをあってもいい「ちがい」・あってはいけない「ちがい」・判断が難しい「ちがい」に分けましょう。

3. 今までの経験を思い出してみよう。

4. 今日のふり返り

おわりに

この教材を作るにあたり、私自身も知らないところで、日本に暮らす外国人が困っていることが色々とあるのだと感じた。このような教材、授業を作る際には、一緒に働いている外国人指導助手の先生から実際にあった具体的な話を聞いてみると良いと思う。

参考文献・引用資料

・倉敷市データバンク　倉敷市の外国人登録人口について
https://www.city.kurashiki.okayama.jp/2863.htm
・外務省　海外在留邦人数調査統計
https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/index.html

実践事例報告

プログラム作成・実践者　荒木亜紗子　学 校 名　倉敷市立万寿小学校

担当教科　外国語

実践教科　外国語・国際理解

単 元 名　「いろいろな『ちがい』を考えよう」

【児童の感想】

・コンビニに行った時に外国人がレジをしている列にはだれも並ばず、日本人がレジをしている列には行列ができていたので、良くないと思いました。

・自分はあまり差別を受けたことがないですが、今日の話を聞いて、知らない内に自分も差別してしまっていたかもしれないと思いました。これからは、意識して生活したいです。

・日本人として日本で暮らしていると気付いてないけど、日本でも外国人への差別があり、外国の人は苦労していることがドリーン先生（外国人指導助手の先生）の話から分かりました。

・今日の授業では、様々な場面を想定して話し合ってみて、自分と意見の違う人もいたので、それぞれ考え方が異なると感じた。もしも、自分がこのような場面に直面した時には、今日の内容を生かして、何も考えずに判断するのではなく、相手の理由や都合も考えて、状況に応じて判断することで、自分自身が「あってはいけないちがい」を起こさないようにしたいと思いました。

・身近な人たちでも考えは人それぞれでだと思います。今日の授業のような場面に出会ったら、自分の意見を押し付けず、お互いの考えや多様性を理解し合い、すべての人が公平にできるようにすることが一番大切だと改めて分かりました。

「ちがい」の考え方について例を基に意見を出している児童の様子

班でそれぞれの意見を出し合っている様子

【授業実践をした上での感想・ふり返り】

ナミビアでの研修を活かして、ナミビアのことに多く触れた授業を作ろうと思っていたが、研修後のふりかえりの際、誰もが使える汎用性の高いアクティビティを作ってほしいと言われ、ナミビアでの経験をしていない人でも使えて、ナミビアでの学びが活かされるものを考えることに苦慮した。ナミビアでは、多様性を自然と受け入れ、共生している姿に感銘を受けたため、児童たちにも、今後成長していく中で、自分と異なる文化や考え方を排除しようとするのではなく、お互いに尊重し合ってほしいとの願いを込めて、「ちがいのちがい」の授業を行った。

また外国語の授業の一部として行う必要があり、教科書の単元と関連性をもたせることも容易ではな

かった。外国語の教科書に出てくる世界の文化や食事を学ぶ単元の最後に、今回の授業を行ったが、総合的な学習の時間や学活などで時間数を増やして取り扱っても良いと考えられる。

授業の準備をしている段階で、１時間でこの内容を網羅するには時間が十分ではないと感じ、準備した「ちがい」カードの数も減らしたが、実践発表したクラス以外で実際に授業を行うと、それでも時間が足りなかったため、最終的にはワークシートの④の内容は省いて行った。

外国人に対する差別や偏見について深く考えたことがない児童は、外国人指導助手の先生の体験談を聞き、日本でもこのようなことが起きているのだという事実に衝撃的を受けていた。単に様々な「ちがい」について考えるのではなく、身近な人の体験談を聞くことで、より活動への興味が高まり、異なる「ちがい」について考え、意見を共有する活動にも真剣に取り組む児童たちの姿が見られた。他方で、後半の児童自身のふり返りや、今後の解決策を考えたりグループで意見を共有して新たな気づきを得たりする部分に、もっと時間をかける必要性を感じた。児童の雰囲気や活動の様子によっても時間配分は変わってくると思うが、この授業を２時間に分けて行うと教師も焦らず、児童ももっと深く考え、意見を出し合えるのではないか、と感じた。

今回は外国語で「多文化共生」について取り扱ったが、同じ時期に各クラスの担任は道徳で同じような題材を扱っていた。様々な領域で、色々な人が継続的に取り組むことで、ナミビアのようにまずは身近な「多文化共生」を自然と受け入れられる子どもたちを育てていきたい。

異文化理解、相互理解・寛容、多文化共生

はじめに

世界では、国や地域によって様々な慣習や文化があり、日本人が旅行や研修に行ったときに日本での常識との違いにカルチャーショックを受ける機会も多くあるだろう。近年、日本はグローバル化が進み、外国人労働者や技能実習生の制度ができるなどして外国人の人口が増加している。そのような状況下で、日本国内でも外国の文化に触れる機会がますます増えている。

異なる文化や慣習に出会ったとき、つい自分の常識で相手を否定したり、相手に対して差別や偏見の目で見てしまったりといった否定的な関わりをしてしまうということがあるだろう。

だが、共に生活する仲間として、異なる慣習や文化をもつ相手と共生する力は今後ますます必要になってくると考えられる。まずは、世界にはいろいろな国があって、同じところもあれば違うところもあるということを知って興味をもつこと、そして、異なる文化に出会ったとき、互いに気持ち良くすごすための関わりとはどのような関わりなのかを考えることを目指して今回の教材を作成した。

この教材の使い方・参加のルール

本教材は、ナミビアに行った経験をもとに作成したため、ナミビアについての内容が多くなっている。しかし、子どもたちに身近な国や子どもたちの住む街とつながりのある国、指導者が行ったことがある国など、ナミビア以外の国にも応用ができるようにしたいと考えてアクティビティ１・２を作成した。ナミビアに限定せず、写真を差し替えたり、補足の説明を加えたりしてアレンジして欲しい。

また、それぞれのアクティビティに使用した資料には解説をつけているため、子どもの実態に応じて学びを深めるために解説を活用してほしい。

全体のねらい

外国の人々の生活や文化は多様であると理解するとともに、異なる文化や習慣に親しみ、関心をもつ。また、多様性を尊重し、共生するためのコミュニケーションの在り方を考える。

アクティビティ1　「ナミビア？日本？どっちだクイズ」

●概　要

まず、教員が提示した写真が日本で撮ったものか、ナミビアで撮ったものかを子どもたちが当てる。例えば、ナミビアの給食として出される白いトウモロコシの粉を練った食べ物“パップ”の写真を見て、「ナミビアですか。日本ですか。」と問う。この場合、見覚えのない食べ物に「ナミビアだ！」と答えを出すのは子どもたちにとって比較的容易である。次に、「これは何の写真でしょう。」と問い、フォトランゲージをする。フォトランゲージを通して、「肌の色が違う。」「手で食べている。」「美味しいのかな。」など、子どもたちの関心を高めていく。最後に、「同じものを日本でも撮りました。」と日本の写真（例であれば日本の給食）を見せて比較することで、日本にある文化や当たり前に感じている慣習を見直せるようにする。

もし授業者が海外の経験があれば、その国の写真に変えて使用すると、授業者のエピソードも交えて話

ができると思うので、写真は適宜変えて使用して欲しい。また、日本の写真については、子どもたちが普段見ている景色やものの写真に置き換えて使って欲しい。

●ねらい

日本とナミビアの文化の共通点・相違点を考えることを通して、外国の人々や文化に親しみ、関心をもつ。

●主な対象

小学１年生〜中学３年生

●用意するもの

・日本とナミビアの違いクイズ（P45の写真１〜７）
・日本とナミビアの旗（国旗の画像を印刷した紙に竹串をつけたもの。少人数なら、旗の代わりに国旗の写真とすずらんテープを用意して行っても良い）
・世界地図や地球儀

●所要時間

30〜45分

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
１．ナミビアについて概要を知る。 「国旗は日本とは違います。」	国旗の意味について簡単に説明し、我が国や諸外国には国旗があることを理解させるとともに、それを尊重する態度を育てる。
「アフリカにあり、国土に大きな砂漠があります。」	世界地図や地球儀を使って、ナミビアが南半球にあること、時差があること、砂漠が多いことなどを写真や地図を通して話し、ナミビアに興味がもてるようにする。
２．本時のめあてを確かめる。 「ナミビアと日本、同じところと違うところをクイズで知ろう。」	
３．グループが３〜５人になるように分かれて座る。 全体にナミビアの国旗と日本の国旗を紹介する。その後、全てのグループに日本の旗とナミビアの旗を１セットずつ配る。	少人数の場合は、グループに分かれず、あらかじめすずらんテープで場を分けて作った日本エリアと、ナミビアエリア（それぞれエリアに大きな国旗を貼って示しておくと分かりやすい）に参加者が移動してクイズに答える方法もある。

4．「ナミビア？日本？どっちだクイズ」に取り組む。 ⑴ 写真を見てクイズに答える。 「今から各グループに写真を配ります。ナミビアか日本、どちらかで撮った写真です。ナミビアだと思ったらナミビアの旗を、日本だと思ったら日本の旗を揚げてください。」	
⑵ 各グループに写真１－１を配り、相談の時間を取る。	必ずグループで相談して決め、間違っていたとしても互いを責めないことを約束にする。
⑶「『せーの』で正解と思う国の旗をあげてください。」→「正解は、ナミビア（日本）です。」	
⑷ １－１の写真について「この写真に写っている物は何だと思いますか？」と問いかけ、グループで（エリアでする時は近くの人と）話し合う。	
⑸ 同じ施設・場面の日本の写真（写真１－２）をグループに配布し、ナミビアと日本の写真を比べる。「日本（ナミビア）で撮った同じものはこれです。この２枚を比べて気づいたことはありますか。」	正解を求めず、子どもたちの多様な意見を聞いて認めることで、自由に思ったことを言える雰囲気をつくる。
5．⑴～⑸の流れを写真２～７についても同様に進める。	資料・解説（P46）およびアクティビティ１使用写真を使って実態に応じて補足説明をする。
ふり返り	授業をする前と後で、ナミビアの印象は変わったか、考えたこと・不思議に思ったことは何かを問い、次時につなげる。

アクティビティ１　使用写真（見本）

※データはウェブ上からダウンロードしてください。

※写真については、ファイル名に「−１」となっているものがナミビア、「−２」となっているのが、日本の写真です。クイズとしてナミビアのものを先に提示したり、日本のものを先に提示したりと、順番を変えて使ってください。

※写真１−２、２−２、４−２、６−２、７−２は日本の写真です。実践する際は、子どもたちの使っている道具や日々食べている給食、子どもたち自身の写真に差し替えて使用してください。

写真１−１

写真１−２

写真１補足

写真２−１

写真２−２

写真３−１

写真３−２

写真３補足

写真４−１

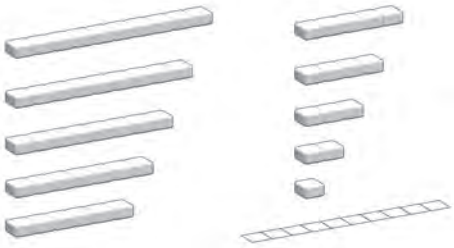


写真４−２

写真５−１

写真５−２

写真６−１

写真６−２

写真７−１

写真７−２

●資料・解説

「写真１-１【給食】」、「写真１補足【給食】」

郊外の学校の給食の様子。トウモロコシの粉をお湯で練り上げて作る「パップ」というものを食べている。この昼に食べる「パップ」が１日の唯一のご飯という子どももおり、そのような子には多めに入れてあげていると現地の教員から聞いた。

「写真３-１【食事（寿司）】」

海に面したナミビアには、良い漁場があり、生牡蠣などの新鮮な海鮮が食べられる。日本にも伊勢海老などを輸出している。

「写真３補足【食事】」

ナミビアでは、海鮮よりも肉をよく食べる。写真は「カトュトュラ」というかつてアパルトヘイト時代に黒人が住むところとして指定されていたエリアの市場に行った時のもの。

「写真４-１【算数ブロック】」

日本のように計算ブロックや時計、計算カードなどが入った「算数セット」がないナミビアでも数概念を学習できるように、現地の海外青年協力隊の隊員が代用品としてペットボトルのキャップを使って指導していた。

「写真５-１【砂漠】」

写真にあるのは、世界最古の砂漠と言われる「ナミブ砂漠」。ナミビアという国名の由来でもある。砂に鉄分が含まれているため、赤い砂であることが特徴的である。

「写真６-１【学校】」

現地の協力隊員が筆算のやり方を教えている算数の授業の様子。

コラム

同じナミビアなのに…？―タウンとロケーション―

６年生に授業をした際、「どうしてファストフード店があったり、お寿司が食べられるところがあるのに、１日一食しか食べられない子もいるのか不思議」という意見が出た。

ナミビア滞在中、車で移動していると「タウン」と言われる都会のエリアと「ロケーション」と言われる郊外のエリアの違いに驚いた。タウンは道が舗装され、豪邸が立ち並び、大型ショッピングモールも見られる。まるでヨーロッパのような近代的な街並みだ。一方で、ロケーションは未舗装道路をガタガタと進み、見えてくる家もバラック小屋のような家だ。ロケーションの学校では、親が失業している子どもが多く、所得がかなり低い家庭が多くあるという。

この国民間の格差は、ジニ係数という貧富の差を示した数値にも表れている。（０に近づくほど所得格差が小さく、１に近づくほど所得格差が大きいことを表す数値。2015年のナミビアのジニ係数は0.59）（国連開発計画HPより https://www.undp.org/ja/japan/blog 最終閲覧日2024年１月16日）大きな貧富の差は、ナミビアの抱える大きな課題の一つである。

アクティビティ2　「なりきりリアクションゲーム」

●概　要

自分と違う文化や慣習に出会ったとき、自分たちがどうやって受け入れていくべきか、相互に理解し合うためにどのような態度を取ると良いかを考えるゲームである。

『世界びっくりカード』には、日本人がカルチャーショックを受けやすい海外の慣習や文化を書いている。今回作者が本や海外経験のある人へのインタビュー、自身の経験などから集めた情報で作成しているが、実態に応じてカードを取捨選択したり、実践者の経験を入れたカードを新たに作成したりして活用してほしい。

●ねらい

・外国の人々の生活や文化は多様であると理解するとともに、異なる文化や習慣を尊重し合うことが大切であることを理解する。
・多様性を尊重し、共生するためのコミュニケーションの在り方を考える。

●主な対象

小学３年生～高校３年生

●用意するもの

・ナミビアびっくりカード（P49）：各班１セット（予め切り離しておく）
・世界びっくりカード（P50）：各班１セット（予め切り離しておく）
　※日本人が海外との文化の違いでカルチャーショックを感じやすい内容を各カードに書く
・なりきりカード（P51）：各班１セット（予め切り離しておく）
・なりきり一覧表（P52）：各班１枚
　※なりきる人については以下の５パターンがあるが、実態に応じて減らしても良い。
　　「いい感人（肯定的なリアクションをする人）」、「やな感人（否定的なリアクションをする人）」、「無感人（無関心な人）」、「ワクワク人（違いを楽しむ人）」、「頑固人（自分が正しいと譲らない人）」

●所要時間

45分～１時間

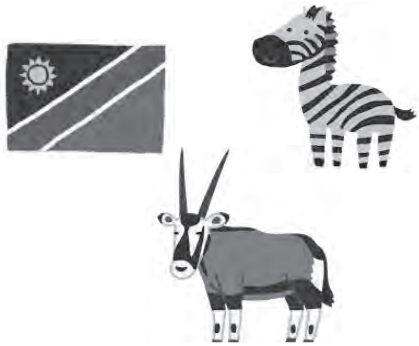
●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
１．（アクティビティ１に続けて実践する場合） アクティビティ１の感想の中から、カルチャーショックにつながる意見を取り上げる。	実践者自身が驚いたことを、ナミビアびっくりカードを使って話しても良い。
２．本時のめあてを確かめる。 「違う文化に出会ったとき、どんな反応をすると互いに気持ちが良いか、ゲームをして考えよう。」	あらかじめ子どもと「カードで設定された性格の人に成り切るゲームなので、からかったり否定したりしない」ことを約束する。 （子どもの実態に合わせて始めることが肝要。）

3．３～６人の班に分かれる。６．で「なるきる人」を担当する１人を決めておく。	子どもの実態に応じて使用するカードを選ぶ。
4．『世界びっくりカード』、『ナミビアびっくりカード』、『なりきりカード』、『なりきり一覧表』をすべて１セットずつ各班に配る。	
5．『世界びっくりカード』と『ナミビアびっくりカード』をシャッフルし、伏せて山にし、中央に置く。『なりきりカード』も同様に伏せて中央に置く。『なりきり一覧表』もみんなが指を指せるよう、班の中央に置いておく。	机の中央に、『世界びっくりカード』『ナミビアびっくりカード』のシャッフルと『なり切りカード』の２つの山、『一覧表』が置かれている状態。
6．班の誰かが『世界びっくりカード』を上から１枚めくり、表側にする。班のみんなで読む。	実践者は机間巡視をする中で、必要に応じて【資料４】【資料５】の解説を用いて補足説明する。
7．３．で決まった「なりきる人」が『なりきりカード』を引く。何が出たかは他の人には伏せておく。「なりきる人」は出た役割に合わせてリアクションをする。 (例)「やな感人(否定的なリアクションをする人)」→「変なの！」とバカにした態度で言う、など。	リアクションが難しく困っている子どもが多い場合は、一度だけカードの引き直しを良しとするなど、臨機応変にルールを変える。
8．７．のリアクションを見て、班の他の人は『なりきり一覧表』から誰になりきったか考え、人物を選ぶ。	
9．みんなで「せーの」の掛け声に合わせて『なりきり一覧表』の正解だと思う人物を指差す。	
10．正解を確かめ、リアクションに対する感想をいう。	正解・不正解よりも、自分がもし当事者だったらゲームでしたリアクションに対してどう感じるかを考え、望ましいリアクションの在り方を振り返る時間にして欲しい。
11．なりきる人を交代し、６～10を繰り返す。	
ふり返り 「違う文化に出会ったとき、どんな反応をすると互いに気持ちがいいと思いますか？」と問い、考える。	

ナミビアびっくりカード（見本）

※データはウェブ上からダウンロードしてください。

①ナミビアでは、初めて会った人にも、「元気？」と聞かれる。 	②ナミビアのある少数民族は、肌に赤い泥をぬる。 	③ナミビアでは、シマウマやオリックスの肉を食べる。 
④ナミビアでは、車検がない。 	⑤ナミビアでは、給食が唯一の食事という子どもたちがいる。 	⑥ナミビアの多くの人は、手で食べる。はしを使わない。

【資料４】「ナミビアびっくりカード」解説

①ナミビアでは、初めて会った人にも、「元気？」と聞かれる。
→ナミビアでは、“Hello.How are you?”とスーパーのレジでも、レストランでもホテルでも、どこでもまずはこの挨拶を交わす。

②ナミビアのある少数民族は、肌に赤い泥をぬる。
→世界一美しいと言われる「ヒンバ族」は、赤い泥とバターなどを混ぜて作られる“オカ”というものを肌に塗って日焼け対策や保湿をする。

③ナミビアでは、シマウマやオリックスの肉を食べる。
→野生の肉は「ゲームミート」と言われ、ナミビアではメジャーな食べ物である。

④ナミビアでは車検がない。
→教材作成者が研修で乗った車も、車の窓ガラスがガムテープで止められている状態で、途中飛び石で割れるというハプニングがあった。日本の車検落ちの中古車を使っている人も多い。

⑤ナミビアでは、給食が唯一の食事という子どもたちがいる。
→郊外のエリア（ロケーション）は、親が失業している子どもも多く、所得がかなり低い家庭も多くある。

⑥ナミビアの多くの人は、手で食べる。はしを使わない。
→街中のレストランではフォークやナイフが出るところもあるが、ほとんどの人は手食。

世界びっくりカード（見本）

※データはウェブ上からダウンロードしてください。ナミビアびっくりカードと同じサイズで印刷し、切り分けて使ってください。

1 ブルガリアやギリシャでは、「はい」のとき首を横にふって「いいえ」のときに縦にふる。 	2 インドでは、牛肉を食べない。 	3 ニュージーランドのマオリ人は、したを出して「ようこそ」と言うかんげいの気持ちを表す。 	13 イギリスでは、電車が時間通りに来ることがほとんどない。 	14 イギリスでは、食器をせんざいで洗った後、ほとんどすすがず、あわがついたままかわかす。 	15 タイでは、子どもの頭をなでてはいけない。
4 アラブでは、男の人どうしが手をつなぐのは当たり前。 	5 韓国では、おちゃわんを置いて食べる。 	6 アメリカでは、家の中でも外ぐつをはいたまますごす。 	16 スイスの人は、ドイツに買い物に行く。 	17 中国では、食事をわざとのこす。 	18 東南アジアでは、バイクに乗るときにヘルメットをかぶらない。3人乗りや5人乗りもふつうにする。
7 ギリシャでは、グーサインをすると見下す意味になり、いやがられる。 	8 フランスでは、OKサインをすると、「無能（役にたたない人のこと）」という意味になってしまう。 	9 エジプトでは、太陽がきらいな人が多い。 	19 マレーシアでは、イスラーム教の多くの女性はかみの毛を布で隠して見せない。 	20 ニュージーランドでは、バスに乗りたいとき、手を横にして大きくふってアピールしないとバスが止まってくれない。 	21 オーストラリアでは、洗たく物をほとんどすすがず、あわがついていてもそのまま干す。
10 インドネシアのイスラーム教の家には、クリスマスにサンタさんが来ない。 	11 ニュージーランドでは、学校でおやつを食べる。 	12 イスラーム教の人は、酢の物を食べない。 	22 パラグアイでは、カピバラを食べる。 	23 アメリカのほとんどの小学校で、そうじの時間がない。 	

【資料５】「世界びっくりカード」解説

2．インドでは、牛肉を食べない。
→ヒンズー教では、牛は神聖な動物とされているため。

7．ギリシャでは、グーサインをすると相手を見下す意味になり、嫌がられる。
→中東でも同じ。

8．フランスでは、ＯＫサインをすると、「無能（役にたたない人のこと）」という意味になってしまう。
→ゼロという意味もある。

9．エジプトでは、太陽がきらいな人が多い。
→エジプトでは日中が高温となり、太陽の暑さが原因であまり太陽に対して良い印象がない。

10. インドネシアのイスラーム教の家には、クリスマスにサンタさんが来ない。
→宗教上の理由から。

11. ニュージーランドでは、学校でおやつを食べる。
→教材作成者の経験から。授業の合間におやつや果物を食べていた。

12. イスラーム教の人は、酢の物を食べない。
→酢にはアルコール分を含むものがあるが、イスラーム教ではアルコールを摂取してはいけない決まりがある。

14. イギリスでは、食器を洗剤で洗った後、ほとんどすすがず、泡がついたまま乾かす。
→教材作成者の友人の経験から。水を大切に使おうとする意識が高い。

15. タイでは、子どもの頭をなでてはいけない。
→頭部は精霊が宿る場所として神聖視されているため。

17. 中国では、食事をわざと残す。
→料理をわざと少し残すことで、食べきれないほど十分にいただき、料理に満足しているということを伝えるため。

19. マレーシアでは、イスラーム教の多くの女性は髪の毛を布で隠して見せない。
→イスラーム教の教えによる。

20. ニュージーランドでは、バスに乗りたいとき、手を横にして大きく振ってアピールしないとバスが止まってくれない。
→教材作成者の経験から。乗った後もバス停のお知らせがなく、自分でブザーで伝えなければならなかったため、気を抜けなかった。

21. オーストラリアでは、洗たく物をほとんどすすがず、泡がついていてもそのまま干す。
→教材作成者の友人の経験から。水が貴重で節水の意識が高い。

なりきりカード（５種類）

※切り離して使ってください。
※班の人数、参加者のタイプに合わせて使用カードを選んで下さい。
※白い欄を使って別のキャラクターを作っても良い。

なりきりカード

●だれになりきっているか考えて、
グループの人と「せーの」で指さそう。

こう定的なリアクションをする人
いい感人

ちがいを楽しむ人
ワクワク人

きょうみがない人
無感人

ひ定的なリアクションをする人
やな感人

自分がぜったい正しいとゆずらない人
がんこ人

コラム

クリスマス会

二学期末にご褒美として「クリスマス会」をしたり、クリスマスの歌を教室で流したりする学級は少なくないと思う。私も担任している学級で「クリスマスパーティー」として、クリスマスにちなんだレクリエーションをし、12月25日の登校日には、サンタさんにもらった物の話で子どもたちと盛り上がった。

小学校教員の友人と冬季休暇中に会った時、お楽しみ会の話題になった。その時友人は、「クリスマス会はうちの学級ではしないし、サンタの話題も教員からは出さない」と言った。イスラーム教を信仰している家庭があるからとのことだった。それだけでなく、家庭の経済状況からプレゼントをもらえない家庭もあるかもしれない、ということも考えてのことと話してくれた。

クリスマスパーティを行う前に、「もしかしてこの話をして疎外感を感じたり、辛い思いをしたりする子どもがいないだろうか」と少しも考えなかった自分に気づき、反省した。グローバル化が進む世の中で、「もしかして」と相手の文化的背景や生活環境を慮る気持ちを持っていたいという思いが湧き、この教材を作るきっかけとなった。

参考文献・引用資料

・「世界びっくりカード」１～５：『世界とであう えほん』辻原康夫、パイ インターナショナル、2012年
・「世界びっくりカード」６～９：『常識はひとつじゃない？』〔池上彰・増田ユリヤの今だからこそ世界を知ろう！シリーズ〕池上彰・増田ユリヤ、汐文社、2016年
・「世界びっくりカード」10～24：教材作成者と作成者友人の体験談より

実践事例報告

プログラム作成・実践者　勝部知早野　　学 校 名　浜田市立長浜小学校

担当教科　全教科

実践教科　学活

単 元 名　「ちがいについて考えよう。」

【授業の概要】

※この授業はアクティビティ１の後に行った実践事例で、アクティビティ２とは異なる（この実践を踏まえて作った改善案がアクティビティ２である）。授業は⑶の流れで行った。

⑴ 単元のテーマ：差別と区別、基本的人権

⑵ 単元のねらい

「あっていいちがい」と「あってはいけないちがい」について考えることを通して、差別と区別や基本的人権について気づけるようにする。

⑶ 授業の概要

様々な事例を通して、差別と区別や基本的人権について考え、分類する。

（流れ）

１．本時のめあてを確認する。
「あっていいちがい」と「あってはいけないちがい」について考えよう。

２．12種類の「ちがい」について、全員で意味や内容を確認する。

３．確認した12種類の「ちがい」を「あっていいちがい」と「あってはいけないちがい」に分け、考えたことや分けた理由などをワークシートに記入する。

・「○○はどっちに入るかわからないから、とりあえずわからないに入れておこう。」

・「△△は絶対にあってはいけないと思う。」

４．グループで話し合ったことを全体で発表し、根拠や分類の仕方を検討する。

５．差別・個性・区別の違いについて知り、自分たちの生活をふり返る。

【授業で使用したワークシート】

“ちがい“シート

名前（　　）

	○△×	理由
①日本では、外国語として英語を3年生から勉強する。ナミビアでは1年生から勉強する。		
②日本では、なろうと思えば夢も目指すことができる。ナミビアでは経済的な理由から夢を叶えられない子どもがいる。		
③Aさんのはだの色は白いのでバスに乗っても良い。Bさんのはだの色は黒いのでバスに乗ってはいけない。		
④ナミビアのある学校では3つの言葉ごとにクラスが別れていて自分の言葉で勉強することができる。日本の学校では主に日本語で勉強する。		
⑤ナミビアの子どもたちは、お昼ご飯しか食べられない。日本の子どもたちは朝・昼・夜3回お腹いっぱいにご飯を食べられる。		
⑥タウンに住んでる人は、毎食食べられる。ロケーションに住んでいる人は一食しか食べられない。		
⑦日本ではお箸で食べるが、ナミビアでは手で食べる。		
⑧ナミビアの子どもたちは算数セットがない。日本の子どもたちは算数セットがある。		
⑨Aさんは、からかっても言い返さないからバカにする。Bさんは、からかったら言い返してくるからバカにしない。		
⑩Aさんは、外国人だから日本のアパートに住んではいけないと言われた。Bさんは、日本人だから日本のアパートに住んでもいいと言われた。		

⑷ 児童の感想や学び・気づき

「ちがい②」については意見が分かれた。「お金がないから仕方がない」という意見と「子どもの夢を経済的な理由で壊すのはよくない、かわいそうだ」という意見があった。中には、夢を叶えられるように募金活動とかをして助けてあげたらいいと思う」という意見を持つ児童もいた。

「ちがい③」については、「人種差別」という用語を知っている児童も多く、黒人差別についての歴史を話し、学ぶきっかけになった。

「ちがい⑥」については、１時間目に学習した知識を使って「タウンとロケーションに分かれていることから、まずおかしいと思う。同じ国なのに違うのはおかしい」と考える児童や、「どこに住んでいてもみんな毎食食べられるようにすべき」という意見が出た。

⑸ 児童の様子

１時間目にアクティビティ１に取り組み、ナミビアの現状について想像して考えを持てている児童がいる一方で、馴染みのない国のことなので問題をイメージしにくく、ちがいの善悪について考えるところまで至らない児童も一定数いた。グループになって考えることで意見の交流はあったが、考えるべき「ちがい」が多すぎた、全体で議論を深めるところまで時間的に到達しなかった。

【授業実践をした上での感想・ふり返り】

直接ナミビアに行って経験してきたことをもとに作っている「ちがい（問い）」であるため、授業者が簡単にイメージできる問題も、海外の国自体に馴染みがない児童にとっては状況の理解そのものが難しいのだと痛感した。また、ちがいの中に「差別」「基本的人権の保障」「異文化理解」など複数の観点が混ざっていたため、より考える視点が複雑になり、６年生の児童にとっては難易度が高い活動となってしまった。

これらの反省から、初めて海外に触れる児童にとっても分かりやすく、楽しみながら活動できるようにするために、ナミビアに限定せず様々な異文化を知るゲーム性のある活動にするようにしたいと考えた。また、考えるべき観点を「異文化理解」に絞ることで、考えが深まるようにしたいと思い、アクティビティ２の「なりきりリアクションゲーム」の教材を開発した。

世界の国に親しもう

はじめに

現代社会において、地球規模で抱える課題は増加する一方である。したがって、未来の社会を担う子どもたちが日本だけではなく世界の諸情勢に目を向け、協力して解決しようとする意欲をもつことは必要不可欠である。また、外国にルーツがある児童生徒が増加しており、学校現場においてもグローバル化が進んでいる。このような現代を生きる上で、他国の人々や文化に対する理解と尊重する態度を養うことは、小学校段階においても求められている。

しかし、小学校低学年という発達段階において、世界を見渡すような広い視野をもつことは難しい。また、外国に関する知識や興味関心には、生活経験によって差が生じることが多い。そのため、本教材では、自分の身近なところから徐々に視野を広げ、誰もが自分と世界とのつながりを感じ、外国の人々や文化に親しみをもつことをねらいとした。本教材が、児童が世界の国々に興味をもつ一つのきっかけになることを願う。

この教材の使い方・参加のルール

この教材は、小学校１年生・２年生の発達段階の児童を対象としている。

「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　特別の教科　道徳」で述べられている通り、小学校低学年という発達段階では、身の回りの事物が自国の文化なのか他国の文化なのかを明確に区別することは難しい。特に、他国の人々に対しての触れ合いについては、生活経験の差などから、消極的になってしまう児童もいると考えられる。したがって、「世界の人々の生活」を大きなテーマとして設定し、自分たちの生活と比べながら考え、同じところや違うところばかりに目が向かないように、素敵だと思ったところや良いと思ったところ等を積極的に授業の中でひろうことを大切にする。また、可能な限り自らの生活と世界がつながっていることを実感できる活動を設定し、中学年や高学年の学習に向けて、様々な国の文化について知りたいという意欲をもたせることを大きな目的としたい。

全体のねらい

・自分と外国がつながっているという実感から世界の国に興味関心をもち、他国の国の文化に親しもうとする道徳的心情を育てる。
・他国の人々や文化に対する理解とこれらを尊重する態度を養うようにするために、違いにばかり着目せず、似ているところや良いなと思うところなどを見つけさせ、世界の国についてさらに知りたいという意欲をもたせる。

アクティビティ1　「“いいな”と“すてき”でつながろう」

●概　要

外国の暮らしがわかる写真や動画を見て、“いいな”や“すてき”と思ったところを友達と共有する。

●ねらい

・他国の文化や生活を知り、他国の文化に親しみをもつ。
・違いだけではなく、良いなと思ったことや素敵だと感じたことを友達と共有し、世界の国について知りたいという意欲をもつ。

●主な対象

小学校１～２年生

●用意するもの

・投影用PDF①（P60）（写真部分を印刷して使っても良い）
・関連する動画：今回は研修参加者が撮影したものを投影したが、扱うテーマに合わせて一般に利用が許可されている関連動画を使用する。
・リアクションカード（P59）（印刷して切ったものを割り箸などに貼り付けて使用する）：グループ数分
・ワークシート①（P61）：全員分

●所要時間

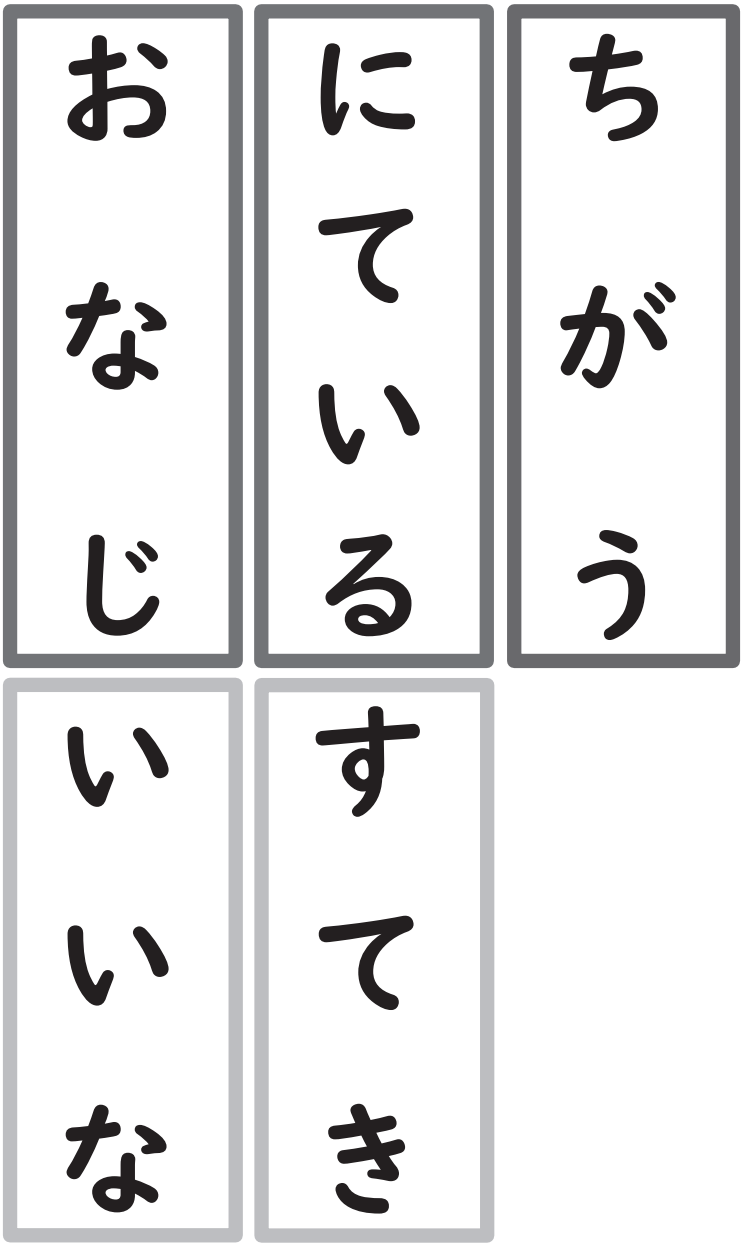
15分～

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1．４～５人の班をつくる。リアクションカードを各班に１セットずつ配布する。	外国にルーツがある児童と外国にあまり接点のない児童が交流できるように班の分け方を工夫する。
2．リアクションカードの使い方を説明する。 ・これから見せる写真について、自分たちの生活と似ていると思ったら「にている」、同じだと思ったら「おなじ」、自分たちの生活と違うと思ったときは「ちがう」のカードをあげる。 ・さらに、素敵だなと感じたり、良いなと思ったりしたときは、「すてき」や「いいな」のカードをあげる。 ・友達がどのカードをあげているか、確認しながら活動する。	活動中は、どのカードを出しても良いこと、感じたことを友達と話して良いことを伝える。

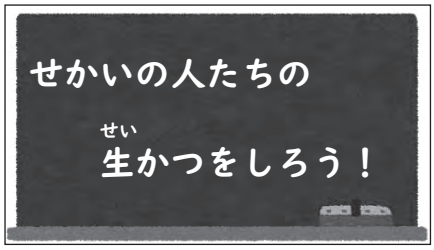
3．PDF①を投影する（印刷した場合は見せたあとに黒板に貼っていく）。児童は１つ１つの写真で感じたリアクションカードを挙げていく。 4．一番心に残ったことを発表する。	写真を見て感じたことだけではなく、友達と活動したことで分かったことや感じたことを発表してもよいことを伝える。
ふり返り ワークシート①に感想を書く。	児童が自由にふり返りができるように、書きやすい形で書いて良いことを伝える。（文章でまとめることが難しい児童や１年生は、吹き出しと顔の表情で表して良い、など）

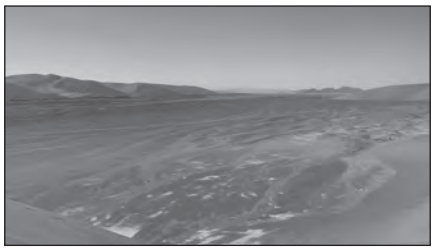
リアクションカード見本



PDF①（見本）

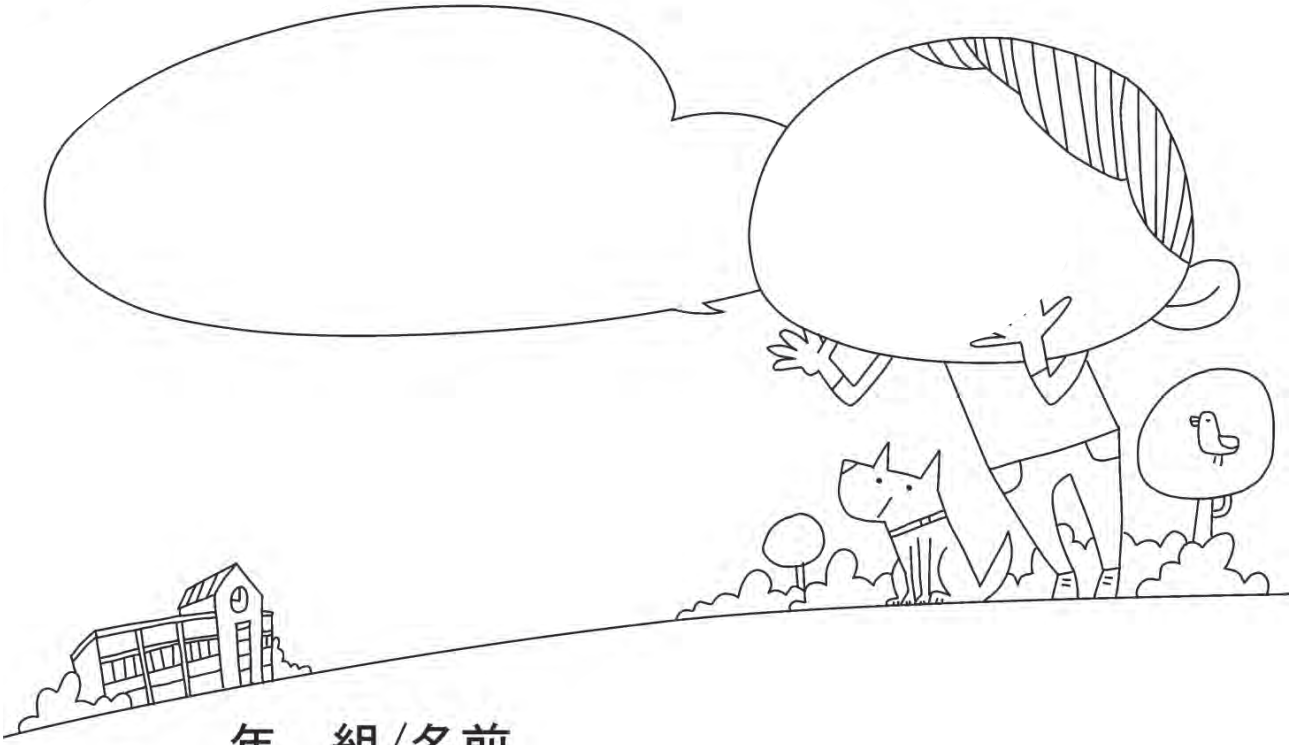
※データはウェブ上からダウンロードしてください。





ワークシート①

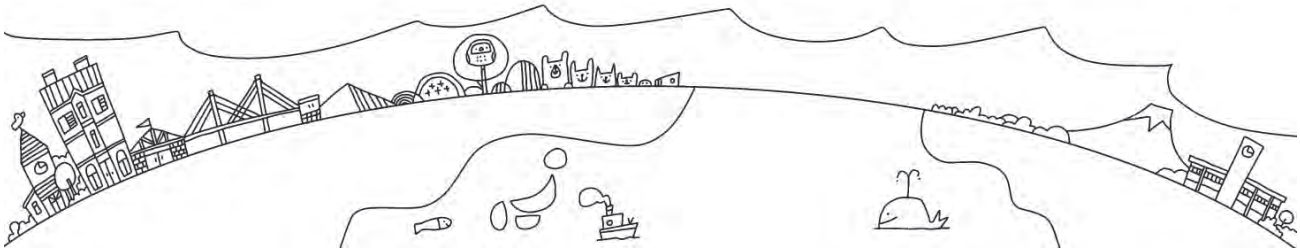
しゃしん　や　どうが　をみて　かんじたことをかこう。



年　組/名前

ふりかえり

より



アクティビティ2　「服はどこで作られている？」

●概　要

自分が着ている服のタグを確認して、生産国がどこなのかを世界地図で確認する。

●ねらい

身の回りにも世界とつながっているものがあることを知り、世界の国に興味感心をもつ。

●主な対象

小学校１～２年生

●用意するもの

・世界地図（教室で使用する大きいもの）
・体操服や制服など子どもたち全員に共通する衣類
・服や帽子など（日常的に使用している衣類）
　※制服の学校で行う場合は、家から私服を持参するなど工夫する。

●所要時間

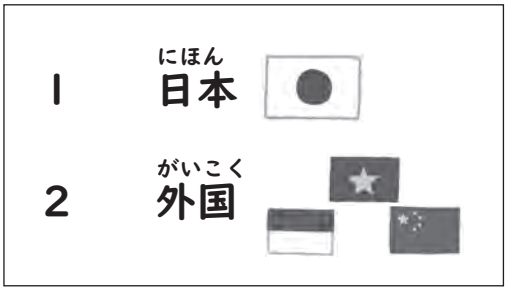
10分～

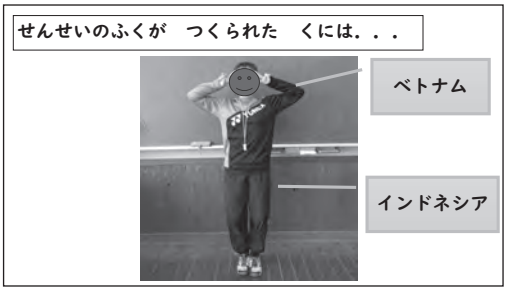
●すすめ方

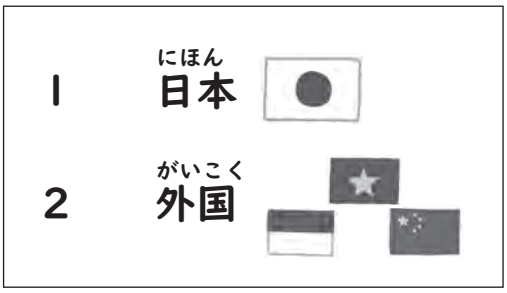
学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1．教師の服の生産地について全員で考える。 「先生の服はどこで作られたでしょう？日本かな？外国かな？」	小学校低学年であることから、答えを「日本」か「外国」かの二択にし、全員が答えることができるようにする。 ※パワーポイント等を使って分かりやすく解説しても良い。（パワーポイント見本参照）
2．自身の衣服の生産地について全員で考える。 「みんなの体操服はどこで作られたでしょう？日本かな？外国かな？」	その場で、服のタグを読み、生産地の場所を世界地図で確認する。
3．ここからペア活動を取り入れる。 「自分たちが着ている服は、どこで作られたでしょう？」	ペアでお互いのタグを確認するとよい。
4．服の生産地を世界地図で確認する。 「タグに書いてある国がどこにあるか世界地図で確認しよう。」	日本との距離や、世界のどこに位置しているかがわかるように磁石やシールを用いて場所を明確にする。 ※世界地図を印刷して配布し、子どもたち自身が探すのもよい。

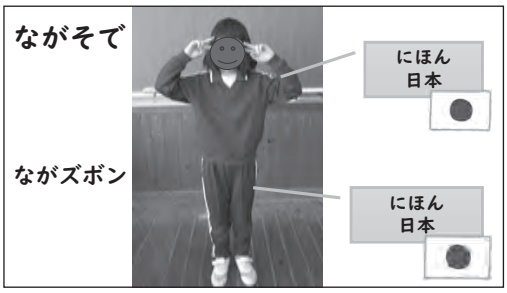
5．自分たちの服を作っている国がどんな国なのか、想像してみよう。	児童同士が知っている知識を出し合い、外国の生活などに興味をもつことができるようにする。
ふり返り	

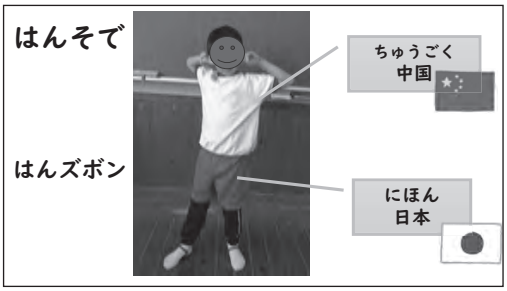
パワーポイント見本

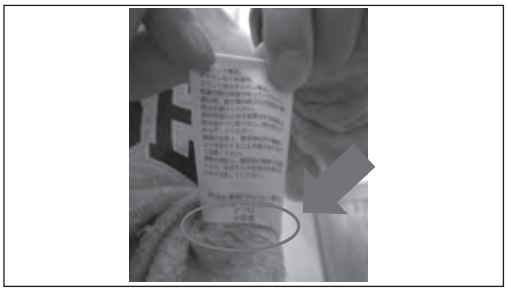












参考文献・引用資料

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　特別の教科　道徳　平成29年７月告示 文部科学省

実践事例報告

プログラム作成・実践者　田淵　野藍　　学 校 名　大田市立静間小学校

担当教科　全教科

実践教科　特別な教科　道徳・国際理解　国際親善

単 元 名　「国際的なつながり」〈C－16国際理解、国際親善〉

【授業の概要】

⑴ 単元のテーマ：「せかいはつながっている」

⑵ 単元のねらい

他国の文化にふれ、他の国々の人々やその国の文化に親しもうとする道徳的心情を育てる。

⑶ 概　要

導入としてアクティビティ２を行った。本時の道徳的価値について問題意識を高めるために、体操服や自分の服がどこで作られているのかを知り、身の回りにも世界とつながっているものがあることを知る。その後、「私たちの服を作ってくれた人は、どんな生活をしているだろう？」「作ってくれている人たちのことを知らなくていいのかな？」と問い掛け、自らの道徳的価値についてのとらえ方を表面化させ、本時のめあてにつなげる。

次の展開でアクティビティ１を行った。ナミビア共和国の写真をもとに、衣食住には日本と似ているものや違っているものがあることを見つけ、外国の文化に興味をもつことができるようにする。その際に、動画や写真を見ながら感じたことをいろいろな形で表現できるようにリアクションカードを用意する。また、実際にナミブ砂漠の砂や外貨に触れることで、外国の生活が具体的に想像できるようにする。そして、ナミビア共和国だけではなく、図書館の本を使って様々な国の衣食住の文化について自由に調べることができるようにする。その際に、児童同士で意見を交換しながら様々な国の文化について興味をもつことができるように、グループワークを取り入れる。

使用する本については、事前に司書教諭と学校司書に相談し、低学年でも内容が理解でき、実際の様子が写真から分かるものを選んだ。グループワークの中で、気になった国や良いなと思った国のページにふせんを貼り、全体でも共有できるようにする。そして、世界のことについてもっとたくさんのことを知りたいという意欲をもたせる。また、教師から、世界にはたくさんの国があり、衣食住、遊びもそれぞれの国の特徴があることを紹介し、興味関心をもたせる。

本時の終末では、自分をふりかえる場面を設けた。教材から離れ、自分の生活をふり返り、道徳的実践意欲につなげるために「今日の授業を通して、どんなことを考えたり感じたりしましたか。」と問う。ここではワークシートを活用して書く活動を取り入れる（ワークシートを使うことで自身の考えとじっくり向き合わせる）。書くことが難しい児童については、個別に聞き取りを行い、教師が代筆をする。

⑷ 指導上の留意点

導入のアクティビティ２では、発達段階や生活経験の差を鑑み、全員が興味をもって学習活動を行うことができるように、２択のクイズ形式にする。また、「外国」という言葉の意味について、共通

理解を図る。また、言葉でなかなか表現できない児童も自分の考えを自由に表現することができるように、自分の気持ちの状態を顔の表情で表すワークシートを用意する。司書教諭や学校司書と相談して選んだ本は、授業後も児童が自由に読むことができるように教室に置いておく。

⑸ 児童の感想・学び・気づき

・日本とちがっていたナミビアを知ることができて、すごいなと思いました。
・日本とナミビアのペットボトルのラベルもちがってびっくりしました。ナミビアには日本にはいない動物がいたので、もっと知りたいです。
・日本にもすごいものはあるけど、ほかの国にもいろいろなすごいものがあることを知ることができました。
・いろいろな食べ物や日本とちがうお金があることを知ることができました。とても面白かったです。
・日本ではないところをはじめてたくさんわかりました。とても楽しい気持ちになりました。

児童のふり返りワークシート

⑹ 児童の様子

【授業実践をした上での感想・ふり返り】

今回の授業では世界の国々について少しでも興味関心をもち、親しみをもつことを目標として行った。実際に授業後の学校生活では、児童が「今日の服はカンボジアだ。カンボジアってどこにある国ですか。」と私に質問したり、教室に置いてある授業で取り扱った本を朝の読書時間に読んだりと、興味関心をもつ姿が見られた。また、世界地図を教室に掲示すると、学習で出た国やテレビで見た国を地図で確認したり、季節の行事ごとに外国との違いを知りたいと思ったりと世界の国々に対して自分から知ろうとする児童が増えた。外国に対する知識や経験が浅い小学校低学年であるからこそ、自分が着ている服をきっかけとして、授業を展開したことは良かったのではないかとふり返る。

また、あえてその国の一般的なイメージについて授業の中で触れず、児童が感じたことを大切にしたことは、児童の興味関心の幅に制限をかけることなく取り組むことができたことにつながったと思う。

また、司書教諭や学校司書と協力し取り扱う本を選んだことで、より子どもたちの興味関心を引き出すことができたのではないかと感じる。

今回の実践を通して、特別の教科道徳における内容項目「国際理解・国際親善」の授業内容について改めて考えた。子どもたちにとっては、他人事になりやすい内容項目であるからこそ、自分事として考えることに繋げていくためには、小学校低学年段階から、世界について興味関心をもつことが必要ではないかと感じた。

世界はみんなつながっている
～多文化共生と地域の未来～

はじめに

我が国においては、少子高齢化、人口の減少、地方における過疎化などにより、労働力不足が深刻化している。JICA緒方貞子平和開発研究所は、生産年齢人口が減少し続ける日本が国として成長していくには、日本人と外国人が共に社会を創っていくことが不可欠であるということを、データで示している。独立行政法人国際協力機構は、「2030/40年の外国人との共生社会の実現に向けた取り組み調査・研究報告書」（2022年）において、日本と、外国人労働者を送り出す国の人口動態と産業構造の変化、労働市場を予測し、2030年と2040年時点の日本における外国人の受け入れ人数などを試算している。例えば、香川県の2040年外国人労働者数（対生産年齢人口比率）は８～10％と予想されており、今後ますます地域に外国人の方々が増えることが想像できる。また一方で、全国で必要な外国人労働者674万人に対して42万人が不足するとも予測されており、外国人の方々が仕事をしたい国として日本を選ばないことも懸念されているのである。

小豆島町は、醤油や佃煮の工場が多く、そこで働く外国人技能実習生の方々と出会うことが増えた。他にもカフェやゲストハウス経営などビジネスを目的とした外国人移住者もいる。また２年連続で持続可能な観光地TOP100にも選ばれており、国内外を問わず観光客も多い。物だけでなく人のグローバル化が急速に進みつつある小豆島の子どもたちには、海外をもっと身近に感じ、日本（小豆島）を選んで来て頂いている外国人の方々と共に地域を盛り上げ、持続可能な社会にするために必要なことを考え行動できる力を育てたいと考える。

この教材の使い方・参加のルール

世界の様々な国には、どの国も例外なく魅力的な特色があり、そして解決することが困難な課題がある。特色や課題の全くない国は存在しない。本来、どちらが上とか下とかいったことは、国と国の間にないはずである。あるとすればそれはGDPといった何かしら数値化されたもので比べているに過ぎない。子どもたちが、どの国に対しても偏見をもつことなく、興味をもって自分事と考えられるようにするために、最初にプラスの出会いができるように意識しながら授業をすすめる。今回はアフリカとのプラスの出会いとしてクラフト体験をすることにした。そして、自分（日本）と外国とのモノのつながりや、人のつながりについて考えることで、国と国は支え合っていること、また外国に渡った日本の人々から外国と交流することで新しい文化が生まれ地域が発展していくことに気付けるようにする。最後には、日本に新生活や仕事を求めて訪れる外国の人々が増えていることや、その人たちの気持ちを知ることで、自分たちにできることを考え、地域の外国の方々と交流する等の実践行動につながるようにする。

全体のねらい

外国のことを身近に感じ、日本とのつながりを知ることで、様々な国と共生することの重要性を感じ、これからの日本と外国の多文化共生社会について考え実践行動につなげる。

アクティビティ1　「アフリカを身近に！外国とのプラスの出会い」

●概　要

アフリカ（ナミビア）のクイズに答えたり、たくさんあるアフリカ布の中から自分のお気に入りを選んでくるみボタンやしおりを作ったりすることで、遠いアフリカとプラスの出会いをして、身近に感じることができるようにする。

●ねらい

アフリカと日本の違いを知り、外国への興味・関心を高める。

●主な対象

小学生

●用意するもの

・クイズ資料（P69～71）：パワーポイントで投影、ワークシートを作成するなど対象や場面に応じて準備する。

※以下はいずれも人数、一人あたりの作成数などで量を検討する。

・アフリカ布のハギレ（インターネット等で購入可能）
・くるみボタン作成キット（100円ショップ等で購入可能）
・ヘアゴム等
・しおりの台紙（厚紙）
・しおり用の短いヒモ
・穴あけパンチ
・はさみ、糊：人数分（または班で共有する）

●所要時間

45分～

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1．アフリカに関するクイズを行う。 （P69～71参照）	「クイズ」「○×クイズ」「写真クイズ」のクイズを行う。学年の実態、所要時間に合わせてこれらのクイズのうちから適宜問題を選んでもよい。
2．1．でアフリカ、ナミビアの概要を知った上で、アフリカ布でくるみボタンやしおりをつくる。 （しおり作成例） 厚紙に各自好きな絵（形）を書き、ハサミで切り取った状態にしてハギレを糊で貼っていく。両面に布を貼ったら、穴あけパンチで1か所穴を開け、ヒモを通す。	クラフトは自分が使っても、大切な人へのプレゼントにしてもいいことを伝え、対象に合わせてアフリカ布を選ぶように助言する。

ふり返り 友だちと作品を見せ合い、感想を交流する。	

クイズ

問　題	答　え
アフリカで知っている国をたくさんあげてみましょう。	ナミビア・南アフリカ・モロッコ…
アフリカは何カ国ありますか。地図で確かめてみましょう。	54カ国
アフリカの人口はどれぐらいでしょう。 ①約１億人　②約５億人　③約15億人	③約15億人
日本に暮らしているアフリカ人は何人ぐらいでしょう。自分の住んでいる市町の人口と比べてみよう。	約２万1000人
ナミビアはヨーロッパのある国のまちなみと似ています。それはどこでしょう。 ①イギリス　②スペイン　③ドイツ	③ドイツ（写真①参照）
日本がアフリカから輸入しているものはどんなものがあるでしょう。	レアメタル・シアバター・タコ・スイカ・オクラ・ゴマ・グレープフルーツ・ワイン・ガーベラ・チョコレート・コーヒー・ルイボスティ等
NHK紅白歌合戦で約8000万年前に誕生した世界最古の砂漠である「ナミブ砂漠」から生中継した歌手はだれでしょう。	MISIA（第63回NHK紅白歌合戦）
ナミブ砂漠の広さは日本のどこと同じぐらいでしょう。 ①小豆島　②四国　③九州　④北海道　⑤本州	④北海道
雨がほとんど降らないナミブ砂漠の横に何があるか、地図で確かめてみましょう。 ①山　②川　③海	③海
ナミブ砂漠の砂はどこからきたでしょう。 ①空から降ってきた ②海から流れてきた ③もともとそこにあった	②海から流れてきた
ナミブ砂漠はどうして赤いのでしょう。 ①赤い絵の具がまざっている ②太陽で焼けた ③鉄分が入っている	③鉄分が入っている

○×クイズ

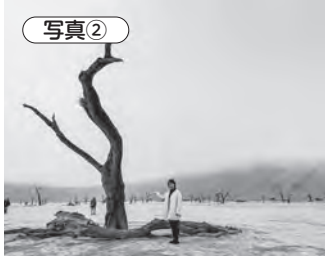
問　　題	答え　（すべて○）
ナミブ砂漠は寒い。	○　朝夕は冷え込んで10℃以下になることもある。（写真②参照）
ナミブ砂漠には10ヵ月以上水を飲まずに生きている動物がいる。	○　オリックス ナミビアの国章にも描かれている。（写真③参照）
ナミブ砂漠には緑色の葉をつけた元気な木がある。	○　季節河川や地下水脈、霧から水分を得ている。（写真④参照）
ナミビアは太陽が東からのぼって北を通り西にしずむ。	○　南半球のナミビアは太陽が北側を通る。（写真⑤参照） →ペットボトルの影とコンパスの向きを確認。影が南側にあり、太陽は北側にあることが分かる。
ナミビアの牡蠣はとても美味しい。	○　大西洋で養殖された新鮮な牡蠣がレストランで食べられる。 （写真⑥参照）
ナミビアの小学校では４年生からすべての授業が英語で行われるようになる。	○　３年生までは部族ごとの言語。学校では各部族の歌やダンスを披露する場があり、それぞれの文化が大切にされている。 （写真⑫参照）

写真クイズ（見本） ※写真データはウェブ上からダウンロードしてください。

問　題 この中からナミビアの写真を選びましょう。（このとき、児童生徒に見せるのは写真のみ。写真の下の解説は補足説明のときに使う）

答　え すべてナミビアの写真

ドイツの植民地時代の建造物が多い。



朝夕は冷え込んで10℃以下になることもある。

オリックスが水を飲みにきている。

ナミブ砂漠では木々を多く見ることができる。

日本は北側・ナミビアは南側に影ができる。

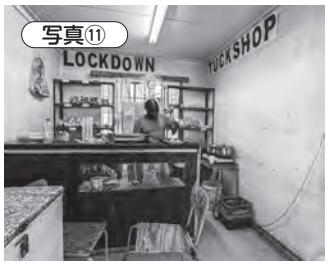
大西洋で養殖された牡蠣。新鮮で美味しい。

大西洋から赤いナミブ砂漠が見えている。

大西洋にフラミンゴの群れがいる。

ナミブ砂漠のロッジにあった太陽光発電設備。

日産の自動車が販売されている。



小学校には昼食などが買える売店がある。

学校では各民族の文化が大切にされている。

コーンロウとよばれる髪型が美しい。

街には分別できるおおきなゴミ箱がある。

ナミビアはまっすぐな道路が多い。

スーパーは日本の食材も売っている。

レストランには日本の醤油がある。

ナミビアの日本国大使公邸の入り口。

日本のODAの現場。（ウォルビスベイ港）

JICAのお米プロジェクトで作られている。

アクティビティ2　「もし今、鎖国をしたらどうなるの？私たちの身の回りの物はほとんど…」

●概　要

アフリカや他の外国と日本の物のつながりについて知り、もし日本が外国との交流がなくなると私たちの日常生活はどうなるかを考えることで、他国との共生の大切さに気づけるようにする。

●ねらい

日本が外国と共生していくことの大切さに気づく。

●主な対象

小学生

●用意するもの

・「『生きる力』を育む国際理解教育実践資料集」「世界の現状と課題　第１節　グローバル化と相互依存②　やってみよう！カード」（P74～75）：グループ数分（予め両面印刷をして切り離しておく）
・模造紙、ペン：グループ数分
※上記以外でも、学校図書館等で身近な物が輸入品であることが分かる資料を準備する。

●所要時間

45分

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
「アフリカと日本のつながりを考えよう」 １．P74～75のカードを各班に１セット配る。	１班３人程度でグループを作っておく。イラスト面を上にして配布し、カード裏の文字の面（回答）は見ないで進めるよう解説する。
２．「私たちの身の回りの物で外国とつながっているものを予想しよう」 カードの中からアフリカとつながりのあるものを選び、どのようにつながっているのかをグループごとに意見を出し合う。	グループごとにできるだけ多くリストアップするように助言する。 グループで選択肢にない物が出たら空欄のカードに書いても良い。
３．意見交換が進んだところで、裏面を見ながら答え合わせをする。	そば・寿司・たたみ・ガラス・くつなど、日本の生活に特になじみ深いものがどこから来ているか、資料を提示しながら解説する。
４．「日本が今、鎖国をしたらどうなるだろう？」 日本の輸入がストップしたら私の生活にどのような変化、問題が起こると思うか考え、グループごとに模造紙に派生図でまとめていく。	

5．他のグループが書いた派生図を回し読みしながら考えを共有して、感想を伝え合う。	
ふり返り ふり返りカードを各自で書く。	

（表面）

やってみよう！

※切り取って使うこともできます

下にある18品目は、私たち日本人におなじみのものばかりです。この中から、アフリカとつながりがあるものを選びましょう。空白の部分には、わたしたちの身近にあるもので、アフリカとつながりがあるものを考えて書きましょう。

たこ焼き	携帯電話	蚊取り線香	チョコレート（カカオ）
ゴマ	電気	イセエビ	ダイヤモンド
スシ（マグロ）	バラの花	ガソリン	バニラアイス
桃のジャム	化粧品	うなぎ	ゲーム機
プラチナの指輪	コーヒー		

考えてみよう！

上で選んだものが、どのようにアフリカとつながっているのかを考えて、自分の予想を書きましょう。それから、班ごとに意見を出し合い、考えをまとめましょう。

（裏面）

つながりを見てみよう

前のページにあったものは、アフリカとどのようなつながりがあるのか、下の表で確認してみましょう。つながりを確認しながら、地図帳で関連のある国の場所も探してみましょう。

チョコレート（カカオ） チョコレートの原料であるカカオの約76%は西アフリカに位置するガーナから輸入されており、他にもコートジボワール、ナイジェリアなどから輸入されています。	**蚊取り線香** 蚊取り線香に使われている除虫菊はケニアやタンザニアなどの東アフリカから輸入されています。	**携帯電話** 携帯電話などの精密機器にはレアメタルがたくさん用いられています。レアメタルの一つコバルトはコンゴ民主共和国やザンビアなどで採掘されています。	**たこ焼き** 日本で消費されるタコの約60%が北部アフリカに位置するモーリタニアやモロッコから輸入されています。
ダイヤモンド アフリカの南部はダイヤモンドの一大産出地であり、ボツワナ、コンゴ民主共和国、南アフリカ共和国などが有名です。	**イセエビ** 南アフリカ共和国（輸入額の10.4%）やナミビア（輸入額の9.6%）からイセエビを輸入しています。	**電気** 日本は天然ガスをナイジェリアやエジプトから輸入しており、それらは火力発電の燃料として使われています。	**ゴマ** ゴマはアフリカ原産と言われており、多くがナイジェリアやブルキナファソ、タンザニアなどのアフリカの国々から日本に輸入されています。
バニラアイス バニラの原料となるバニラビーンズの90%以上がマダガスカルから輸入されています。他にウガンダやセーシェルなどからも輸入されています。	**ガソリン** 日本は中東だけでなく、スーダンやチャドなどアフリカからも石油を輸入しています。	**バラの花** 日本はケニアやエチオピアからバラを輸入しています。ケニア産のバラが輸入バラの約20%を占めています。	**スシ（マグロ）** 寿司や刺身で使われているクロマグロは、北アフリカ（モロッコやアルジェリア、チュニジア）からも輸入されています。
ゲーム機 ゲーム機などにはタンタルというレアメタルが使われています。アフリカではエチオピア、ルワンダ、モザンビーク、コンゴ民主共和国などがタンタルの産出地です。	**うなぎ** 近年、日本近海ではウナギの稚魚の不漁が続いており、2012年にマダガスカルからアフリカ産ウナギの稚魚の輸入が開始されています。	**化粧品** 化粧品には粘り気を出すためにアラビアゴムが使われています。アラビアゴムの産地は、スーダン、チャド、マリ、セネガルなどが挙げられます。	**桃のジャム** 南アフリカ共和国から桃（輸入額の19.5%）やあんず（輸入額の10.7%）などの果実加工品を輸入しています。他にエジプトなどからもジャムを輸入しています。
		コーヒー アフリカのコーヒー生産国としては、タンザニアやエチオピア、ケニアが知られており、日本ではモカやキリマンジャロといった名前で売られています。	**プラチナの指輪** 貴金属などによく使われているプラチナの約76%を南アフリカから輸入しています。他に産出国としてジンバブエなどが挙げられます。

出典：JICA「日本・途上国 相互依存度調査」
財務省「貿易統計」
外務省パンフレット「日本とアフリカ」

アクティビティ3　「外国へ渡った日本の人たち」

●概　要

JICA海外移住資料館の資料によると、日本人の海外移住は、「1866年、江戸幕府が海外渡航禁止令（鎖国令）を廃止してから150年以上の歴史」があるとされている。遠く海をわたった日本人は、まったく異なる社会や文化の背景を持つ人々とともに、移住先国で新たな社会づくりに参加し、地域の社会・経済・文化の発展に大きく貢献してきた。このアクティビティではハワイに移住した日本人について考える。ここでは次のアクテビティにつなげるために厳しい差別の現実についてはふれず、言葉や文化が違うことによるプラス面とマイナス面について考え、共生の大切さに気づけるようにしたい。

●ねらい

相手の国の文化を尊重しながら共生することの大切さに気づく。

●主な対象

小学生

●用意するもの

・「海外移住資料館」のサイトなどから、以下に関連する画像、情報を予め収集しておく。
　・「海外移住の概況」
　・「移住奨励ポスター」
　・「ハワイ官約移民」
　・「七つ道具」
・動画「弁当からミックスプレートへ」JICA横浜 海外移住資料館
　https://www.youtube.com/watch?v=lJY2NUlyyGc
・写真21（P78）：投影の場合はデータ、写真を配布する場合はグループ数分印刷しておく。
・模造紙、マジック：グループ数分（ふせんを使っても良い）

●所要時間

45分

用語の解説

「日本人の海外移住」

日本人の海外移住が本格的に始まったのは、1885年ハワイ王国におけるサトウキビ・プランテーションでの就労である。その後、アメリカ合衆国、カナダといった北米への移住、そして1899年にはペルー、1908年にはブラジルへと広がった。そして、1924年にアメリカで日本人の入国が禁止されると、大きな流れが北米から南米へと移っていく。第二次世界大戦後にも約26万人が移住しており、最後の移民船にっぽん丸は1973年２月に285名の移住者を乗せて横浜を出港している。

現在は全世界に380万人以上（2021年）の海外移住者や日系人がおり、そのうち220万人以上が中南米諸国に在住していると推定されている。また、かつて日本人が移住した国々から、その子孫である日系人とその家族を含めて約21万人（2017年）が、就労や勉学の目的で来日し、日本で生活している。

こうした経緯から、日本人の海外移住の歴史、そして移住者とその子孫である日系人について、広く一般の方々（とくに若い世代）に理解を深めてもらうことを目的として、海外移住資料館が開設されている。（JICA横浜　海外移住資料館HP参照）

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1．「ビッグファミリー」と題がついている写真㉑を投影する。（または印刷した写真をグループに１枚ずつ配布する）	１グループ３人程度で考える。
2．これに写っている人たちはどんな関係の人たちなのかを考える。	助言、解説する内容についてはＰ76の「資料・解説」を参照。
3．「海外移住資料館」のサイトなどから、以下に関する資料を収集して提示、解説する。 「海外移住の概況」 「移住奨励ポスター」 「ハワイ官約移民」 「七つ道具」	海外移住した人数が全国で76万人もいたこと、移民県とよばれるほど移住した人が多い県があったことを解説。
4．画像や情報を見ながら、移住した人々について考える。	現地での仕事の様子、日本を離れるときの持ち物などから当時の生活が想像できるようにする。
5．模造紙とペンを配る。	
6．「弁当からミックスプレートへ」の動画を見て、日本から外国へ移住した人々のプラス面とマイナス面をグループで考え、対比しながら模造紙に書き込む。 	主に以下の点に気づけるようにしたい。 ・日本の「ふつう」は外国へ行くと個性となり、それがプラス面になることもある。 ・マイナス面は人権が守られないことで起きることが多い。 ・文化が組み合わさることで新しい文化が生まれ、よりよく発展していくことがある。
7．他のグループが書いた内容を読んで、考えを共有し、感想を伝え合う。	
ふり返り ふり返りカードを書く。	

●資料・解説

※写真データはウェブ上からダウンロードしてください。

写真㉑「ビッグファミリー」

1891（明治24）年に山口県からハワイに移住した１組の夫婦の子孫の写真で、最初に移住した人の孫である日系三世から、さらにその三世のひ孫である六世まで写っており、家族が世代を重ねるごとに多様化してことがわかる。

アクティビティ4　「日本に渡ってきた外国の人たち」

●概　要

日本の人口減少や外国人の人口の様子が分かる資料を提示した後、アクティビティ３で作成した「日本から外国へ移住した人のプラス面とマイナス面」をふり返り、日本に住んでいる外国人の人権について考える。そして、外国人の方々が住みやすい町のイメージをふくらませ、そのために自分ができそうなことを考える事で実践行動につながるようにする。授業後には地域の外国人の方々との交流等が企画できるとよい。

●ねらい

日本に住む外国人の方々が感じていることを考え、どうすれば外国人との共生の社会を作っていくことができるかを考えることができる。

●主な対象

小学生

●用意するもの

・外国人人口などに関する資料（P80～81）：事前に投影できるよう準備する。
・外国人青年のポスター（P82）（姫路市教育委員会作成）
・模造紙、ペン：グループ数分（ふせん等を使っても良い）

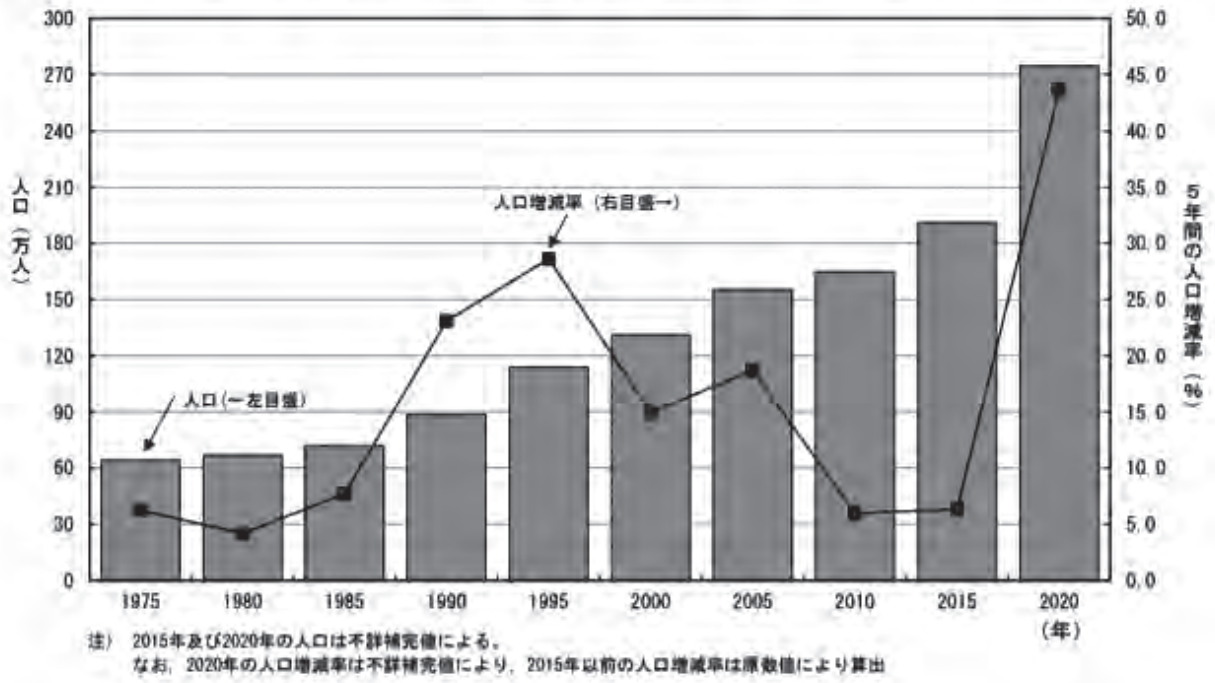
●所要時間

45分

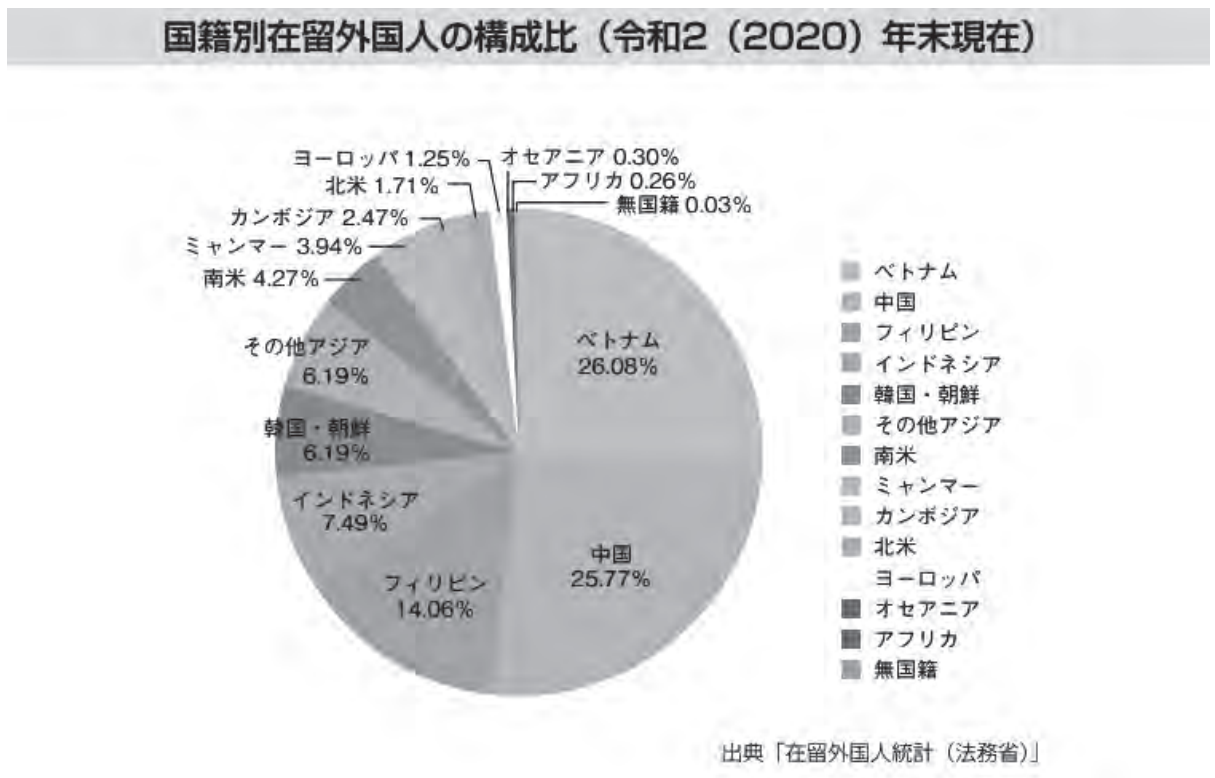
●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1．外国人の人口に関する資料を提示した後、アクティビティ３で作成した「日本から外国へ移住した人のプラス面とマイナス面の対比」をふり返り、日本に来た外国人がどんなことを思っているのか考える。	１グループ３人程度で考える。 課題に連続性を持たせることができるため、アクティビティ３とセットで行うことが望ましい。
2．「外国人青年のポスター」を提示し、［　　］にどんな言葉が入るかを考える。その後、［　　］に入る言葉が「日本」であることを伝え、青年の気持ちを考える。	「［　　］にいるほど、［　　］が遠ざかっていく」という文の［　　］に身近な地名を入れることで、自分事として捉えられるようにする。
3．「文化や言葉が違う人々にも住みやすい地域って、どんなところだろう？」 模造紙、ペンを配り、外国人にも住みやすい日本や地域になるために必要なことをグループで考え、派生図にまとめていく。	アクティビティ１－３をふり返りながら考える。
4．他のグループが書いた派生図を読んで、考えを共有し、感想を伝え合う。	
ふり返り ふり返りカードを書く。	

資料（外国人の人口）

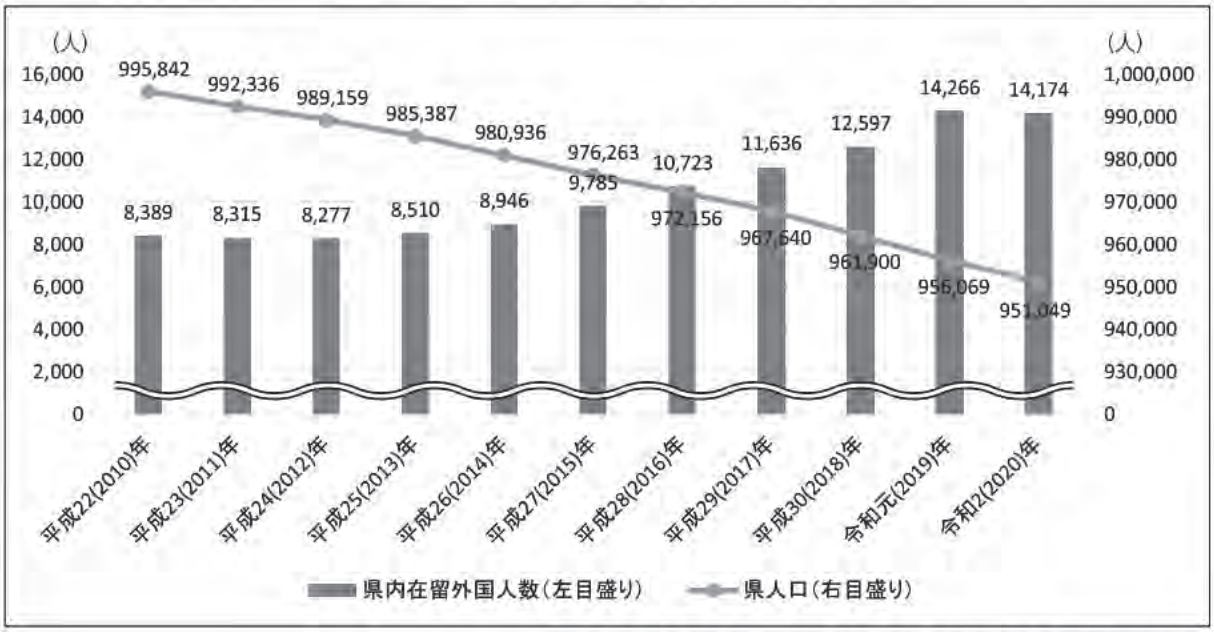


出典：「Your News Online」より



出典「在留外国人統計（法務省）」

県内在留外国人数と県人口の推移



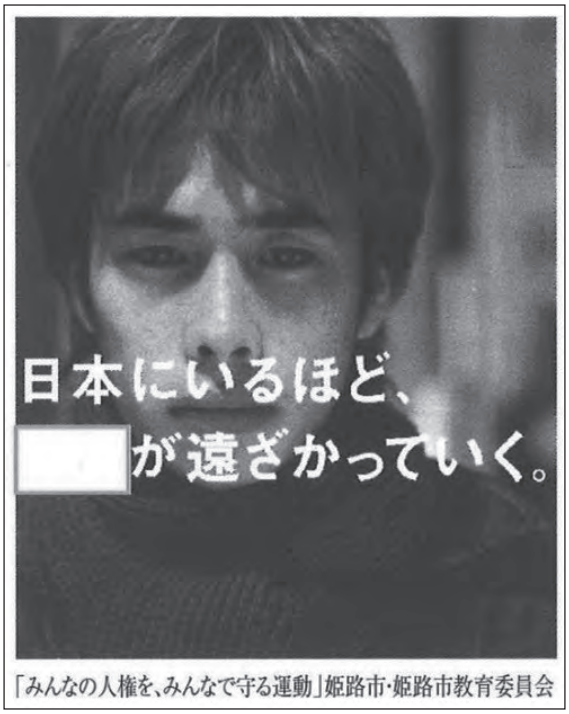
出典「在留外国人統計（法務省）」「香川県人口移動調査（統計調査課）」

在留外国人の市町人口に占める割合（令和2（2020）年末現在）

	人口（人）	在留外国人（人）	人口に占める在留外国人の割合(%)	構成比の順位
高松市	417,803	5,191	1.24	10位
丸亀市	109,589	2,099	1.92	5位
坂出市	50,683	1,028	2.03	4位
善通寺市	31,643	288	0.91	14位
観音寺市	57,503	1,013	1.76	6位
さぬき市	47,043	439	0.93	13位
東かがわ市	28,300	280	0.99	12位
三豊市	61,917	1,056	1.71	7位
土庄町	12,856	89	0.69	17位
小豆島町	13,889	159	1.14	11位
三木町	26,925	243	0.90	15位
直島町	3,106	26	0.84	16位
宇多津町	18,704	501	2.68	2位
綾川町	22,714	365	1.61	8位
琴平町	8,476	184	2.17	3位
多度津町	22,459	987	4.39	1位
まんのう町	17,439	226	1.30	9位
	951,049	14,174		

出典「在留外国人統計（法務省）」「香川県人口移動調査（統計調査課）」

外国人青年ポスター



参考文献・引用資料

・「2030/40年の外国人との共生社会の実現に向けた取り組み　調査・研究報告書」JICA緒方貞子平和開発研究所、2022年
https://www.jica.go.jp/jica_ri/publication/booksandreports/20220331_01.html
・「よりよい未来をともに学び・ともに創るファシリテーターのための参加型アクティビティ集」特定非営利活動法人NIED・国際理解教育センター発刊
・「日本とアフリカ」、外務省　https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100498557.pdf
・「『生きる力』を育む国際理解教育実践資料集」JICA地球ひろば発刊、初版2013年10月
https://www.jica.go.jp/cooperation/learn/material/educational_practice.html
・「モノから知る日本と世界の結びつき」保岡孝之 監修、学研プラス、2006年
・JICA横浜 海外移住資料館　https://www.jica.go.jp/domestic/jomm/outline/index.html
・「弁当からミックスプレートへ」（アニメーション）
https://www.youtube.com/watch?v=lJY2NUlyyGc
・外国人人口及び外国人人口増減率の推移（1975年～2020年）
https://yournewsonline.net/articles/20211130-japan-population-national-census-2020/
・「国際理解教育教材　世界の国を知る・世界の国から学ぶ『わたしたちの地球と未来』」愛知県国際交流協会
https://www2.aia.pref.aichi.jp/koryu/j/kyouzai/index.html
・「多文化共生のためのシティズンシップ教育実践ハンドブック」多文化共生のための市民性教育研究会 編著、明石書店、2020年
・「じんけんスキルブックⅢ」兵庫県人権教育研究協議会
・「ナミビアを知るための53章」水野一晴、永原陽子 編著、明石書店、2016年
・「在留外国人統計」法務省、2023年６月
・「香川県人口移動調査」統計調査課
・「多文化共生事業調査」香川県国際課
・人権啓発パネル（外国人青年のポスター画像）姫路市教育委員会

実践事例報告

プログラム作成・実践者　阪倉　順子　　学 校 名　小豆島町立苗羽小学校

担当教科　社会

実践教科

単 元 名　６年社会「世界の中の日本、世界の未来と日本の役割」
３～６年「総合的な学習の時間・多文化共生」

【授業の概要】

⑴ 対等な関係であるという学びから

教師海外研修へ行くにあたり、当初、私は無意識のうちに先進国の日本という立場からアフリカのナミビアを「課題が多い国」と見ていたように思う。しかし、研修を通して現地で国際協力活動を行っている日本の方々の姿勢を実際に見たことで、「国」に上や下といった関係などなく対等であること、違いを否定することなくそのまま受けとめることの大切さを学んだ。子どもたちには、国の違いは「特色」と捉え、どの国とも肯定的で身近に感じられるような出会いができるようにしたいと思った。

授業では、６年生社会「世界の中の日本」で教科書に例示されている国に加えて、アクティビティ１「アフリカを身近に！外国とのプラスの出会い」で「ナミビア」、月に１回来校するALTに「アメリカ」、小豆島在住の青年海外協力隊OVに「セネガル」「ボリビア」、１学期に体験入学していた６年生に「スペイン」（オンラインで交流）など、様々な国についてプラスの出会いを行った。よく知る人から外国のことを聞くことで、遠い外国を身近に感じ、興味・関心を高めることができた。（１～５年生はアクティビティ１のみ行った。）

⑵ 外国から日本を見たことで、日本の課題が明確になったことから

日本は人口とともに労働力、そして税収も減っていくことが予想されている。食糧自給率も低く資源も少ない。貿易が滞ってしまうと、たちまち生活に困難が生じる。これらのことは、知識としては知っていたが、日々の生活の中で意識することはあまりなかった。

ナミビアでは、日本の生活では味わうことのない様々な不便さを体験したり、物が少なく学習用品等が不足する中での授業を見たり、ナミビアをはじめとしたアフリカから日本に輸出されている多くの物を知ったりしたことで、物流や貿易の重要性を実感した。更に、資源が少ない日本にとっての国際協力は他国支援だけを目的としているのではなく、より多くの国と良好な関係を築いておかなければ生き残れないという、日本の厳しい現実への理解も深まり、これらをアクティビティ２に活かした。

授業は６年生総合的な学習の時間に行った。普段、意識せずに生活していると気付かないが、自分の身の回りの物をよく見ると、着ている服、持ち物、毎日食べている食事など、どれも外国から輸入されているものばかりであること、日本の文化ともいえる「そば」「寿司」「たたみ」も、そのほとんどが外国から材料がきていることから、鎖国をしたらどうなるかを考え、外国とのつきあいがなくなると私たちの生活は維持できなくなることを実感することができた。子どもたちは日本の課題は食糧

自給率の低さだけではないことが分かり、外国と良好な関係を築いていくことの大切さに気付くことができた。

⑶ 実際に国と国をつないでいるのは、資金や物の提供よりも人と人とのつながりや信頼

ナミビアで国際協力をしている日本の人々は、言葉や考え方などが違う現地の人々と共に様々な課題に向き合っていた。そして、その課題一つ一つを乗り越えていく過程において、お互いが信頼関係で結ばれていく様子がよく分かった。彼らはいわば日本の代表者であり、ナミビアの人々から日本という国を信頼してもらうきっかけになっているようであった。国と国がつながるには、まず人と人がつながってお互いを理解し、信頼し合うことが大切だということを学び、社会の授業やアクティビティ３・４に活かした。

６年生社会「世界の未来と日本の役割」では、外国の様々な課題について学習する場面で、地域の先輩でもありJICA南スーダン事務所で国際協力の仕事をされている山根誠氏とオンラインでつないで話を聞いた。国の困難な課題一つ一つに対して、現地の人に寄りそいながら丁寧な協力活動を行っていることがよく分かった。

単元の終わりには、世界の課題について①日本として、②自分（個人）として、今できることと、将来できること・やってみたいことについて考え、遠い世界のことを自分事として考えることができた。子どもたちが、外国で活躍する日本人について興味をもったところでアクティビティ３を行った。

日本人が外国へ、しかも旅行ではなく仕事で多くの人が移住していたことに、子どもたちは驚いているようであった。また、コンビニエンスストアやファミリーレストランで見かける「ミックスプレート」が、日本人移住者のお弁当がきっかけで新しくできた文化であることにも驚いていた。移住先の国で、異なる文化背景を持つ人と交流をすることによって、その地域の社会・経済・文化の発展につながることを理解することができた。

次に、地域のゲストティーチャーを招き、アクティビティ４をアレンジして全校生を対象に授業を行った。子どもたちはアクティビティ１の授業を受けたり、校内のアフリカコーナーで現地の物を見て触る体験をしたりしているので、遠いアフリカに対しては身近に感じるようになってきている。しかし、東南アジアについては、その国々の人を町でよく見かけているわりには知っていることが少ない。そこで、東南アジアを身近に感じてもらうために、教師が旅行したときの体験談から「楽しかったプラスの面」と「悲しかったり困ったりしたマイナス面」を考え、言葉や文化が違うとどんなことが起きるのかを身近に感じられるようにした。

その後、地域のゲストティーチャーとして役場の人権推進室の方とやさしい日本語教室を運営している方から、自分たちの住んでいる地域に外国人が急増していることや、その人たちが日本での生活の中で感じていることなどを聞いた。「外国人は全員英語ができると思わないで」「買い物やゴミ出しで分からないことがある」「やさしい日本語で話してほしい」「地域の行事に参加して日本の人と仲良くなりたい」

といったプラス面や、マイナス面を知ることができた。そして、そんな思いをもった外国の方々を学校に招いた交流を計画することにした。学年団ごとに分かれ、日本や身近な小豆島の情報紹介、やさしい日本語でできるゲームなどを考え、交流を行い、同じ地域に住む外国の方々と仲良くなりたいという意欲をもつことができた。

【授業実践をした上での感想・ふり返り】

教師海外研修での気付きを授業実践する中で、新しい発見をしたり、様々な立場に立って考えたり、これからの地域のあり方を創造したりしたことで、子どもたちと共に自身も成長することができたように思う。このような機会を頂いたことに深く感謝している。

未知なるものへの好奇心を育てよう！
～他国の人と理解し合うために大切なもの～

はじめに

JICA教師海外研修に参加するまでに、「JICA四国教師国内研修教室と世界をつなぐ～SDGsを学校で」に2021年度と2022年度の二回参加していた。そこで「異文化理解」「多文化共生」「国際教育」「開発教育」などを学んだが、やはり私には難しくて今でも、何をどう実践していけばいいのかわからない。でも、一番心に残っていることは、異文化に対して「前向きに（プラスの気持ちで）出会う」ことを大切にしてほしいという講師の方の話だった。

何の予備知識もなく「教師海外研修」のパンフレットを見ても、心を動かされることはなかっただろう。その講座でいろんな人と出会って交流することで、前向きな気持ちで「ナミビアに行こう」と思えた。

少しずつ段階を踏むことで、不安や心配を小さくして、好奇心の向くまま一歩を踏み出す勇気をもつことができたら、人生はより豊かになるはずだ。そんなことを考えながら、生徒の心の中に何かのタネを撒くつもりで、このアクティビティを考えた。

この教材の使い方・参加のルール

この教材は、道徳の教科書にも取り上げられている「むこう岸には」という絵本に基づいている。主人公グラシエラは、両親や周囲の人たちが言う既存の価値観の中で育ちながらも、むこう岸の男の子ニコラスと仲良くなり、将来は橋を架けたいという夢をもつ。かれらに自分を重ね合わせ、既存の価値観を知りつつも新しいものへ向かう好奇心と勇気を育んでもらいたい。

私たちにはそれぞれ、いろいろなものの見方、感じ方がある。それを自分と違うからといって否定するのではなく、違いを認めつつ、ともによりよい関係をつくることの大切さを知ってもらいたい。その上で、お互いに協力したり助け合ったりする道を探ることの大切さを知り、地域や国、世界の一員であることを感じてもらいたい。

全体のねらい

「他国の人と理解し合うために大切なのは、どんな心だろう。」というテーマで、海外の文化や習慣を学ぶことで、異文化理解への興味・関心をもち、異なる文化や価値観をもつ人と交流することに楽しさや喜びを実感する。

今後も更なるグローバル化が進展する中で、世界中の人と協働してよりよい未来を切り拓いていくために、国際的な視野をもち、異なる文化や価値観を尊重して共生するためにはどうしたらいいか考える姿勢を育む。

アクティビティ　「もしもあなたがグラシエラだったら、どうしていたかな。」

●概　要

本文を読んだ後、もしも自分がグラシエラならどんなことを思うか、感じるか、どう行動するかを考えてみる。そして、どうしてそう思ったか、どうしてそのような行動をしたかなど考えてみる。その意見をお互いに話し合って、いろんな価値観があることに気づく。

異文化理解、異文化交流を楽しいと思ってもらえるために、まずは不安を取り除いてみることから始める。びっくりすること、楽しいことなどを知ってもらっても、いざ交流するとなると尻込みしてしまうのではないかと考えた。また、自分が困っている立場になったあとに、日本に来てトラブルやハプニングに見舞われている方もいるのだということを知ってもらう。その上で自分にできることを考える。

●ねらい

・川の両岸に住む肌の色や髪の毛、服装が異なる少女と少年の交流の物語を導入にして、他国の人々の生活や文化に興味・関心をもち、互いに尊重する気持ちを育てる。
・実際に海外へ行くとき、どんなことに気をつけたらいいのか考えてみることで、海外から来た人に対する見方や接し方について、より身近に思いやる気持ちを育てる。

●主な対象

中学生

●用意するもの

・絵本「むこう岸には」ルタ・カラスコ著・宇野 和美訳、ほるぷ出版、2009年
・「もしもあなたがグラシエラだったら、どうする」カード（P91）※予め切り離しておく
・「海外で困ったとき、どうする」カード（P92）※予め切り離しておく
・教員が体験した異文化でのできごとや写真など
・ワークシート：全員分（P93）
・ホワイトボードとマーカー：班ごとに１枚、１本

●所要時間

50分

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1．導入として「むこう岸には」の絵本を朗読する。	教師が、語りかけるように読み聞かせる。もしくは、朗読の音声があれば、それを使ってもよい。
2．読後感を隣の人と話す。	特に記述などせずに、思ったことを簡単に述べあう。
3．学びのテーマを伝える。 「他国の人と理解し合うために大切なのは、どんな心だろう。」	ワークシートの「学びのテーマ」の欄に書くよう促す。

4．「もしもあなたがグラシエラだったら、どうしていたかな。」を考える。 ３人から５人でグループになる。記録者を１人決めておく。	
5．各グループに、ホワイトボード（Ｂ４判程度）１枚、ホワイトボードマーカー１本、「もしもあなたがグラシエラだったら、どうするカード」の中から１枚を配布する。	
6．各グループで、配布されたカードに書かれた一つの課題について話し合う。「もしあなたがグラシエラだったら、カードの場面になったときどうする？」	教員は、相手の感覚や自分の感覚を大事にしながら話し合えているか、友だちの意見を受け入れた上で自分ならどう思うかを話し合えているか、等に目を向けて机間指導をする。
7．ワークシート「向こう岸には」の「考えてみよう！もしもわたしがグラシエラなら…」の欄に自分の考えや話し合った内容などを書き込む。記録者はホワイトボードに記録する。	グループで意見を集約するのではなく、出た意見や理由を箇条書きにする。
8．グループで出た意見を箇条書きにして、発表する。	話し合って深まった意見も発表する。
9．文中にある「この川に橋を架けるんだ」という言葉を取り上げる。「もし橋が架かったら、どんなことが起きるかな」と全体に問いかけ、それについてグループで話し合う。	国際交流や貿易などのポジティブな意見、戦争や差別などのネガティブな意見、両方とも同じように取り上げる。
10. 教員や身近な人の海外での体験を話す。	教員が体験した異文化でのできごとや写真などを使って、具体的な事例を提示する。驚きや意外なできごと、困ったことを話す。人から聞いた話や動画などがあるとさらによい。
11. 「もし、自分が海外に行って困ったとき、どうすればいいか」を考える。 グループで「海外で困ったとき、どうするカード」を１枚ずつ選ばせる。	海外旅行で遭遇する場面でも生徒が知らないであろうことを選択肢に入れると良い（メニューに写真がない、パスポート紛失の場合、現地の警察署や大使館へ行く必要があることなど）
12. 配布されたカードの課題について「そのような困ったことがあったときにどうするか」を考え、意見交換する。記録者はホワイトボードに記録する。	電子機器（翻訳機やマップなど）の活用もとりあげる。

13. 話し合った内容についてグループごとに発表し、他のグループの意見をワークシート「向こう岸には」の「行ってみなくちゃわからない。海外で困ったら…？」の欄にそれぞれ記入する。	
14. 「橋を渡ってきた人たちに、何ができるだろう」を考える。 グラシエラの立場から、ニコラスのように迎える立場になったとき、どんなことを気遣ったらいいのか、どんな手助けができるのかを考える。記録者はホワイトボードに記録する。	観光や留学、仕事で来日した人、近所に住んでいる外国籍の人などを想定すると、考えやすい。もしいない場合、ニコラスの立場で、グラシエラに対してどんなことをしてあげられるか考える。
15. 各グループで、意見をまとめて発表する。考えたことやグループで話し合ったこと、発表を聞いて思ったことや参考になったことなどを、ワークシートに書き込む。	
ふり返り 「この授業を通して、学んだことは何か」「他国の人と理解し合うために大切なものは、どんな心だと考えたか」「自分ができそうなことや今後、心がけていきたいことは何か」など、ワークシートのふりかえりに書き込む。書いたことを、グループで共有する。	授業を通して、友だちの考えや意見に新しい発見があったか。この活動を通して、友だちと協力できたこと、助けられた言葉などが書けるように、声かけをする。

●解　説

・学びのテーマは「他国の人と理解し合うために大切なのは、どんな心だろう。」としているが、その中で特にどんなところに重点をおくかを考えて授業展開を考える。例えば、「異文化への興味・関心」「多国籍交流において互いに尊重し合う心」「互いの文化を尊重し助け合う心」など、生徒の発達に応じて、変えていく。

・教員による海外経験については、過去の体験でもよい。また、見たり聞いたりした話でもよい。肝心なことは、生徒に興味・関心をもたせ、好奇心を呼び起こすものであるように心がけたい。

コラム

海外研修で一番心に残っているのは、ナミブ砂漠でスキップしたことだ。そのスキップは、まったくできていなかった。砂の上でスキップは踏めない、そんな当然のことが私の笑いのツボにすっぽりはまった。お腹が痛くなるのを堪えて、ずっと笑いながらできないスキップを続けた。いい年をした大人が大爆笑でスキップする光景は、自分でも滑稽だと思う。

この「できないことの面白さ」は、学校ではなかなか味わえない。学校は、できないことができるようになることが求められる場所だからだ。令和から改訂された学習指導要領では、かなりの学習内容が前倒しになった。そのために、子どもたちは日々追い立てられるように勉強し、教員も同じように詰めて授業をしていく。いつの間にか「失敗」を回避し、効率の良い勉強方法ばかりを追求している。本当の学びと

はなんだろうかと改めて問い直す機会になった。

二学期が始まり、全校生徒に向けてナミビア共和国で体験したことをたくさん話した。みんなよく聞いてくれていた。そして「旅行してみたい」「海外へ行ってみたい」など前向きな感想も聞くことができた。この小さなきっかけから、失敗をおそれない、おおらかな心をもってくれたら嬉しい。ナミビアで出会った人たちの陽気であたたかい笑顔を思い出しながら、将来どのような人生を送っても、最後には笑顔で乗り越えられる力が、生徒の心の中で育つようにと願う。

「もしもあなたがグラシエラだったら、どうする」カード

村のみんなが「あっちの人たちは、私たちと違っているんだよ。へんな物を食べているし、髪の毛をとかさないし、なまけもので騒々しいって」と言う。あなたがグラシエラならどう思う？	「むこう岸には、絶対行くんじゃないぞ」と父さんが言う。「見てはだめ。私たちとは違うのよ」と母さんが言う。それを聞いて、あなたがグラシエラならどう思う？
ある日むこう岸から男の子が手を振ってきた。私は別の方を見てやったけど、男の子はあきらめなかった。あなたがグラシエラなら…？	朝早く、岸辺に行ったら舟があった。むこう岸の男の子が持っている綱は、こっちの舟まで続いている。あなたがグラシエラならどうする？
むこう岸に着くと、男の子が降りるのを手伝ってくれようとした。あなたがグラシエラなら、彼の手をとる？	岸に着いて、男の子がスカーフに入れてくれようとしました。そのスカーフには独特の匂いがしました。あなたがグラシエラなら、スカーフに入る？
男の子の家族の家に行ったら、みんながいっせいに、大声で話しかけてきた。あなたがグラシエラなら、どうする？	おばさんが、あったかいミルクを出してくれたけれど、いつも飲んでいるミルクと匂いや味が違いました。あなたがグラシエラなら、どうする。
おばあさんは、うちのおばあちゃんとおんなじようにショールを編んでいた。でも、色遣いが変わっている。あなたがグラシエラなら…？	焼きたてのパンの匂い。うちで焼いたパンとおんなじだ！でも、なんか形が変わっている。あなたがグラシエラなら、どうする？

シャワーを浴びようとしたが、どうしたらお湯が出るのかわからない。	レストランやファストフード店で、メニューがわからない。
道に迷ってしまい、どうしても目的に着かない。	財布とパスポートを落としてしまった。
お腹が痛くなって、なかなか治らない。	英語が公用語ではないので、言葉が通じない。
悪天候で、乗るはずの飛行機が飛ばなくなった。	民族衣装を買いたいけれど、サイズがわからない。洗濯の方法が知りたい。
宿泊先のホテルで、予約していた部屋がなかった。	到着した空港で、預けた荷物が出てこない。

ワークシート

「むこう岸には」

学びのテーマ　：

考えてみよう！「もしもわたしがグラシエラなら…」

行ってみなくちゃわからない。海外で困ったら…？
どうしたらいいだろう？ ～対策と疑問点～　他の班の話を聞いてメモをとろう。

橋をわたって来ている人たちに……「ニコラスの立場で、考えてみよう」

ふりかえり

実践事例報告

プログラム作成・実践者　田中　麻生　　学 校 名　高松市立木太中学校

担当教科　国語

実践教科　Ⅰ総合（国際理解・異文化交流）、Ⅱ道徳（中学２年　国際理解・国際貢献）

【授業の概要】

Ⅰ総合（国際理解・異文化交流）

マラウィ共和国から来たHAWAさんと交流をした。HAWAさんは、マラウィ共和国「SKY Kids Academy」の園長で、2023年６月日本研修ツアーで来日。日本の教育機関（こども園、幼稚園、小学校、中学校など）、「公益社団法人セカンドハンド」、自然公園や農園を視察。元JICA海外協力隊員の田村さんとのつながりで、学校で国際交流をすることができた。

・マラウィ共和国やHAWAさんの紹介
・クラスごとに英語で、日本の中学校について紹介（制服や委員会、給食、行事など）
・マラウィ共和国の中学校についての質問コーナー
・チェワ語バージョン「幸せなら手をたたこう」を踊る

Ⅱ道徳（中学２年　国際理解・国際貢献）

⑴ **単元名**「むこう岸には」（絵本「むこう岸には」）

⑵ **単元のテーマ**　他国の人と理解し合うために大切なのは、どんな心だろう。

⑶ **単元のねらい**

川の両岸に住む肌の色や髪の毛、服装が異なる少女と少年の物語を描いた文章を通して、他国の人々や文化を理解するとともに、互いに尊重し合う心を養う。

⑷ **概　要**

・絵本を導入に、登場人物のグラシエラやニコラスの立場になり、自分ならどうするかを考えた。
・海外旅行へ行った先で遭遇する困りごとにどのように対処するかを実践的に考えた。
・日本に来ている人に私たちは何ができるかを考えた。

⑸ **指導上の留意点**

ポジティブに異文化と出会うことを心がける。クラスでの話し合いを通して他国の人々と理解し合うために、文化や習慣など様々な面から考えられるよう声かけをする。また、登場人物の考えにふれることで、自分自身についてふりかえり、身近なところから、他国の人を理解することについて考えるようにする。

⑹ 生徒の感想や学び・気づき

・他国の人たちとわかり合うためには、はじめは何も分からず、とても不安になることがあるかもしれないけれど、拒否しようとせず、少しずつ理解していくことでともてよい関係が築けるのではないかと思いました。
・相手の文化を受け入れ、助け合えるようなやさしい心をもつようにしたいです。そして、たとえ言葉が話せなくても、アプリなどを使ってなんとか交流できるようにしたいです。
・大切なのは、相手を思いやる心や相手の文化を理解する心だと思いました。共通点や違う点をみつけるなどして、受け入れることも大事だと分かりました。これから、積極的に外国について知っていきたいです。
・他国の人と理解し合うためには、英語で話しかけたり、ジェスチャーや絵を描いたりすることによって、会話ができると思った。日本に来る人たちには、様々な文化をもつ人たちがいるから、その人たちの文化も受け入れたいと思った。
・私は外国の人とあまり関わったことがないので、日本人の偏見と私が思う偏見は、少し違うように感じた。それでも、やっぱり関わっていくことが一番大事だと思った。
・見た目で判断するという偏見をなくす心が大事であり、そこをふまえて助け合うことが大切。もし困っている人がいたら、日本人でも海外から来た人でもすすんで助けられるようにしたい。

【授業実践をした上での感想・ふり返り】

一貫してポジティブに異文化と出会うことを心がけた。また、生徒自身が貢献できることを考えたり、実践できたりする場面を設けるよう工夫した。ほとんどの講演会では、生徒が受け身で学び、新しい知識を知っていくことが多い。特に大規模校では体験や実践が難しいので、敢えて生徒が来校者に「英語で日本の中学校を紹介する」というような活動を取り入れた。普段の中学校生活が聞く人によっては「学び」や「発見」になることを生徒が知ることで、日常が特別なことである感覚が生まれたようである。

中学生のとっての「アフリカ」は貧しい国というイメージが大きい。しかし、それが一面に過ぎなかったり、想像している貧しさとは次元が違うことを知ったりするのは、大変貴重なことであると考える。

大きく考え、小さく行動する

はじめに

「格差」という言葉をよく耳にする昨今、それでも私たちは「豊かさ」を追い求める資本主義経済を中心に生活を送っている。しかし、その「豊かさ」を追求すればするほど格差も広がり、不平等や不公平な状況が生まれている。そのような現代社会において、見方・考え方を広げ、自分自身で考え行動を起こせる子どもたちを育んでいきたい、また教師自身にもそのような手法を身に付ける必要があるのではないかと考えていたところ、教師海外研修の存在を知り、知見を広げたいと思い立ち参加を希望した。事前・海外・事後それぞれの研修を踏まえ、「地球規模で考え、地域社会に貢献する（大きく考え、小さく行動する）人」をめざす姿として、「自分事化すること」及び「認知する術を身に付けること」を目標に、教材を考えることにした。開発教育の利点として、答えのない問いを扱えることが挙げられる。また、世界を知り、自分の生活や社会に置き換えて考えることで、未来へのタネを撒くことや次世代へのバトンにもつながると考えられる。

これらの学習活動により、複雑で多様化する社会を生き抜く気付きへの一助にしたい。そして、自分自身の置かれている状況や住んでいる場所を軸に、視野を広げて世界を見ることを通して、日々の生活をよりよくし、豊かな人生を歩むきっかけになることを願っている。

この教材の使い方・参加のルール

この教材は、中学校１年生から３年生を対象とし、各学校現場での総合的な学習の時間の導入として活用してもらえることが望ましい。これは本教材が、見方・考え方を広げたり話し合いの場に慣れたりした状態の子どもの育成をねらいとしているからだ。アクティビティでは、「仲間づくり・仲間外れ」を体感できるものと同時に、他者の考えを参考に話し合いながら合意形成を図るものを含めている。普段何気なく行っている判断や選択が、「思い込みや勘違い」であったり「他者依存」であったりするかを感じられるものとしている。

同時に、参加型学習におけるファシリテーター（教師）の意識として重要なことが「話し過ぎない・出しゃばらない」ことだと言われている。誘導されている、教授されていると子どもたちが感じると、発言の量や本音が減ることにつながりやすいからだ。授業者の意図があったとしても話し過ぎず、子どもたちの姿から教師も学ぶという意識を大切にして実践につなげてほしい。

全体のねらい

事実や現実を知るためには、見方・考え方を広げたり、データを活用したりすることが必要だと知る。そうすることで、世の中を分断的に捉えず、それぞれの「良さ」や「課題」に気付きやすくなる。実社会では、「好き・嫌い」や「できる・できない」などと分断的かつ主観的な判断に他者を巻き込むことも多々あり、裏を返せば巻き込まれることもよく起こっているのではないか。そんな状況を好転させていくためにも、まずは現状を把握・整理し、自分と相手（人や国、地域など）の内なる思いや願いを深掘りして考える手法を、子どもたちと一緒に学び探っていきたい。そして、いかに「よりよく生き、豊かな人生を送るか」という実生活につなげることもねらいとしている。

ワークショップ1　「見方・考え方を広げよう」

●概　要

「見方・考え方を広げるとは？」と考え、気付くことをねらいとしたアクティビティ１～４を展開する。あわせて、「メタ認知能力」についても触れ、まずは自分自身のことを客観的に見ることの重要性に学習者が気付くようにする。

●ねらい

本ワークショップは、４つのアクティビティから構成されている。それぞれのアクティビティにねらいがあるため、授業の内容や目的に応じて個々に実施しても良い。

今回は４つのアクティビティを続けて展開することで、「人は見たいものだけを見る、見たくないものは見ない」「思い込みで勝手に（ルールなどを）決める」という人間の性質に気付き、自ら意識して物事を見聞したり広く考えたりすることが重要だということに気付けるようにしたい。

・「これまでとはちがう新しい視点で、型にはまらない考え方をする」経験を積む。「箱」の外へ大きくはみ出して、視野を広げてみることに気付く。
・選択的注意（重要だと認識された情報のみを選択し、それに注意を向けること）を体感し、「人は見たいものだけを見る」性質に気付く。主観と客観を交え、意識的に注意を向けることの重要性を知る。
・言葉を使って全員が仲間を見つけることを通じて、関わり合って協力することを体験する。
・言葉を使わずに仲間を見つけるアクティビティを通じて、「仲間」という枠組みの決め方（ルール）を無意識のうちに勝手に決めたのは自分（自分たち）であることに気付く。

尚、いずれのアクティビティでも極力「ルール」という言葉を使わないように留意する。特にアクティビティ４は、学習者が「ルール」を無意識のうちに勝手に作ってしまうという体験につなげるため、ファシリテーター（教師）は「ルール」という単語を絶対に口にしないよう留意することが肝要である。

●主な対象

中学校１～３年生

●用意するもの

・投影用パワーポイント（P104～106）
・「Nine Dots Puzzle」シート（P100）：全員分
・動画「Selective Attention Test from Simons & Chabris（1999)」：YouTube等で検索、視聴できるようにしておく
・「足して100」シート（P101～102）：全員分
・シール（おでこに貼れる程度の大きさのもの）：全員分（１人１枚貼付できる数）
　例）学習者が20名であれば、赤：６つ、青：６つ、黄色：７つ、左記以外のシール（キャラクターなど）：１つ
・ふり返りシート①：全員分

●所要時間

50分～（アクティビティ40分、ふり返り10分）

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
○アクティビティ「Nine Dots Puzzle」 1．「Nine Dots Puzzle」シートを全員に１枚ずつ配布する。最初に個人作業として、シート上にある９つの点をすべてつなげる。 （つなげる際の注意点） ※同じ点を２回以上なぞらないこと ※４本以下の直線でつなげること	予め４～６人程度のグループに分けておく。 パワーポイント３枚目で説明する。
2．グループで各自の考えた方法を共有する。	
3．全体で各グループで出た考えを共有する。	ファシリテーターは「これだけ？他には？」と更に問いかけ、多様な意見が出るよう促す。
4．「見方・考え方を広げると…」と問い、パワーポイント４～13枚目を使用して解説する。	
○アクティビティ「Selective Attention Test」 1．「白い服を着た人たちのパスの回数を数えてください」と指示を出す。	パワーポイント14～26枚目を使用する。
2．「Selective Attention Test Selective Attention Test from Simons & Chabris (1999)」の動画を全員で視聴する。	
3．「何か画面に見えなかった？」と問いかけ、再度動画を視聴する。	
4．グループまたは全体で感想を共有する。	人は「意識しているものだけしか見えない」傾向にあること、逆に「意識し過ぎて、本来の目的（例：回数を数える）を忘れてはいけない」ことなども解説する。
○アクティビティ「足して100」※ 1．「足して100になるグループを３人で作ってください」 一人につき１枚ずつカードを配布する。カードに書いてある数字を足して３人で100になるようにグループを形成する。 ※話してよい ※数字を相手に教えてはいけない →「ここととここが同じ」などの発言はOK →「ここより30低い」などのヒントは禁止	「足して100」シートは予め切り離しておく。 パワーポイント27～34枚目を使用する。 可能なら、全体で円になって始める。 発言に関するルールは学習者の実情に応じて変更しても良い。

2．３人で100になるグループが出来たら着席する。	カードの組合せ上、通常は何度かグループを再編しなければ完成しない。
3．感想を共有する。 「どうやってグループをつくったか」「どのような発言をしてメンバーを探したか」「そのグループは最初から完成したか、途中で何度か変わってできたグループか」などを問いかける。	「アクティビティ『おでこシール』」を続けて行う場合は、そこにつながるような問いかけができると良い。
○アクティビティ「おでこシール」 1．全員目をつぶらせ、ファシリテーターが各自のおでこにシールを貼っていく。１名だけ異なるシールを貼る。	パワーポイント35～40枚目を使用する。 可能なら、全体で円になって始める。 学習者が合図まで目を閉じておくよう徹底する。 おでこを出すことに抵抗がある場合は背中に貼るなど、柔軟に対応する。
2．シールを貼り終えたら、学習者に目を開けてよいと合図を出し、「仲間を見つけてください」と指示を出す。（勝手にグルーピングをして座り始める） ※一切、話してはいけない。 ※仲間を見つけた人は座る。	異なるシールを貼られた１名が「仲間外れ」となる状況になる。
3．グループに入れなかった１名には仲間に入れなかった感想を、他の学習者には「なぜ、このような仲間（グループ）をつくった？」かを問いかける。また「ルールとはだれが勝手につくったのか」を考える。	
4．まとめ	パワーポイント41～48枚目を使用する。
ふり返り ふり返りシート①を全員に配付する。	

※「足して100」はアクティビティ「お願い協力して」を参考に作成。（出典：グラハム・パイク、ディビット・セルビー共著、中川喜代子監修、阿久澤麻里子訳、『地球市民を育む学習 Global Teacher、Global Learner』明石書店、1997年）

●用語の解説

・認知能力

知能のことを指し、各種能力（言語・論理・数学的能力等）を数値で表すことのできる能力

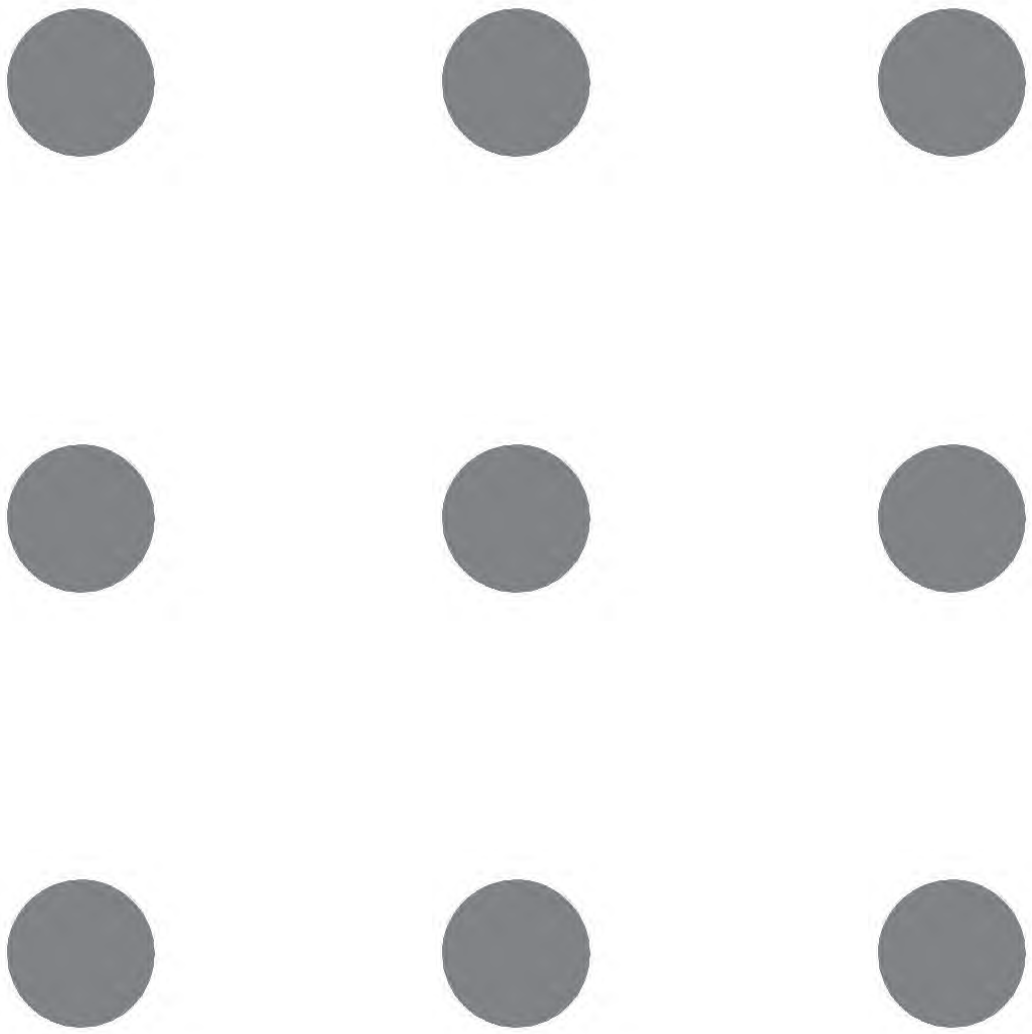
・非認知能力。

人間の特性やスキルのことを指し、情緒的な面や社会的（自己管理・協調性・目標設定等）な能力。

・メタ認知能力

自分自身を客観的に捉えて、自覚（自己評価）し、理解できる能力。

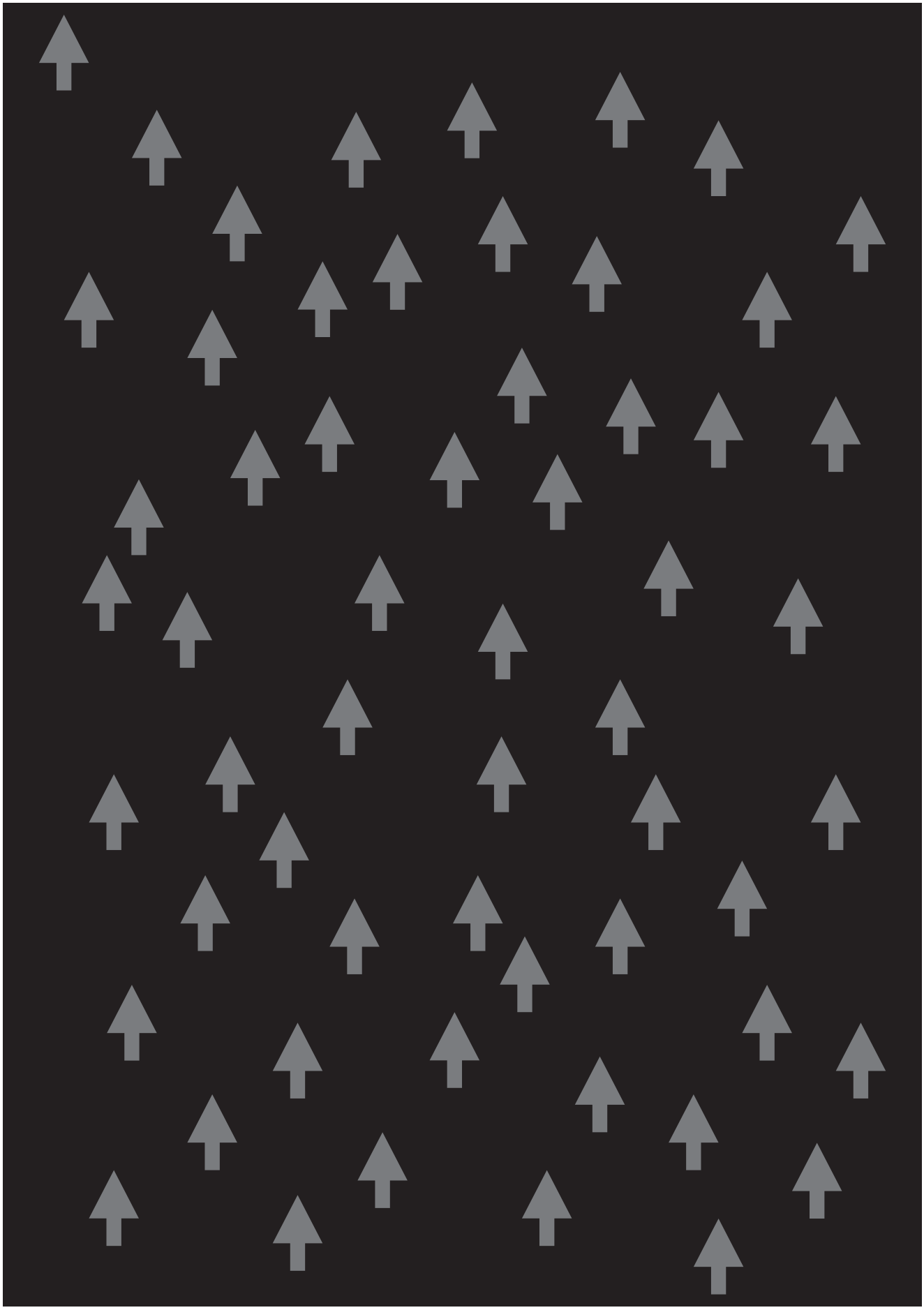
Nine Dots Puzzle



足して **100**

・次頁を裏面に印刷することで，数字が透けない
・裏面の「　↑　」を上向きにして，おでこ前に持つことで，数字の向きの指示が不要になる

1	2	3	4	5
80	50	90	60	40
10	25	5	20	30
10	25	5	20	30
6	7	8	9	10
70	60	55	80	75
15	30	5	5	20
15	10	45	15	5



ふり返りシート①

年　　組　　番

氏名（　　）

○　以下の１～４の活動それぞれにおいて，気付いたことや感じたこと，心に残ったことなどを書きましょう。

１．Nine Dots Puzzle

２．Selective Attention Test：パスの回数を数えよう

３．足して100

４．おでこシール

○　全体を通して，新しい発見や今後に生かしたいこと，もっと学んでみたいことなどを書きましょう。

パワーポイント（見本）

Empowerment
開発教育・国際理解教育

Kazutaka Higuchi　2023.12.4

#1

Nine Dots Puzzle

#1 Nine Dots Puzzle

９つの点を，一筆書きで
すべての点をつなぐ。

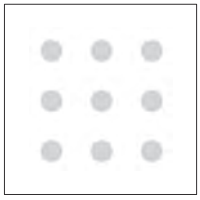
※　直線のみ，曲線はダメ
※　同じ点を２回以上なぞらない
※　４本以下の直線を使う

#1 Nine Dots Puzzle

見方・考え方を
広げると…

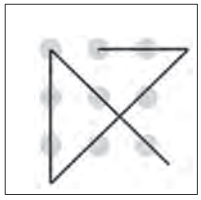
#1 Nine Dots Puzzle

見方・考え方を
広げると…



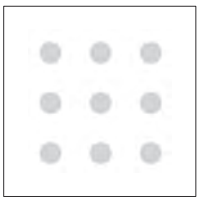
#1 Nine Dots Puzzle

見方・考え方を
広げると…



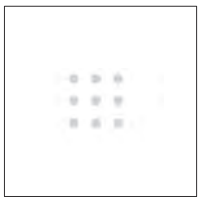
#1 Nine Dots Puzzle

見方・考え方を
広げると…



#1 Nine Dots Puzzle

見方・考え方を
広げると…

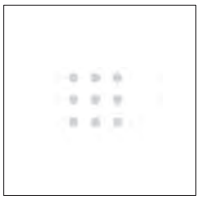


#1 Nine Dots Puzzle

見方・考え方を
広げると…

#1 Nine Dots Puzzle

見方・考え方を
広げると…



#1 Nine Dots Puzzle

見方・考え方を
広げると…

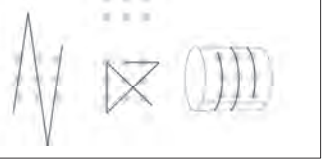
#1 Nine Dots Puzzle

見方・考え方を
広げると…

#1 Nine Dots Puzzle

見方・考え方を
広げるとは？

多様性とは？



出典：冒険の書　AI時代のアンラーニング

#2

パスの回数を数えよう

#2 Selective Attention Test

白い服を着た人たちが

バスケットボールを
何回パスしたのか

その回数を数えてください。

#2 Selective Attention Test

パスは何回？

いやいや、
それもだけど…あの中に…

もう一度、見てみよう。

#2 Selective Attention Test

人は見たいものだけを見る。
↔　見たくないものは見ない。

▷　意識できるものを見る。
　　見る力　＝　認知能力

#2

パスの回数を数えよう Part 2

#2 Selective Attention Test Part 2

白い服を着た人たちが

バスケットボールを
何回パスしたのか

その回数を数えてください。

#2 Selective Attention Test Part 2

何回パスが行われたか？

ゴリラは見えた？

…あれ？　…それだけ？？

もう一度、見てみよう。

#2 Selective Attention Test Part 2

ゴリラを待ち構えた？
他の変化にも気付けた？
そもそも，パスは数えた？

自分が見る力（認知能力）には
限界があり，いい加減なもの

#2 Selective Attention Test Part 2

見たいものに注意をもっていかれ
それ以外には散漫になってしまう

どうすれば見ることができる？
見方・考え方を広げるとは？

#3

足して100

#3 足して100

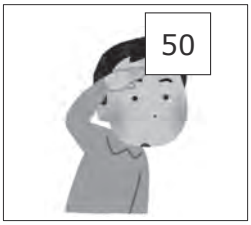
足して100になるグループを
つくってください

#3 足して100

足して100になるグループをつくってください

① 1人につきカード1枚
② 3人で足して100
③ カードをおでこに付ける

#3 足して100



#3 足して100

足して100になるグループをつくってください

※ 話してよい
※ 自分の数字を見ない
※ 相手の数字を教えない
※ 3人で100になったら座る

#3 足して100

カードを配ります
数字を見ないで！

#3 足して100

足して100になるグループをつくってください

※ 話してよい
※ 自分の数字を見ない
※ 相手の数字を教えない
※ 3人で100になったら座る

#3 足して100

Q 発言したか？

Q はじめから同じグループ？
それとも，入れ替わった？

Q どんな基準でグループを
つくってみようとした？

#4

おでこシール

#4 おでこシール

・ 仲間を見つけよう

・ 見つけたら，座ろう

※ 一切，話してはいけない

#4 おでこシール

どんな気持ち？

周りの人は，どんな気持ち？

#4 おでこシール

なぜ "仲間" になった？

なぜ "仲間外れ" が生まれた？

#4 おでこシール

だれがルールをつくった？

#3 足して100　#4 おでこシール

伝える，伝えてもらう

自分が気付く，気付いてもらう

ひとりでつくる？
それとも，みんなでつくる？

#5 まとめ

できた？　できなかった？

何かに気付いた？

自分自身で何かに気付いた？

#5 まとめ

主観的に見る ▷ 認知

客観的に見る ▷ メタ認知

#5 まとめ

自分を客観視

出典：ベネッセ教育情報

#5 まとめ

自分の思考や感情を
把握し言語化する力

どうして自分は今怒っているのだろう？
なぜうまくいかないんだろう？原因は？

出典：ベネッセ教育情報

#5 まとめ

見たいものに注意をもっていかれ
それ以外には散漫になってしまう

メタ認知できている状態を保ち
自分自身を客観視することが大切

#5 まとめ

自分が認知する（知る）ことを
客観的に判断し，言語化する力

▷ メタ認知能力

#5 まとめ

▷　メタ認知能力

自分が認知する（知る）ことを
客観的に判断し，言語化する力

#5 まとめ

#1　Nine Dots Puzzle

#2　パスの回数を数えよう

#3　足して100

#4　おでこシール

ワークショップ2　「豊かさとは？」

※本ワークショップは「特定非営利活動法人 開発教育協会（DEAR)」作成・発刊の「豊かさと開発 Development for the Future」をもとに展開しています。基本的な進行手順、内容は同冊子をご確認ください。

●概　要

開発教育協会（DEAR）の教材をベースに、「自分が必要とする豊かさ」について具体的に書かれた24枚の条件カードから各自が上位９枚を選び、それらを順位付けしていく。さらに、小グループで共有・協議し、グループ内で上位３～５枚を選出して全体に発表する。その後、ファシリテーターは外国の現状や課題を紹介をする。さらにその国と日本のGAPMINDERを提示することで、事実（データ）を基に世界を見つめ、自分の思い込みや勘違いではなく、正しく客観的に物事を捉える手法を提示していく。

尚、本活動の前に事前アンケートを取り、用意する24枚の条件カードにアンケートへの回答内容を何点か含めることで、学習者が自分事化しやすくなる工夫を図りたい。

●ねらい

・「自分が必要とする豊かさ」の順位付けを行うことで「豊かさ」へのイメージを膨らませる。
・自分と他者の考えを共有することで、ちがいを知り、それぞれのちがいの良さを知る。
・世界を客観的に見る方法のひとつとしての「ファクトフルネス」に触れることで、分断的ではない思考を身に付けることに近づけたい。
・自身が考える豊かさと「外国の子どもたちが必要とする豊かさ」とのちがいが、ダイヤモンドランキングを通して明確に表れる場合もある。その違いは何に起因するものなのかを考えることで、自分の思い込みに学習者が気付くことを促したい。
・GAPMINDERを活用してデータを提示することで、思い込みと指標の差異にも気付かせたい。そのギャップはなぜ生じているのか、疑問を持ち、考える時間を設ける。

上記を通して、「自分と他者の考え方・捉え方のちがい」を知るとともに、「他者の意見を聞き、自分の考えに変化が起きる」という体験を積み、話し合いの魅力や必要性を学習者がより一層感じる時間にしたい。

●主な対象

中学校１～３年生

●用意するもの

・パワーポイント（P110～112）
・事前アンケート（P113）：全員分　※本ワークショップの前に実施、回収しておく。
・条件シート（個人作業用・Ａ４印刷）（P114）：全員分
　※事前アンケートの内容を反映した条件を作成する。
・条件カード（グループ用・Ａ３印刷）（同上）：グループ数分×２セット
　※予め24枚に切り離してセットにしておく
・ダイヤモンドランキング台紙（P115）：グループ数分×２枚
・ふり返りシート②：全員分

・紹介したい他国の写真や情報　※本教材においては、LEVEL ２以上の国が望ましい

●所要時間

50分～（アクティビティ40分、ふり返り10分）

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1．自分にとっての「豊かさ」とはなにかを考える。（個人活動） 24枚の条件が書かれたシートから「自分が必要とする豊かさ」９枚を選び、順位付けをする。	予め小グループになっておく。
2．グループ内で各自の意見を発表する。	上位１～５位を説明するが、時間によっては１～３位の紹介に留めるよう指示する。
3．条件カード１セット（24枚）とダイヤモンドランキング台紙１枚をグループに配り、各自の意見を参考にしながらグループで「豊かさ」を考える。上位９枚を選び、その中で順位付けをして台紙にのりで貼り付けていく。	最初に話し合いにおける約束事、マナー等を説明し、話し合い活動の素地をつくっておくと良い。 ・多数決にせず、個人の意見を尊重する。 ・相手の話をよく聞く。 ・相手の話を否定しない。　など
4．グループで出た意見を全体で発表する。	
5．「ファクトフルネス」の考え方、定義を解説する。 ・写真を用いて、ファシリテーター（教師）や学習者に馴染みのある国について紹介する。 ・「GAPMINDER」を使用し、開発途上国と先進国といった２項軸の分断的な分け方ではなく、一日当たりの所得毎に４つのレベルで捉えるという視点を提示する。 ・４つの所得レベル毎の暮らしを写真とともに提示し、取り上げた国の現状や課題を補足する。	パワーポイントを参考に進める。 取り上げる国は、ファシリテーター自身が経験や関心のある地域、他の教科で扱ったことがあり学習者が関心や情報を持っている国を選ぶことが望ましい。 「この国はLEVEL１～４のどこだろう？日本は？」と問い、事実をここでは提示しない。
6．条件カードとダイヤモンドランキング台紙を各グループにもう１セットずつ配布する。	
7．グループで「取り上げた国の子どもたちが必要とする豊かさ」を９枚選び、９枚の中で順位付けをする。	１．で考えた「自分にとっての豊かさ」、３．で考えた「グループにとっての豊かさ」との対比が可視化できるようにしておく。

8．全体で発表する。	結果だけでなく「なぜ、これらの項目を選んだのか」という理由を発表するよう促す。
9．日本と取り上げた国のファクトフルネスを紹介し、経済状況と課題、国内の状況について考える。 →日本はLEVEL 4 →ナミビア（例）はLEVEL 3 例）「ナミビア（●●国）はLEVEL 3 で経済は比較的安定しているのに、なぜこのような課題が起きているのだろう？」「このような事態・状況は日本でも起きているのだろうか？」	ワークショップ 1 を実施している場合、「『人は見たくないものは見ない』ことを学んだ。では、それを意識することで見えてくるものが広がるのではないか」と問いかけ、自身の考え、認知についてふり返る。
ふり返り ふり返りシート②を全員に配付する。	

●用語の解説、資料

・「FACTFULNESS」（ファクトフルネス）

　スウェーデンの医師であり統計学者であるハンス・ロスリング氏による「データや事実にもとづき、世界を読み解く習慣」という提言。出典は本章の参考文献・引用資料を参照。

・「GAPMINDER」（ギャップマインダー）

　上記を提言したハンス氏等が携わる、スウェーデン・ストックホルムに拠点を置くギャップマインダー財団が開発した指標。

パワーポイント（見本）

Empowerment
開発教育・国際理解教育

Kazutaka Higuchi　2023.12.4

豊かな社会

どんなイメージ？
豊かになりたい？
豊かになるとは？

「豊かな社会」にとって大切なこと
～ 参加型ワークショップ ～

豊かな社会とは　個人作業

① 自分にとって”豊かである”とは？
▷「豊かな社会にとって大切なこと」について，異なる説明が記載

②「自分にとって”豊かである”とはどのような状態か」を9枚選出

豊かな社会とは　個人作業

②「自分にとって”豊かである”とはどのような状態か」を9枚選出

・ダイヤモンドランキング

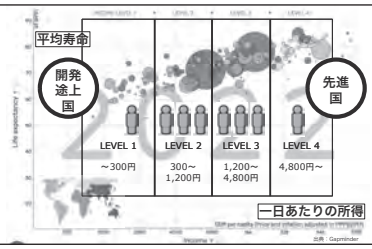
③グループで理由を含めて説明，共有

豊かな社会

どんなイメージ？
生活がよりよくなるとは？
社会が豊かになるとは？

豊かな社会

どんなイメージ？
生活がよりよくなるとは？
社会が豊かになるとは？



豊かな社会とは　4つの所得レベルごとの暮らし

4つの所得レベルごとの暮らし

豊かな社会とは　4つの所得レベルごとの暮らし

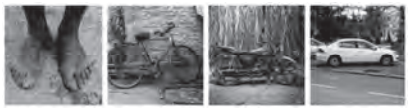
水の調達

Level 1　Level 2　Level 3　Level 4

出典：FACTFULNESS

豊かな社会とは　4つの所得レベルごとの暮らし

移動手段



Level 1　Level 2　Level 3　Level 4

出典：FACTFULNESS

豊かな社会とは　4つの所得レベルごとの暮らし

調理方法

Level 1　Level 2　Level 3　Level 4

出典：FACTFULNESS

豊かな社会とは　4つの所得レベルごとの暮らし

料理・食事

Level 1　Level 2　Level 3　Level 4

出典：FACTFULNESS

豊かな社会とは　4つの所得レベルごとの暮らし

Level 何？

豊かな社会とは　4つの所得レベルごとの暮らし

ベッド・寝床

Level 1　Level 2　Level 3　Level 4

出典：FACTFULNESS

豊かな社会とは　　グループワーク

済　自分にとって”豊かである”とは？

②　開発途上国（例：ナミビア）の子どもにとって”豊かである”とは？

▷　グループでダイヤモンドランキング

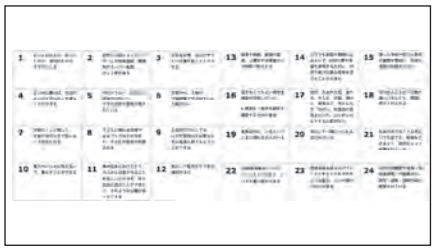
Q　「自分にとって」とのちがいは？

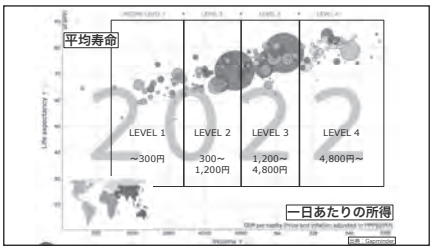
豊かな社会とは　　グループワーク

②　開発途上国（例：ナミビア）の子どもにとって”豊かである”とは？

▷　理由を含めて，上位3つを発表

Q　自分にとってとのちがいは？

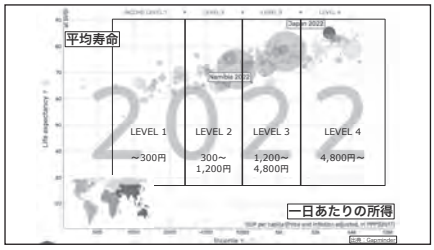




豊かな社会とは　　グループワーク

日本とナミビア

それぞれの Level は？



豊かな社会とは　　グループワーク

国自体は Level 3

なぜ，こんなことが起きる？

なぜ，こんな格差が生まれる？

まとめ

人は見たいものだけを見る。

↔　見たくないものは見ない。

▷　意識できるものを見る。

まとめ

見たいものに注意をもっていかれ
それ以外には散漫になってしまう

メタ認知できている状態を保ち
自分・社会を客観視する

まとめ

なぜ ”仲間” になった？

なぜ ”仲間外れ” になった？

だれがルールをつくった？

まとめ

#1　自分にとって豊かであるとは？

#2　開発途上国にとって豊かであるとは？

#3　今日の気づき・考えたこと

+α　「日本」が豊かになるためには？

事前アンケート

氏名（　　）

1. あなたが今ほしいものは何ですか？　※複数可

2. それ（それら）が、なぜ必要なのですか？　※複数可

3. あなたの住む街に、今ほしいものはありますか？　※複数可

4. それ（それら）がなぜ必要なのですか？　※複数可

条件シート・カード（個人作業・グループ活動用）

※「豊かさと開発」（特定非営利活動法人　開発教育協会　発行）を参考に、生徒への事前アンケートの回答も反映させて作成。
学習者の状況にあわせて内容を変更、考慮すること。

Empowerment

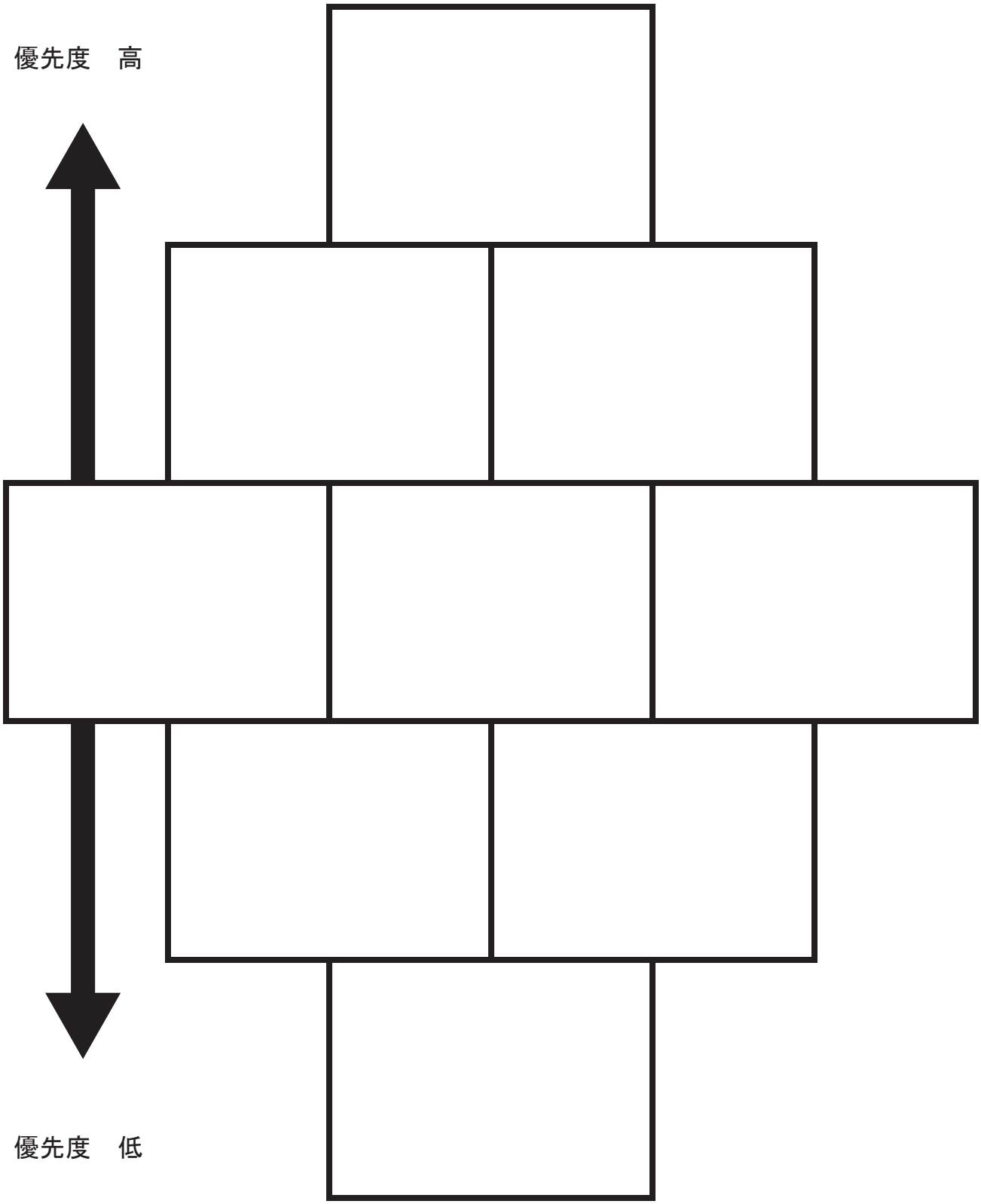
1	おしゃれなもの、おいしいもの、便利なものがすぐ手に入る	2	近所に大型ショッピングモールや娯楽施設（遊園地やスーパー銭湯）、カフェ等がある	3	好きな仕事、自分がやりたい仕事に就くことができる
4	まじめに働けば、生活するには十分な収入を得ることができる	5	今だけでなく、自分たち将来の世代にも、十分な自然や資源が残されている	6	空気や水、土地が汚染物質で汚されている心配がない
7	学校のことに関して、生徒が自分たちで話し合って決められる	8	子どもに関わる法律やまちづくりなどの決定に、子どもの意見が反映される	9	お金が足りなくても、けがや病気など必要なときに医者に診てもらうことができる
10	暴力やいじめに怯えないで、暮らすことができる	11	車の往来におびえたり、大人から注意されることを気にしたりせず、外で自由に遊ぶことができたり、そのような公園があったりする	12	安心して寝泊まりできる場所がある
13	給食や制服、勉強の道具、上履きや体操着などが無料で配られる	14	だれでも家庭の事情に左右されず、自分の夢や希望を実現するために、学校や家で必要な教育を受けることができる	15	通った学校や受けた教育の種類を理由に、将来の進路が制限されない
16	返さなくてもよい奨学金制度が充実している ※ 奨学金：研究や就学を援助するための資金	17	性別、生まれた国、見た目、考え方、行動、障がい、病気など、何かしらの「ちがい」を理由に差別されたり、いじめられたりする心配がない	18	自分が人とちがう行動や暮らしをしても、周囲に受け入れられる
19	家族以外に、いざというときに頼れる大人がいる	20	安心して一緒にいられる友だちがいる	21	お金が足りなくても安心して生活でき、勉強もできるよう、政府によって保障されている
22	24 時間営業のコンビニエンスストアがあり、いつでも買い物ができる	23	地域全体を盛り上げていこうとする人たちやそのような動き、人との関わり合いがある	24	公共交通機関や道路（高速道路等）が整備され、通学・通勤・通院手段が確保されている

ダイヤモンドランキング台紙

ダイヤモンドランキング

氏名（　　）

※　24 枚の中から 9 枚選び、優先度の高いものを上にして 9 つの枠を埋めていく



ふり返りシート②

氏名（　　）

○　以下の項目において，気付いたことや感じたこと，心に残ったことなどを書きましょう。

1．「自分にとって」豊かであるとは

2．「開発途上国にとって」豊かであるとは

3．全体を通して，新しい発見や今後に生かしたいこと，もっと学んでみたいことなどを書きましょう。

4．「日本が豊かになるためには」どのようなことを考える必要があるか，あなたの考えを書いてみましょう。

コラム

現地（ナミビア）では、JICA海外協力隊が活動する小学校２校を訪問した。驚きは多数あり、在校生徒数1,000名を超える学校では、校舎の数が足りず午前午後の２部制で生徒が登校し学習をすすめていること、貧困改善に向けて算数に力を入れるために国を超えた協力を要請していることなど、実際にこの目で見て、現地の人と対話をすることで知り得る情報があった。子どもたちとも交流できる時間があり、イラスト付きで将来の夢を紹介してもらった。そして、そのために今一番がんばっていることは勉強（特に算数）であり、家族のためにがんばりたいと語ってくれた。悲観的に見てはいなくとも、思い込みでフィルターをかけてしまう自分がいたのではないか、物珍しく見てはいなかったかなどと考えを巡らせてしまう。ナミビアの未来を明るく語る子どもと教師たちの姿を通して、教育が担う力（責任）の大きさを感じる時間となった。

また、教師海外研修を経て本教材を作成するにあたり、悩みの種のひとつが「ナミビアに行っていない人でも使ってみたくなる教材」をつくることであった。同時に別の視点で、「学習者の顔が上がる教材」の有用性は周知の事実である。上記二点を踏まえ、教師海外研修事後研修における過年度参加者の講話の中で「スライド（内の写真等）を、授業者が自由に差し替えて成り立つ状態のものをつくる」とあった。例えば、国際理解・開発教育に関心をもち、生の声を届けようとしても、働きながら多様な経験を積むことは容易ではない。そのような状況下でも、使ってみたいかつアレンジ可能な教材になることを願って、教材づくりに励んだ。教師海外研修では海外渡航中に焦点を当てられることが多いが、地域外や幅広い世代の教師との交流及び魅力的な事前事後研修があり、長期に渡って学びの深い時間となった。

おわりに

視覚に入っていたとしても、意識が向いていなかったり本能的に見たくないと思っていたりすることで、認知できない場面は少なくない。また、社会が多様化する中で、広い視点をもち、自分の考えや立場を明確にして考えをもつことは、これから先さらに重要になってくると感じている。授業者でありながらも、生徒たち（及び参加教職員）からの発言やふり返りからこちらにも多くの学びが得られる開発教育（国際理解教育）の魅力は大きいものである。

最後に、「大きく考え、小さく行動する」ことは、共生社会において重要な視点であり、今いる自分の場所において何ができるか、これから何をしていきたいか、そのために何を学ぶ必要があるのかを生徒とともに探っていきたい。そして、国際理解・国際交流を通して、地球市民としてモラル・マナー・エチケットについても考えを深められる学習活動（体験活動）を、今後も考え実践していきたい。

参考文献・引用資料

・「市民・政府・NGO―「力の剥奪」からエンパワーメントへ」ジョン フリードマン（著）、John Friedmann（原名）／定松栄一、西田良子、林俊行（訳）、新評論、1995年
・「豊かさと開発　Development for the Future」特定非営利活動法人 開発教育協会、2016年
・「FACTFULNESS（ファクトフルネス）10の思い込みを乗り越え、データを基に世界を正しく見る習慣」ハンス・ロスリング、オーラ・ロスリング、アンナ・ロスリング・ロンランド（著）／上杉周作、関美和（翻訳）、日経BP、2019年
・「冒険の書　AI時代のアンラーニング」孫泰蔵 著、日経BP、2023年
・ウェブサイト「GAPMINDER」https://www.gapminder.org/
・動画配信サイト「YouTube」より「Selective Attention Test from Simons & Chabris（1999）」
・『子供たちの未来を育む豊かな体験活動の充実』、文部科学白書、2016年
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201701/1389013_007.pdf
・「『多様な社会』を考える学びのプログラム集 2020」JICA中国
https://www.jica.go.jp/Resource/chugoku/enterprise/kaihatsu/sougo/ku57pq000007m5wk-att/diverse_society.pdf

実践事例報告

プログラム作成・実践者　樋口　一貴　　学 校 名　山口県萩市立須佐中学校

担当教科　英語

実践教科　総合的な学習の時間

【授業の概要】

⑴ 単元のテーマ

大きく考え、小さく行動する

⑵ 単元のねらい

認知についての理解を深め、世界を客観的に見る手法を探る。

⑶ 授業の概要

アクティビティを通して、認知に関する人間の性質に気付き、意識することで世界の見方が変わる・分かる手法を学ぶ。

⑷ 指導上の留意点

大きく考えて終わりにせず、いかに小さな行動に移すかを意識して授業を展開する。「知ることから始まる意識」をもって、世界は広いが、日本ともつながっていることを生徒が気付くようにすすめていく。

⑸ 児童生徒の感想や学び・気づき

［生　徒］

・自分たちが思い込みでルールを勝手につくっていることに驚いた。
・世界を知ることと同時に、日本のことをもっと学びたいと思った。
・主観と客観のちがいを意識し、日々の生活に生かしていきたい。

［教　師］

・生徒の考えを聞き、自分たち（大人）にはない考え方があり、新たな発見と多様な意見に耳を傾ける機会になった。
・生徒も大人も、今この瞬間には見方が広がったと感じるとともに、それを持続する（持続させる）取組や活動が必要だと感じた。

グループ協議をすすめる様子

教職員グループの協議の様子

【授業実践をした上での感想・ふり返り】

「楽しいゲーム（アクティビティ）をみんなでやっていくよ！」などと始めたことで、子どもたちが緊張感なく取り組み始め、楽しむことで話し合いが盛り上がりながら活動できた。一方で、一見バラバラな各活動に見えるが、ねらいとしている「人は見たいものだけを見る」や、特に「だれがルールをつくった？」と問うたときは、ほとんどの生徒が声を発さずに自問自答する様子が見て取れた。

ワークショップ１は１時間の授業内に４つのアクティビティをテンポよく展開することで、次時のワークショップ２にうまくつなげられたと感じた。可能であれば２時間続きで実践することが望ましい。ワークショップ２では、社会（本時ではナミビア）に対するイメージへの「思い込み」による「勝手な決めつけ」を生徒たちが体感できたようだった。実体験や情報を基にした判断や客観的なものの見方の必要性を生徒が学んでいる手ごたえを感じる一方で、「豊かさ」についての考えを深める時間配分の設定に課題が残った。

本時では、教職員４名も加わり、生徒にとっても新鮮な時間を送ることができた。幅広い年齢層での実践をすることで、生徒にとってより刺激的なものになったと思う。

本時を展開する中で、授業者が注意すべきは、「話し過ぎず、間を持たせ、考える時間を提供することにある」と感じた。これは、教師海外研修の事前研修における講師のファシリテーションから学ぶことができた実践方法である。大人であってもドキッとするような瞬間があり、自分を客観視できていないことに気付ける時間にもなった。

多様性を尊重し、課題解決を図る主体性を育む

はじめに

教師海外研修に参加させていただき、ナミビア共和国やそこで暮らす人々から多くのことを学んだ。多様な民族がいて、それぞれに独自の文化があることや、自分や相手のアイデンティティを認め尊重すること。人々の温かさ、豊かで壮大な自然、自然に対する人々の畏敬の念。日本と通ずることもあったが、日本では感じられないナミビアの素晴らしさや魅力を感じられた。一方で、失業率の高さや、産業構造の偏り、貧富の差などの課題もあり、それらには様々な背景が絡まり合っている現実を目の当たりにした。

自分にとっての「当たり前」が他者にとっての「当たり前」でないことを理解し、多様性を尊重する。そして、自分ごととして課題解決しようとする主体性を身につける。私は生徒に「誰にとっても生きやすい社会の担い手」になってもらいたいという思いから教材作成に至った。

この教材の使い方・参加のルール

この教材では、自分らしさを表現し、お互いの良さを見つけ合うアクティビティを行うことで、お互いを認め合うような寛容性を高める。その後ナミビアについて知り、特徴をつかみ、級友と課題解決的な学習を行う。３つのアクティビティがあるが、連続して使用することも、独立して使用することもできる。

アクティビティ1　「自分だけの靴下をデザインしよう！」

●概　要

自分だけの靴下をデザインし、靴下のイラストやポイントなどを伝え合う。また、ナミビアでの多文化共生の様子や取組みについて知る。

●ねらい

・色や柄などを工夫することで、自分らしさを表現する。
・多様な価値観や個性に触れ、お互いを認め合う態度を育てる。

●主な対象

小・中学生～

●用意するもの

・色鉛筆：一人１セット
・ワークシート①（P124～125）：全員分
・ふせん

●所要時間

50分

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1．ナミビアにおける慈善活動や多様性を認め合うための取組みについて知る。	ショッピングモールで見つけた「FUNKY SOCKS DAY」の取組みや、JICA海外協力隊員の配属先の小学校での「私服Day」などについて紹介する。
2．自分だけの靴下をデザインしよう！ ワークシートを配布する。各自ワークシートに靴下のデザインを描く。デザインのポイントや込めた思いも書く。	
3．お互いの作品を鑑賞し、素敵だと思ったところを伝え合おう。 それぞれのワークシートを共有し、素敵だと思った点をふせんに書き、相手のワークシートに貼る。	鑑賞の時間が仲の良い友人同士のみでの活動にならないよう、「同じ誕生月の人」「出席番号の１の位が同じ人」「血液型が同じ人・違う人」など、条件をつける。
ふり返り（発表） 活動を通しての感想を書き、発表する。	

●用語の解説、資料・解説

・「FUNKY SOCKS DAY」

Breadline Africa（1993年に南アフリカ共和国のケープタウンによって設立された非営利団体によって制定された。ステッカーを購入し、FUNKY SOCKS DAY（2023年は９月８日）にそのステッカーを貼り、独創的な靴下を履く（左右違う靴下も可）というアクション。首都ウィントフックのマエウラモール内のPNAという文房具店（南アフリカ共和国系列）にて実際にステッカーを購入した。ステッカー代は10ナミビアドル（日本円で約80円）。ステッカー代は学校のインフラ整備や設立等に役立てられるとのこと。類似の取組みとして、イギリスの「Odd Socks Day」というものがある。いじめ防止週間の期間中に左右違う柄や独特な柄の靴下を履き、違いを認め合う意識を高めるそうだ。

ステッカー（文房具店で購入）

文房具店に貼られていた
FUNKY SOCKS DAYのチラシ

コラム

教師海外研修で訪問したエロンゴ州カリビブのイーベンハーサー小学校では、森結香隊員が児童に算数を教えていた。森隊員との質疑応答の時間に、日本にはない学校行事の話になった。イーベンハーサー小学校では月１回か２か月に１回程度、私服登校日があり、児童たちは思い思いの私服を着て登校するそうだ。また、独立記念日の前日はお祭りがあり、民族ごとの衣装で登校したりダンスを踊ったりするそうだ。多様な民族が共存するナミビアだからこその、アイデンティティや個性を尊重するような活動を知ることができた。ふと、日本の学校の様子を思い浮かべた。ナミビアと日本とでは歴史的・社会的背景が異なるとはいえ、ナミビアの学校から学ぶべきことがあるのではないだろうか。

民族のダンス

ワークシート①

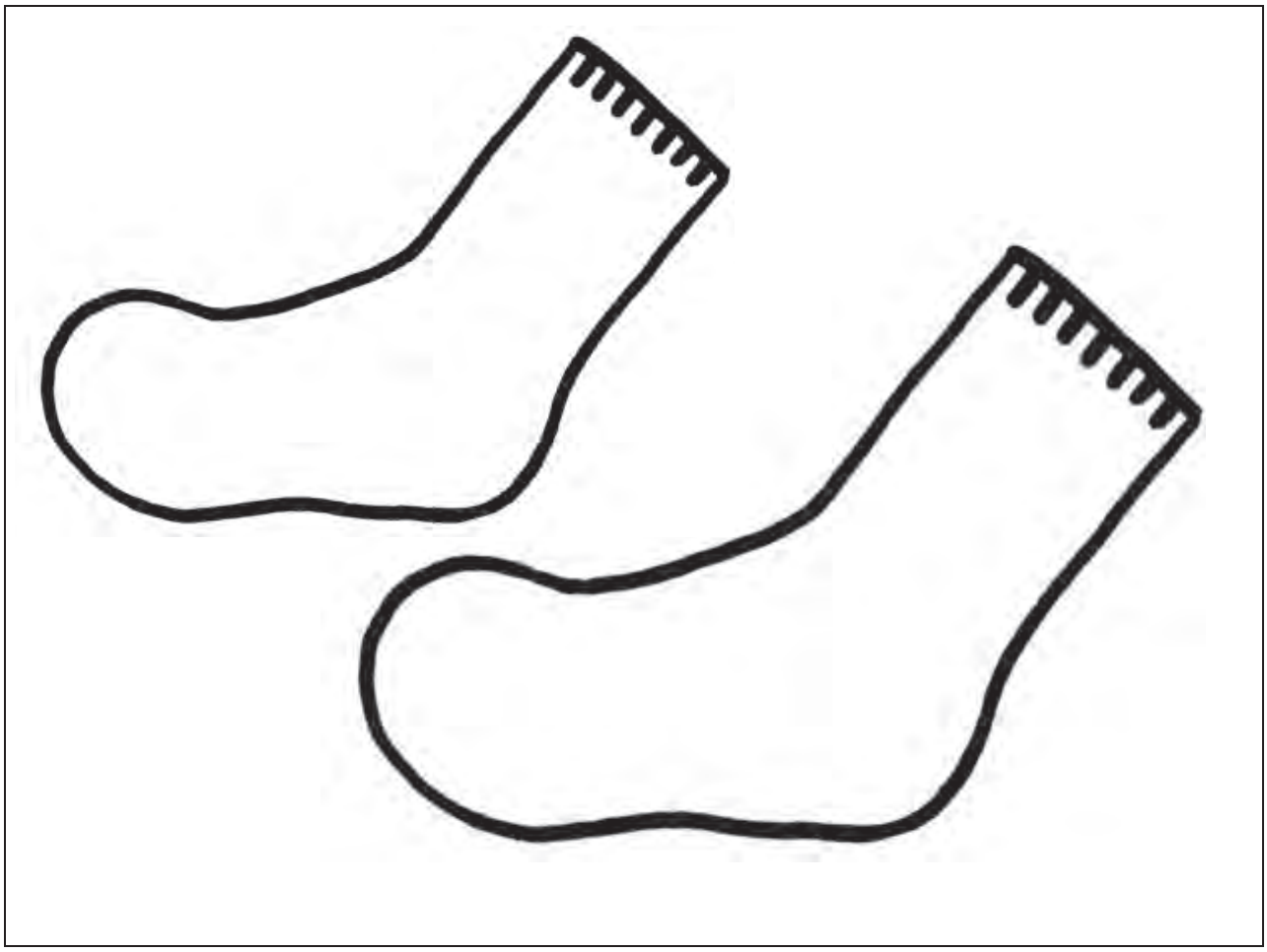
（両面印刷／表面）

自分だけの靴下をデザインしよう！

（　　）年（　　）組（　　）番　氏名（　　）

☆ 自分だけの靴下をデザインしてみよう！靴下ならデザインを完全に見せるファッションもできるし、人には見せず自分だけで楽しめるようなファッションもできますね。好きなものを入れてデザインしたり、個性的な形・色合いにしたり…。自由に描いてみよう。

【靴下のデザイン】



○　ポイント、靴下に込めた思いなど

（裏面）

○　クラスメイトより

※コメントを書いてもらったふせんをこのスペースに貼ろう。

○　デザインをしての感想

○　クラスメイトとの意見交換をしての感想

○　どのようなことを学びましたか。また、今日の学びをこれからどのようにいかしたいですか。

アクティビティ2　「ナミビアを知り、感じよう！」

●概　要
ナミビアについてのクイズや実物を通して、ナミビアを知り、感じる。

●ねらい
ナミビアについて知り、文化に親しみを持つ。

●主な対象
中学生

●用意するもの
ワークシート②（P128～129）：全員分
クイズ・写真・実物

●所要時間
10～15分×４回（通して行っても良い。）

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
○テーマごとにクイズ形式でナミビアについて知る。	
１．自然環境	【答え】
Ｑ１：ナミビアにある砂漠は世界で一番○○な砂漠。○○に当てはまるのは？	Ａ１：古い（ナミブ砂漠の砂を触るなど、なるべく現物に触れる時間を設ける）
Ｑ２：ウィントフックの標高は約何メートル？	Ａ２：1650m
２．歴史・文化	
Ｑ３：ナミビアは西暦何年にできた国でしょう。	Ａ３：1990年（市場で購入したスパイスの香りを嗅いだり、民族のダンスを見る→ドイツによる植民地支配、南アフリカ共和国に占領されていたことや、南アフリカから受けたアパルトヘイトの影響が今でも残っていることを知る）
Ｑ４：私がナミビアで食べていない食べ物は何でしょう。次の中から一つ選んで下さい。 ①オリックスの肉 ②牡蠣（カキ） ③ガの幼虫 ④お寿司（すし）	Ａ４：ガの幼虫

３．経済 Ｑ５：ナミビアでは、何が一番輸出されているでしょう。	Ａ５：宝石・貴金属 輸出品の割合や品目に着目し、特徴を考える。→ナミビアも他の国と同じようにモノカルチャー経済の傾向にあることを知る。
４．課題 Ｑ６：ナミビアでは○○率が世界第２位。何率？	Ａ６：失業率 「失業率が高いと、どのような影響が生じるだろう？」と考える。
ふり返り（発表） 日本との違いやナミビアの良さについて考える。	

ワークシート②

Let’s study and feel about NAMIBIA！

氏名（　　）

【世界地図】

【ナミビア共和国】

ナミビアと日本を赤色で着色しよう！
ナミビアの首都を書きこんでみよう！

⑴ 自然環境

〈地形〉

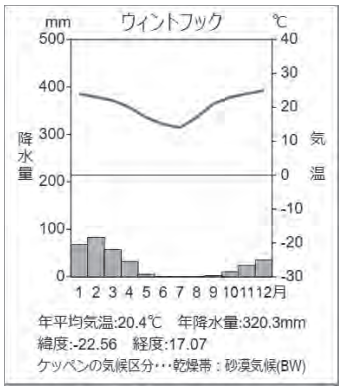
〇ナミブ砂漠：世界で一番（①　　）砂漠

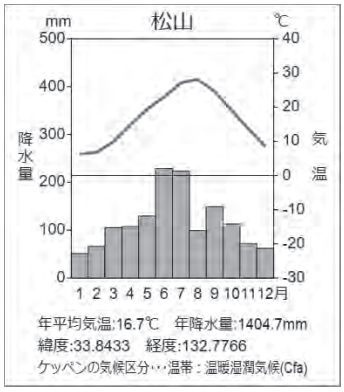
〇首都ウィントフックの標高：（②　　）m

〈気候〉

〇（③　　）気候、サバナ気候など

〈雨温図〉





☆ナミブ砂漠の砂に触れて

〇ウィントフックと松山の雨温図を比べて

⑵ 歴史・文化

〈歴史〉

1884～1915　：　(①　　)による植民地支配

1915～　　：　(②　　)による支配

→（③　　）の影響

人種隔離政策

(④　　)　：　ナミビア独立

〈文化〉

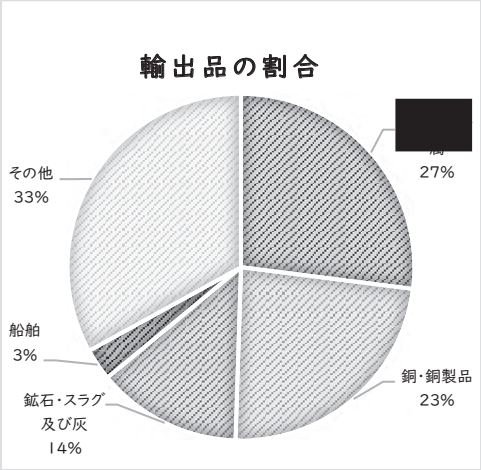
〇言語：(⑤　　)（公用語）、アフリカーンス、ドイツ語

コエコエ語、ヘレロ語、コイサン語など

☆ダンスを見て

☆スパイスを嗅いで

⑶　経済



☆左の「ナミビアの輸出品」を見て…

グラフの特徴は？読み取れることは？

⑷　課題

ナミビアの課題

・(①　　)率＝世界第２位

→高いと人や地域、国にどのような

影響が及ぶだろう？

〈解答〉⑴①古い　②1650m　③砂漠　⑵①ドイツ　②南アフリカ共和国　③アパルトヘイト　④1990 年　⑤英語　⑶■･･･宝石・貴金属　⑷①失業　失業率が高いことで及ぶ影響　・賃金を得られない　・食料を得られない　・医療を受けられない　・教育が受けられない　・治安の悪化など

アクティビティ3　「ナミビア産業プロジェクト」

●概　要

ナミビアおよびアフリカ州の学習を「ナミビア産業プロジェクト」と題し、ナミビアで産業をおこすことを考えた。JICA教師海外研修で訪れた小学校の児童たちは職業フェスタに参加した経験があり、多くの小学生が自分の将来の夢を抱いていた。しかし、ナミビアの失業率は世界第２位、多くの児童たちの親は職が無いという現状であった。新たな産業を興す場合、ナミブ砂漠の「ナミブ」とは先住民の言葉で「何もない」という意味である。しかし、実際に訪れてみると壮大な自然やナミブ砂漠特有の植生、多様な民族の文化、そこに生きる人々の豊かな心など、多くの魅力を感じた。そこで、ナミビアにあるものを有効活用して、人々が自立できるような産業を興すプロジェクトを考えるアクティビティを行った。

●ねらい

・主体的に課題を解決しようとする態度を養う。
・現地の人の立場や世界の人々、持続可能性等を考慮しようとする態度を養う。

●主な対象

中学生

●用意するもの

・資料（文献、写真など）
・タブレット端末（ロイロノートスクール）

●所要時間

３時間

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1．課題の設定について説明する。 ナミビアの失業率を改善するためのアドバイザーになったという設定で考える。	
2．全体でナミビアにあるものを挙げていく。	本時までに見た写真や資料等を振り返りながら、クラス全体でブレインストーミングする（ロイロノートスクールの共有ノートを使用）。
3．産業やその種類について知る。	第一次～第三次産業までを紹介する。
4．挙げられた産業やその種類から、どの分野、内容、何を使ってプロジェクトを考えたいか選び、班に分かれる。	現地の人が自立できるようなプロジェクトであるか、持続可能な開発であるかなど、我々の一方的な押しつけにならないようにプロジェクトを考える前に視点を提示する。

5．選んだものから、どのようなプロジェクトを進めるか考える。 6．班ごとにプロジェクトのプランを考え、プレゼンテーションの資料を作成する。 7．発表 発表するグループはスライドを提示する。 聞く人は、良い点や改善点を見つける。	日本や諸外国の技術を生かせないか、様々な企業のホームページを参考にするよう助言する。
ふり返り（発表） 自分の班の発表や、他の班の発表を聞いてふり返りをする。	他の班の人が書いた感想は、印刷してそれぞれに配布する。

●用語の解説

・産業の分類：第１次産業…農林水産業
　　第２次産業…建設業、製造業
　　第３次産業…商業、サービス業
・ナミビアの失業率：世界第２位（2021年、ブルームバーグ調査）

コ ラ ム

開発協力大綱における普遍的価値とは何を指すのか？

海外研修初日のオリエンテーションにて、「開発協力大綱における普遍的価値とは何か」「ナミビアの経済発展を促す国際協力のあり方は普遍的価値につながるのか？例えばウォルビス・ベイを開発することで環境破壊なども起こるかもしれない。低賃金で働いている港湾労働者がいることで、経済格差が是正されないのではないか？」というような質問があった。私自身も、経済発展を遂げるということは環境破壊や経済格差の拡大につながるということを感じていた。その質問に対し、JICAナミビア支所の洲崎支所長は次のように答えた。「日本だけでなくどの国も“ナミビアはこれをした方がいいよね”と思えるような協力をするということが我々の考える普遍的価値に基づく協力であるだろう。」「いろんな途上国、先進国があるが、多くの人たちがそれは間違っていないよねと言えるであろうこととは、“それぞれの国民が暮らせる、生きていける”ということ。低賃金であろうがなんだろうが、職につけない人たちにどのように職を提供するかということが大事。国民として生まれたけど、生きていくのにつらすぎるという人をできるだけ減らすというところからスタートする。」

また、在ナミビア日本大使館の2023年９月版「ナミビア月報」に「人口10万人あたりの自殺率がアフリカで一番高い」という記述があった。ナミビア警察の統計によると、犠牲者の82％が男性であり、失業、貧困、うつ病、絶望、家族問題、自尊心の低下が自殺の一般的な原因であったそうだ。

“生きていくのにつらすぎる人”をできるだけ減らすにはどうすれば良いか。洲崎支所長の言葉やナミビアの失業率が世界第２位・自殺率がアフリカで第１位というデータ、小学校を訪問した際に聞いた“多くの保護者が失業している”という現実が、本アクティビティを考えるきっかけとなった。

●パワーポイント、ワークシート（見本）

あなたは、ナミビアの失業率を改善させるための産業プロジェクトを考えるアドバイザーになりました。ナミビアにあるものをいかして、現地の人が自立して暮らせるようなプロジェクトを考えましょう。

ナミビアにあるものをあげてみよう！

ナミビア産業プロジェクト

プロジェクト名

概要

□第一次産業（農林水産業）
□第二次産業（製造業・建設業）
□第三次産業（商業・サービス業）

プロジェクトの詳細

ナミビアの（　）を使って（　）をする

必要なもの	必要な技術	他国での例
プロジェクトを成功させるために必要なこと	対象（国・地域・年齢層など）	持続可能性は？

他国からの支援（国、企業など）	懸念されること	解決方法
幸せポイント ☆	このプロジェクトに込めた思い	

SDGsの向上（何を向上させることができるか）

† 向上させられるものに○をつけよう。

おわりに

相手の文化を尊重し、敬意を持って人々と接していたナミビアの人々の姿がとても印象的であった。これからの未来を担っている生徒には、多様性を認め合える社会をつくってもらいたい。そのために、私自身が学級・学校をそのような社会集団にしていきたい。

また、教師海外研修を通して、相手に寄り添いつつ自ら学ぼうとする姿勢が大切だと感じた。相手に寄り添うためには、表面的なものだけではなく、直接的に見えないものも見えるようになる必要がある。そのためには、多面的・多角的に物事を捉える力が必要である。今後はそのような生徒を育成させられるような教材を開発していきたいと思う。

参考文献・引用資料

〈書　籍〉
・『ナミビアを知るための53章』水野一晴、永原陽子編著
・Namibia Publishing House『NEW NAMIBIAN SCHOOL ATLAS』

〈ホームページ〉
・FUNKY SOCKS DAYを設立した団体のホームページ：https://breadlineafrica.org/
・実際にステッカーを購入した、PNAという南アフリカ共和国系列の文房具店のホームページ
https://www.goodthingsguy.com/lifestyle/funky-socks-day-2023/#:~:text=South%20Africa%20%2818%20August%202023%29%20%E2%80%93%20The%208th,improving%20schools%20in%20vulnerable%20communities%20across%20the%20country
・イギリスのOdd Socks Dayに関するホームページ：
https://anti-bullyingalliance.org.uk/anti-bullying-week-2023-make-noise-about-bullying/odd-socks-day/what-odd-socks-day
・ウェブサイト「The World Bank」https://www.worldbank.org/en/home
・在ナミビア日本大使館「ナミビア月報」2023年９月
https://www.na.emb-japan.go.jp/files/100573467.pdf

実践事例報告

プログラム作成・実践者　寺田　美優　　学 校 名　松前町立岡田中学校

担当教科　社会

実践教科　中学校社会科（地理的分野）、特別活動など

単 元 名　「世界の諸地域　アフリカ州」

【授業の概要】

⑴ 単元のテーマ

アフリカ州について知り、課題を捉え、解決する方法を考える。

⑵ 単元のねらい

・アフリカ州について概観するとともに、ナミビアの実態について知る。

・アフリカ州（ナミビア）の課題を捉え、主体的に課題に取り組む態度を養う。

⑶ 授業の概要

学級活動では、多様性を尊重する態度を育むために、アクティビティ１を実施した。社会科の地理的分野の授業では、アフリカ州とナミビアを絡めながら授業を実施した。自然・環境、歴史・文化、経済、課題の４つの分野について、アフリカ州全体を概観するとともに、ナミビアの実態についても触れた。ナミビアの地形や気候、民族、国の歴史、輸出の状況についてクイズを出したり、ナミビアで入手したもの（ナミブ砂漠の砂、市場で入手したスパイス、伝統的な布を用いた製品、現地のダンスの動画等）に五感で触れさせたりして、ワークシートに感じたことや学んだことを記入させた。

また、学習のまとめとして、ナミビア産業プロジェクトと題し、失業率の高いナミビアにおいて、産業を発展させるためのプランを考えるというアクティビティを実施した。

⑷ 指導上の留意点

１時間目から４時間目の授業については、アフリカ州を概観しつつ特にナミビアをクローズアップして取り上げた。そのため、ナミビア＝アフリカとならないよう、他のアフリカ州の国々の資料も使用した。アフリカ州には多くの課題があり、それらが複雑に絡み合っている。しかし、「かわいそう」「〇〇が足りない」というような偏ったイメージにならないよう、日本にはない素晴らしさを伝えられるよう努めた。

⑸ 生徒の感想や学び・気づき

全ての授業を終えての感想では、「手で食べ物を食べるのか～と思ったが、日本ではおはしで食べるのが当たり前のように、ナミビアでは手で食べるのが当たり前なんだと思った。」「日本と国と国との距離も遠いので、文化や環境が大きく違う。でも、全く接点がないわけではないということが分かった。文化が違うからこそ新しい考えを知ることができるし、環境が違うからこそ無いものを補い合って助け合っていきたい。」「ナミビアにあるものをいかして産業プロジェクトのプランを考えるなかで、ナミビアの環境や町について自分で調べたり、商品のデザインを決めたりするのがとても楽しかった。」など、様々な感想があがった。自分自身の当たり前を問い直すものや、日本とナミビアと

の関係性について書いているもの、産業プロジェクトについての感想が多かった。

⑹ 生徒の様子

プロジェクトを考えている生徒たち

プロジェクト発表の様子

【授業実践をした上での感想・ふり返り】

ナミビアでの学びをエッセンスとして、授業に溶かし込むということは思ったよりも難しく感じた。生徒に伝えたいことがたくさんあったため、何に重点を置くか悩んだが、「多様性を認めること」「主体的に課題解決しようとする態度を身につけてほしい」という軸を大切にして授業を実践できたように感じる。

今回の授業実践では生徒から学ぶことがたくさんあった。ナミビア産業プロジェクトでは、ナミビアで採れる牡蠣の殻を使用したチョークの製造や、ナラという独自の植物を使用した化粧品の製造などのアイデアが提案されていて、生徒の柔軟な発想に驚かされた。

教師海外研修の事後研修で、過年度に教師海外研修に参加されていた先生が「先生が挑戦しようとする姿勢を生徒は見ている。」と言われていた。教師海外研修で学ばせていただいた経験は一生ものである。これからも挑戦する姿勢を大切に、国際教育を継続させたい。

開発途上国援助の手だてを考えよう

はじめに

JICA教師海外研修の事前研修で印象に残った言葉がある。それは、「答えのない問いを一緒に考えよう。」というものだった。

第二次世界大戦後の復興期に国際社会から支援を受け経済成長をして今の日本の社会があるように、「グローバル化（Globalization）」が進み、国際的交流や連携が重要視される今日、開発途上国における貧困や格差、紛争などの諸問題に対して、日本の国際社会に対する支援や協力も大切となっている。そんな中で、中学校の英語の教科書には、「Think Globally, Act Locally」という国際協力や開発国への支援についての題材や「Fair Trade」について取り上げられている単元もあり、開発教育の視点での教科学習も取り入れられている。

私は、進路や自身の将来のことについて考え始める中学生には、異文化に対する理解を進め、多様性を受け入れ、互いに理解し協力し合える関係を構築できる人であってほしいという願いをもっている。そのためには、先ず「知ること」、そこから「考えること」が必須であると考えている。開発国や地域の実情を知り、そこから今の自分にできること、将来の自分にできることを考えるような機会を設定することで、「同じ世界に住む一人として」という視点と「世界の中の日本に住む一人として」という視点をもった生徒になってほしいと思うのである。

社会科地理分野の学習は、単に教科としての知識だけでなく、世界と日本との関わりを感じることができる教科であり、学習して得た知識を活用したり、統合したりして、その中から、「答えのない問い」について、自分なりの考えをもつとともに、更に世界の実情に興味をもつことに繋げてほしいと願う。

この教材の使い方・参加のルール

この教材では、正解がある問いではないため、これまで学習したことを踏まえながら思いを巡らせ、個人で考える場面では自由な発想を大切にし、グループで協議したり検討したりする場面では、他の意見を否定したりせずに話し合いを進め、考えを深めていきたい。

全体のねらい

JICAのODA活動として、ナミビアのウォルビス・ベイ港におけるナミビアの「国際物流ハブ構築促進プロジェクト」を視察した。ナミビアの経済発展のために、徹底してリサーチを行って経済発展にむけてのビジョンを立て、念入りなプラニングからその事業に取り組み、成果を上げていることを知り、とても感銘を受けた。その事業に関わってこられた方々に話を聞く中で、そこにある資産をいかに活用し、発展に繋げていくかということは、生徒にとっての学習活動に通じるものがあり、学んだこと（知識・技能）を活用し、自分の考えを構築し、それを発表する（思考・判断・表現）活動に繋げたいと考えた。

アクティビティ1　「クイズ・ナミビア」

●概　要

アクティビティ２の導入として取り扱う。

●ねらい

ナミビアについて興味をもつ。

●主な対象

小学生、中学生

●用意するもの

・パワーポイント（P138）
・ワークシートまたはタブレットのデータ：印刷の場合は全員分

●所要時間

10分～

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
１．ナミビアについての４択問題に挑戦しよう。	パワーポイントなど、視覚教材を活用する。タブレットを活用して早押しクイズなどにできると盛り上がると思われる。 答えとあわせて、解説やエピソードを伝える。
ふり返り ナミビアに興味をもつことができたかを問う。	

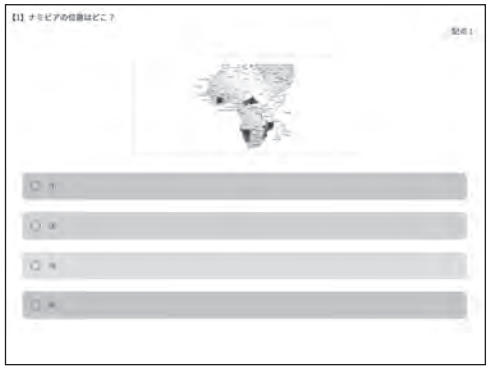
●解　説

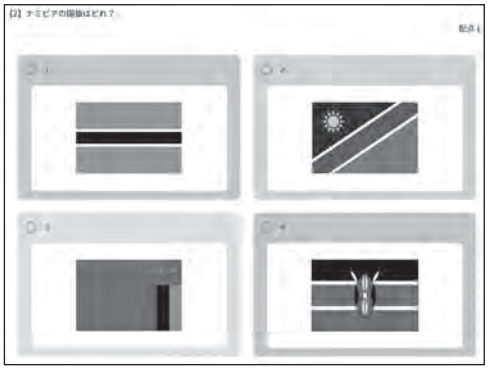
ナミビアの国章にオリックスが描かれているが、滞在中、一番多く口にする機会があったのはオリックスの肉であった。また、ナミビアでは昆虫食もあるが、残念ながら滞在中に口にする機会はなかった。

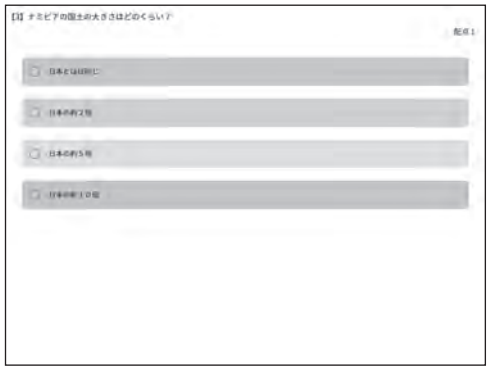
クイズではナミビアの位置や国旗についても触れた。ナミビアの国旗の青は大空を、赤は独立のために流された血を、緑は豊かな森林資源を、黄は鉱物資源を表している。太陽は独立の喜びの象徴である。

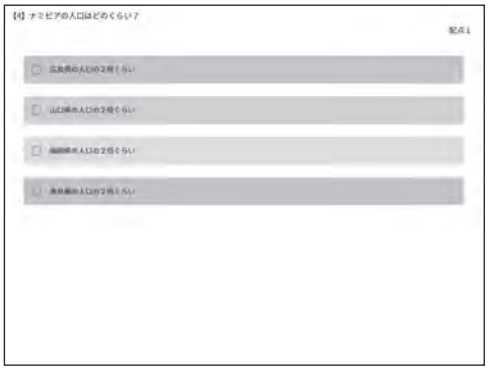
ナミビアの国土は日本の約2.2倍、世界で２番目に人口密度の低い国である。（日本全土に山口県民が住んでいるくらいの人口密度であり、生徒にはそれだけで驚きとなった。）国名の由来にもなっている世界遺産のナミブ砂漠など豊かな自然と広大な大地を有している。また、独立までの歴史の中でドイツの植民地だった時代もあり、都市部ではヨーロッパ然とした街並みを見ることができ、ビールも美味しい。また、南アフリカ占領下だった時代があり、アパルトヘイト（人種隔離政策）が施行されていた。

クイズデータ（見本）

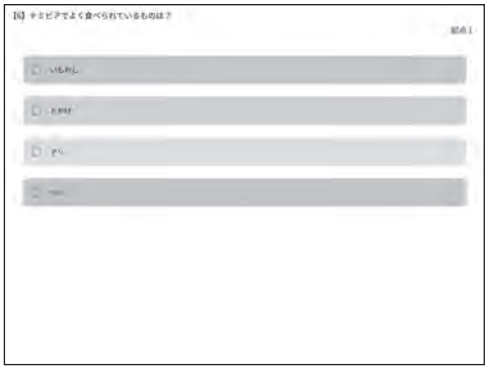

【1】ナミビアの位置はどこ？
配点：1

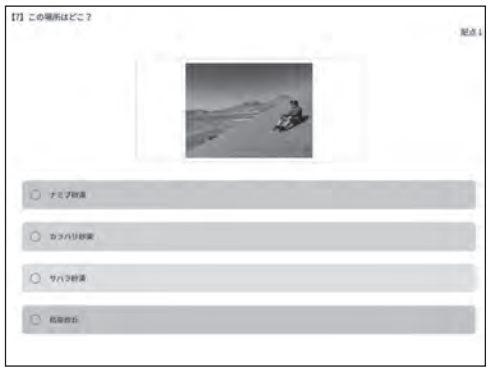

【2】ナミビアの国旗はどれ？
配点：1

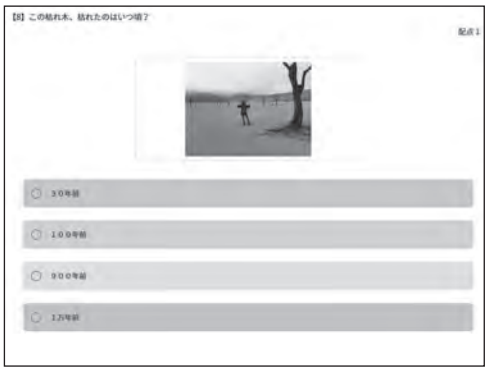

【3】ナミビアの国土の大きさはどのくらい？
配点：1

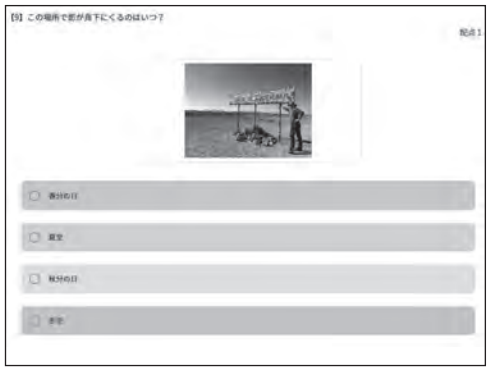

【4】ナミビアの人口はどのくらい？
配点：1

【5】これ、何の鳥？
配点：1


【6】ナミビアでよく食べられているものは？
配点：1


【7】この場所はどこ？
配点：1


【8】この枯れ木、枯れたのはいつ頃？
配点：1


【9】この場所で雨が降下にくるのはいつ？
配点：1

【10】ヨーロッパのような街並み、どこの影響？

アクティビティ2 「あなたがナミビア大統領になったら、どうやってこの国を経済的に豊かにする？」

●概　要

社会科地理分野で学習したことを踏まえ、学習したことを活用して、自分なりの考えをもつことをねらいとしている。アフリカ諸国、あるいはナミビアが抱えている問題に対して、ＥＵの経済統合、中国の経済特区の設置、あるいはアジア諸国の外国資本の工場誘致などをヒントに、ナミビアのもつ資産を踏まえて、雇用確保と経済発展をしていくための方策を考える。

●ねらい

・ナミビアの実情を知り、ナミビアの抱える問題について知る。
・地理分野で学習したことを踏まえ、課題解決のための方策を考える。

●主な対象

中学生

●用意するもの

・パワーポイント（P141～142）
・ワークシートまたはタブレット用データ：印刷の場合は全員分
・地理の教科書、ノート、地図帳、資料集など（地理の授業で使用するもの）：各自

●所要時間

40分～

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1．ナミビアの実情について知ろう ・失業率の高さ ・著しい経済格差	ナミビアの現状を紹介し、この国の抱える諸問題について確認をする。
2．「あなたがナミビアの大統領だったら、どうやってこの国を経済的に豊かにする？」と問う。	国の課題を提示する。主体的に考えるために「首長として」という視点を提示する。
3．２．のアイデアを考えるため、地理で学習したことをふり返る。	EUの経済統合、中国の経済特区の設置、あるいはアジア諸国の外国資本の工場誘致など、地理分野で学習したことを確認する。
4．各自でナミビアを豊かにするアイデアを考える。 ナミビアの課題（背景）、それを解消するための施策、実現した場合の効果を一連の流れで考える。	個人作業で10分間、ノートや教科書、資料集を活用して、既習事項を踏まえながら、自分の考えをまとめる。

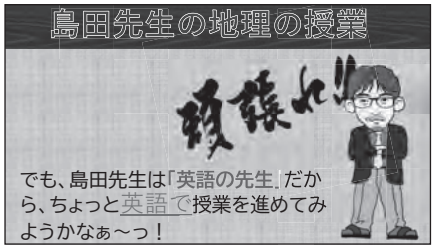
5．グループ活動 各自が考えたアイデア、意見をその根拠とともにグループ内で共有する。それらをふまえて、グループで検討し、グループとしてのアイデアを考える。	４～６人のグループを作る。 20分程で互いの意見を尊重しながら案を考えていく。
6．全体発表	各グループの意見を発表するとともに、聞く側はそのアイディアについて疑問点や問題点などを検討し、更に考えを深める。
ふり返り	ナミビアの抱える問題について考えることを通して、世界の様々な地域が抱える様々な問題について知ろうとする姿勢をもち、そこから何ができるのかを考える機会となったか。

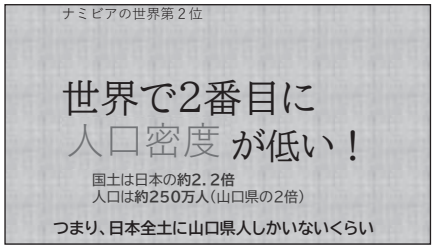
●解説・コラム

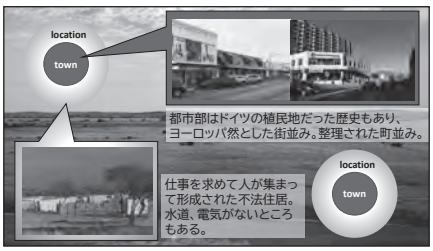
ナミビアのウォルビス・ベイ港における「国際物流ハブ構築プロジェクト」でJICAによる支援が行われている。ウォルビス・ベイは水深が深いため大型船も着岸できる天然の良港であり、また、４カ国と国境を接しているナミビアは、周辺各国と通じる国際回廊を有した南部アフリカの玄関口となっている。また、隣国ザンビアなど鉱物資源が豊かな国が周辺にあり、世界各地と南部アフリカを結ぶポテンシャルをもっている。そのことを一つの例として、授業の最後に紹介をする。

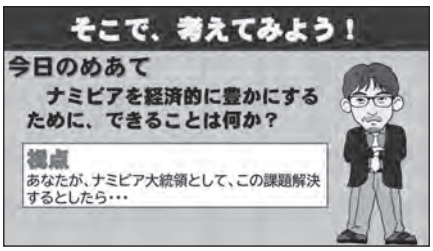
ナミビア滞在中に訪問した日本大使公邸にて、西牧久雄在ナミビア日本大使がこれからの学生にとって大切なこととして話された「自分で疑問に思ったことを考え、自分で調べること」、「日本の歴史を知る、学ぶことで、自分に『誇り』を持つことができる」、「internationalization/globalizationの違いを理解することで、identityが醸成されmind setが培われる」、「興味・関心のあることを引き上げていく。そして、突飛なことでも口に出してみること」という言葉が印象に残っている。その言葉を生徒たちにも分かりやすい言葉で伝え、「調べる」「考える」「意見を述べる」ことに積極的に取り組むよう伝えた。

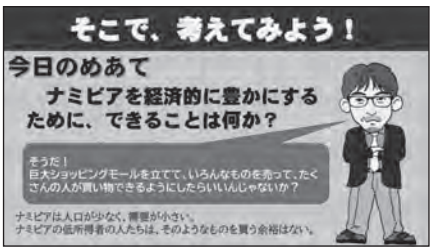
パワーポイント・ワークシート（見本）









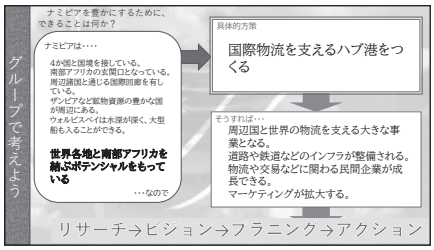


グループで考えよう
ナミビアを経済的に豊かにするために、できることは何か？
ナミビアは・・・・
・・・なので
具体的方策
そうすれば・・・
ナミビアの経済は豊かになり、運用が拡大

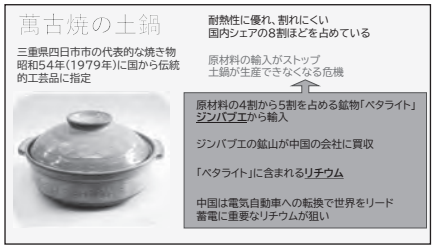
JICA
国の機関の一部を切り出して設立されたもの
独立行政法人国際協力機構
（JICA／ジャイカ）
日本の政府開発援助（ODA）を一元的に行う実施機関として、開発途上国への国際協力を行っている。

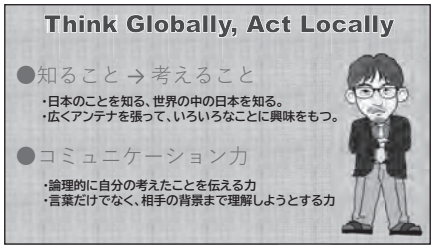
国際物流ハブ機能促進プロジェクト
ナミビア
●4ヵ国と国境を接している。
●南部アフリカ地域の玄関口である。
●周辺諸国へと通じる国際回廊を有している。
世界各地域と南部アフリカを結ぶ
物流ルートとして高いポテンシャル

ウォルビス・ベイ港
水深16mあり、大型の貨物船も入ることができる。
南部アフリカの物流の拠点→道路などのインフラの整備
民間企業の成長
マーケティング拡大
JICA


グループで考えよう
ナミビアを豊かにするために、できることは何か？
ナミビアは・・・・
4か国と国境を接している。
南部アフリカの玄関口となっている。
周辺諸国と通じる国際回廊を有している。
ザンビアなど鉱物資源の豊かな国が周辺にある。
ウォルビスベイは水深が深く、大型船も入ることができる。
世界各地と南部アフリカを結ぶポテンシャルをもっている
・・・なので
具体的方策
国際物流を支えるハブ港をつくる
そうすれば・・・
周辺国と世界の物流を支える大きな事業となる。
道路や鉄道などのインフラが整備される。
物流や交易などに関わる民間企業が成長できる。
マーケティングが拡大する。
リサーチ→ビジョン→フラニング→アクション

西村経済産業大臣がナミビア共和国アルウェンド鉱山・エネルギー大臣及びイーブンブ産業化・貿易大臣との間で、鉱業分野の協力、投資環境整備及び経済協力に関する共同声明に署名
8月8日（火曜日）、西村経済産業大臣は訪問先のナミビア共和国にて、アルウェンド鉱山・エネルギー大臣及びイーブンブ産業化・貿易大臣と会談し、鉱業分野、水素・アンモニア分野、貿易投資関係の強化に向けた協力について議論を行い、その成果として、それぞれの大臣との間で共同声明に署名しました。


萬古焼の土鍋
三重県四日市市の代表的な焼き物
昭和54年（1979年）に国から伝統的工芸品に指定
耐熱性に優れ、割れにくい
国内シェアの8割ほどを占めている
原材料の輸入がストップ
土鍋が生産できなくなる危機
原材料の4割から5割を占める鉱物「ペタライト」
ジンバブエから輸入
ジンバブエの鉱山が中国の会社に買収
「ペタライト」に含まれるリチウム
中国は電気自動車への転換で世界をリード
蓄電に重要なリチウムが狙い


Think Globally, Act Locally
●知ること → 考えること
・日本のことを知る、世界の中の日本を知る。
・広くアンテナを張って、いろいろなことに興味をもつ。
●コミュニケーション力
・論理的に自分の考えたことを伝える力
・言葉だけでなく、相手の背景まで理解しようとする力

おわりに

現在、ITの進歩により生徒たちはたくさんの情報に触れている。その一方で、IT端末ではAIにより自分の興味、関心が高いコンテンツが次々と提示されるため、特化したことに関する情報は深く知っているものの、幅広く多くの情報に触れることが少なくなってきているように感じている。併せて、スマートフォンを利用する時間が長い反面、テレビでニュースを見たり、新聞を読んだりする機会も少なくなっており、読書量も減っている傾向が本校生徒には強いことが、全国学力学習状況調査の結果からも分かる。

そのため、いろいろな情報を提示し、生徒の「知ること」を支援することも、教科指導と併せて、私たち教師の大切な役割であると感じている。そして、そこから「考える」に繋げていくことを学習活動の中で実践したいと考えている。

進路や将来について考え始める時期である中学時代に、いろいろな情報や価値観に触れる機会をもち、そのことについて考えることを通して、価値観や職業観などの醸成に繋げ、また、学びの意味や意義について考えることにも繋げていきたいと思う。また、globalizationが進む現代において、internationalization、localizationの視点も形成し、「同じ世界に住む一人」であるとともに、「日本人として」という見方や考え方も必要になると考える。その中で、「答えのない問い」について考え、また将来、その課題に向き合う生徒が一人でも出てくることを願っている。そして、「Think Globally, Act Locally」に繋がる生徒の育成に、これから少しでも携わっていきたいという思いを強くした教師海外研修とナミビアへの訪問であった。

実践事例報告

プログラム作成・実践者　島田　修司　　学 校 名　下関市立夢が丘中学校
担当教科　英語

■実践事例 1

実践教科　社会科地理分野
単 元 名　「世界の諸地域　アフリカ州」

【授業の概要】

⑴ 単元のテーマ

アフリカが本当に豊かな地域になるためには

⑵ 単元のねらい

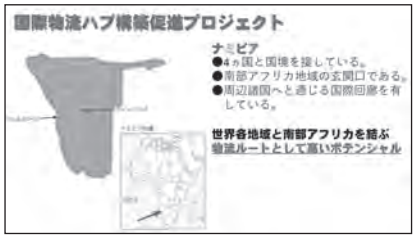
アフリカの抱えている問題に対して、持続可能な社会の実現について考える。

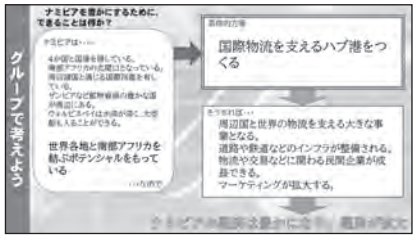
⑶ 概　要

①ナミビアについてのクイズを行う。（タブレットを利用して早押しクイズで実施）
②ナミビアの教師海外研修で見たナミビアの様子やナミビアの抱える問題を伝える。
③「ナミビアを豊かにするためにできることは何か～あなたがナミビアの大統領として課題解決を図るとしたら～」（アクティビティ２）
④JICAのODA活動、ナミビアのウォルビス・ベイ港における「国際物流ハブ構築促進プロジェクト」を一例として紹介する。

⑷ 指導上の留意点

・地理的特徴や自然環境、産業や歴史背景などアフリカやナミビアの概要から考えさせる。
・EUの貨幣統一、経済統合、アジアの外国資本の工場誘致など、社会地理分野で学習したことなどに触れ、ヒントとする。





⑸ 児童生徒の感想や学び・気づき

・ナミビアはダイヤモンド鉱山などの鉱物資源があるので、ミャンマーのネピドーのように、ダイヤモンド専用都市を人工的に設立し、ダイヤモンドの産出から加工まで全てをそこで行って輸出の拠点とすると、経済が発展すると思う。
・ナミビアは周りの国々と国境が接しているので、周辺の幾つかの国と協力する体制を作ることができれば、もしモノカルチャーが立ち行かなくなったときは、互いに協力したり、支援し合ったりす

ることで、ダメージが少なくなると思う。そのために、強い協力体制を作っておくと良いと思う。

・教育の充実を図る。また、インフラの整備を進めることで、仕事が生まれ雇用を確保できる。仕事をすることで、収入を得ることができ、より多くの人たちが教育を受けることができるようになると、未来に繋がっていくと思う。

・ナミビアは土地があるので、農業や工場などを公共投資で作って、多くの人々に職を与えるようにする。そうすれば、技術力が向上し生産が増えるので、自立できると思う。

⑹ 授業を実践しての感想・ふり返り

社会科教員とTTで授業を行った。授業の最初からクイズまでは、英語教師である自分が英語で授業を進めた。それは、多言語、他民族国家であるナミビアでは、小学校３年生までは母語で授業を進め、学習していくが、小学校４年生からは公用語である英語で全ての授業が行われている実情より、英語で各教科の学習をすることの難しさや大変さを体感してほしいと思ったからである。

アフリカ州の概要や他地域の解説や授業で学んだことは、社会科教員が教科書や地図帳などを広げながら学習したことを復習し、そこから本時の課題について考える展開とした。生徒たちにとっては、これまで学習したことと関連付けて考える機会となったと思われる。

生徒たちは、いろいろと考えを巡らしながら興味をもって課題に取り組んでいたが、各自で考えをまとめたり、あるいはグループで検討したりする時間が不十分であった。そのため、検討が十分でなかったところや時間足らずで触れることができなかったところについては、後日、社会科教員にお願いをして、取り組んでもらった。最初から２時間の授業構成で授業案を作成し、課題について一人ひとりが自分たちの考えをしっかりと構築する時間を十分にとったうえで、グループで検討したり、検証したりする時間を十分に確保することができれば、学習をより深めることができたと思う。

■実践事例２

実践教科　道徳

単 元 名　「ダショー・ニシオカ」（C-(18) 国際理解、国際貢献）

【授業の概要】

⑴ 単元のテーマ

真の国際協力

⑵ 単元のねらい

それぞれの国の伝統と文化に各国民が誇りをもっていることを理解し、日本人として国際協力を積極的に行おうとする実践意欲を培う。

⑶ 概　要

１時間

①ダショー・ニシオカ（西岡京治）についてのビデオを視聴し、西岡の取組について知る。

②教科書を読んで考える。

「西岡さんはどんな思いで『国際協力とは、一時的な物の援助であってはならない。』と考えたのだろうか。

③まとめ、講話

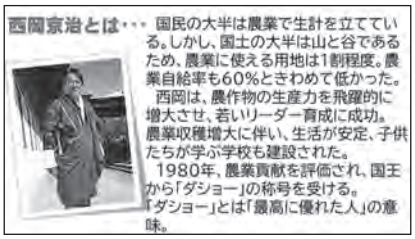
異文化を理解する・理解してもらうには時間と労力が必要であり、相手の立場で考えることが不可欠であることに気づく。

2時間

④ナミビアについてのクイズを行う。（タブレットを使っての早押しクイズ）

⑤教師海外研修で見たナミビアの様子やナミビアの抱える問題を伝える。

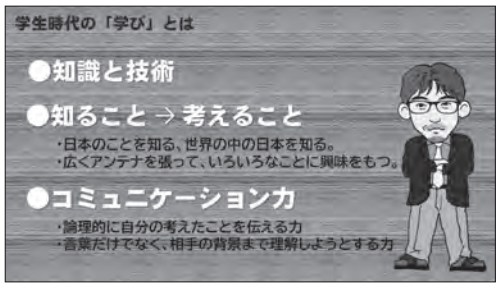
⑥「私たち日本にできることは何か～国際協力で大切なものは何か～」について各自で考える。



⑦グループで協議し、意見をまとめる。

⑧各グループの意見を発表する。

⑨まとめ（JICA職員の話）



(4) 指導上の留意点

JICAの前身である海外技術協力事業団の一員としてブータンで長期に渡って活動した西岡京治氏の言葉、「国際協力とは、一時的な物の援助であってはならない。」から、真の国際協力とはどのようなことかを考える。

(5) 児童生徒の感想や学び・気づき

・今の自分たちがナミビアにできることを考えることは難しいと思いました。口だけならいえるけど、本当にそれをやろうとしたらできないことが多いので、もっといろいろな国のことや実情について知れたらいいと思いました。

・私たちの当たり前の生活が、当たり前じゃない生活をしている人たちがこの世界にはたくさんいて、その人たちを身近なところで支えることができる仕事があることが分かって、本当に素敵な職業が日本にもたくさんあることを知りました。

・今の私にできることはあまりないので、まずは調べて、知ることを大切にしたいです。日本はナミビアなどに比べると豊かなので、農業や工業なども教えていけると良いと思いました。一時的に支援するだけでなく、その国が、その後も、自分たちで豊かになれるようにしていかないといけないんだと分かりました。

・他の国との協力のしかたは、今までは物を送るだけだと思っていたが、それだけではないということを知ることができました。将来、そのような仕事について、技術などを伝えたいと思いました。

・日本ができることは意外にいろいろとあるし、貧困で困っている海外の人たちを助けようとする活動は素晴らしいものだと思います。でも、海外の人たちを助けることも大切だけど、先ずは日本の貧困で苦しんでいる人たちをなくした方が良いのではと思いました。

⑹ 授業を実践しての感想・ふり返り

道徳において、「真の国際協力」で「ダショー・ニシオカ（C-(18) 国際理解、国際貢献)」という題材がある。JICAの前身である海外技術協力事業団の一員として、長年に渡りブータンで農業指導に携わったブータンの「農業の父」と呼ばれる西岡京治氏について扱われている題材である。西岡氏の功績はブータン国王にも認められ、国王から「最高の人」という意味の「ダショー」の称号を与えられた。

以前、全校集会でナミビアについて紹介する機会を得たが、その時の感想の中に「私たちにできることは何か」として多くの生徒が「募金をする」と書いていた。しかし、それから時間を経て「実際に募金した人はいるか」と問うと一人もいなかった。そこで、ここでは単に「募金する」からもう一歩踏み込んで、「国際協力とは、一時的な物の援助であってはならない。」という西岡氏の言葉を踏まえ、国際協力において大切なものは何かを考える機会とした。

ナミビアのウォルビス・ベイ港においてJICA支援の「国際物流ハブ構築プロジェクト」事業に携わる株式会社国際開発センターの主任研究員桑原準氏に現地でお話を伺う機会があった。桑原氏に国際協力において大切なことを尋ねると、①技術力（相手の国から求められる技術)、②コミュニケーション力（語学だけでなく、相手の背景まで理解する力)、③やる気（新しいことを吸収できる力)、という返答があり、実際に国際協力事業を行っている方々と、この単元で取り上げたブータンへの農業支援を行った西岡京治氏には、共通するものがあることに気づく。

本時においてはJICAの職員の方に参観していただいたことで、青年海外協力隊としての経験などのお話を聞くことができ、生徒にとっては、興味を広げたり、将来の選択肢として国際協力という視点ももつことができたりしたようである。また、併せて、そのために授業や学習することの意義や意味についても考える機会となったとようである。

このような学習は、一時的、一元的なものではなく、継続的に多元的に行っていくことで、生徒にとって、より考える機会となりうるものだと思う。JICA教師海外研修の事前研修で印象に残った言葉として、「答えのない問いを一緒に考えよう。」というものがあるが、これからも、自分自身が研鑽しながら、生徒と共に「答えのない問い」について考えていく機会をもち続けたいと思った。

JICA職員が授業を見学した際の様子

幸福な社会を考えるヒント

はじめに

宮沢賢治は「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と記した。現在、国内総充実（GDW）の視座が広がりつつある日本において、グローバルな課題をひとりひとりが我がこととして見つめ、その解決にむけて取り組む過程でひとりひとりに最適な幸福のかたちと世界の幸福のかたちを見出す動きがみられる。本教材は、グローバルな諸課題を読み解き、それが現在と未来の自分たちの幸福に貢献できるように試作したものである。

この教材の使い方

価値観は立場や視座によって異なることを理解し、幸福とは何かをクラスで考える。

全体のねらい

先人たちの考えに触れながら多角的にものごとを見る態度を養うことで、幸福な生き方を体験的に学ぶことを目指している。

アクティビティ1　「島の宝」（1時間）

●概　要

昔話『桃太郎』を通じて、多角的な視点を育み、現代社会が抱える諸課題を考える。

●ねらい

近代化の矛盾を学び、現代社会が抱える諸課題について関心を高める。

●主な対象

中学生～高校生

●用意するもの

・パワーポイント（P150）
・筆記用具
・ホワイトボードセット（ミニホワイトボード、マーカー、マーカー消し含む）：グループ数分
・ふせん：３枚×全員分

●所要時間

45～50分

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
0．予め班をつくり、班ごとに役割を決めておく。 ホワイトボードセット・ふせんなどの道具も事前に配布しておく。	班（3～4人程度）で役割は、進行係・記録係・発表係・道具係など一人一役が基本。
1．「島の宝」 パワーポイント2枚目を提示し、全体で状況を理解する。 ふせん（1人3枚）を配布し、次の問いを考える。 問「あなたが、この島で奪われた宝物とは何だとおもいますか？」 ⑴　個人で考えて、ふせん1枚につき、1つずつ記入する。（2分） ⑵　個人の意見を共有し、班で議論したのちホワイトボードに班の考えを記入する。（5分） ⑶　クラス全体で班の考えを共有する。（8分）	宝物は、物質的なものだけではなく、精神的なものや平和も含むことを指摘し、それらが奪われることを迫害と言うことに言及する。
2．「桃太郎」について、次の問いを考える。 問「桃太郎は、善ですか、それとも悪ですか？」 ⑴　班で検討する。（15分） ・3分経過したら次のことを伝える。 「桃太郎は、それぞれ何％善か悪かを例にならって、ホワイトボードにまとめてみましょう。」 ・5分経過したら唱歌『桃太郎』の歌詞を全体に紹介して再検討を促す。 ⑵　班ごとに発表する。（5分）	立場や視点によって、物ごとの善悪の価値が揺らぐことを確認する。 唱歌「桃太郎」（パワーポイント4枚目）を参考に桃太郎は、善か悪かを考える。
3．近代の北海道経営について、次の問いを考える。 問「2015年、新千歳空港に『北海道は、開拓者の大地だ』と記された広告が掲げられ問題となりました。何が問題となったのでしょうか。」 ⑴　班で検討する。（10分）	世界では、国家が人種主義を用いて植民地支配の正当性と国民に対する文化的同質性を求めたことを理解する。

ふり返り・まとめ	
世界では、国家が人種主義を用いて植民地支配の正当性と国民に対する文化的同質性を求めたことを説明する。また、現代の諸課題を歴史的視点と多角的視点をもって考えようとする資質の大切さを提起する。（５分）	様々な立場（人種や民族、ジェンダー等）に立って社会的課題を考え、一人一人が本当の豊かさを尊重できるようにまとめる。

●用語の解説

・人種主義

　人種間に本質的な優劣があるとする見解に基づく態度や政策。

・国民国家

　国家への忠誠心を共通のアイデンティティとする人々を国民として有する領域国家。

パワーポイント（見本）

～ 島の宝 ～

〔はじめに〕

1．班をつくります（3人から4人）
2．班のメンバーでそれぞれ役割をきめてください。
　役割：「進行係」・「記録係」・「発表係」・「道具係」
3．道具係は、ホワイトボードセット・付箋を準備してください。

とある絶海の孤島。
その島は椰子が実り、極楽鳥がさえずる美しい天然の楽土でした。
こういう楽土に生を受けたあなたは、もちろん平和を愛していました。

そこへ突然、武器を持った男が仲間を従え、あなた方の宝物を奪いにやってきました。
・・・犠牲者がでる中、あなたは残された仲間と、彼等に降参することにしました。
こうして、彼らは、あなたの大切な宝物を奪ってしまいました。

問１ あなたがこの島で奪れた宝物とは、いったい何だと思いますか？
　3つ挙げてみましょう。（時間は2分です。）

問2 みなさんがこの島で奪れた宝物とは、いったい何だと思いますか？
　グループで3つ選んでみましょう。（時間は5分です。）

問 桃太郎は、善ですか、それとも悪ですか？

① 桃太郎は、それぞれ何％善か悪かを記入例にならって、ホワイトボードにまとめてみましょう。

② 唱歌『桃太郎』の歌詞を読んで、班の考えをまとめてみましょう。

〔ホワイトボード記入例〕
善 or 悪
理由
○○○○○
○○○○○
○○○○○

問 桃太郎は、善ですか、それとも悪ですか？

一 桃太郎さん桃太郎さん、お腰につけた黍団子、一つわたしに下さいな。
二 やりましょうやりましょう、これから鬼の征伐に、ついて行くならやりましょう。
三 行きましょう行きましょう、あなたについて何処までも、家来になって行きましょう。

四 そりゃ進めそりゃ進め、一度に攻めて攻めやぶり、つぶしてしまえ鬼が島。
五 おもしろいおもしろい、のこらず鬼を攻めふせて、分捕物をえんやらや。
六 万々歳 万々歳、お伴の犬や猿雉は、勇んで車をえんやらや。

唱歌「桃太郎」（巌内敬三・井上武士編、『日本唱歌集』）

〔福沢諭吉の意見〕

桃太郎が鬼ヶ島に行ったのは宝を獲りに行くためである。
けしからんことではないか。
宝は鬼が大事にしておいた物で、宝の持ち主は鬼である。
持ち主のある宝を理由もなく獲りに行くとは、
桃太郎は盗人と言うべき悪者である。
また、もしその鬼が悪者であって、世の中に害を成すことがあれば、
桃太郎は勇気をもって鬼を懲らしめることは良いことだけれども、
宝を獲って家に帰り、お爺さんとお婆さんにあげたのは、
これはただ欲のための行為であり、卑劣千万である。

福沢諭吉（「ひびのおしえ」）

とある絶海の孤島。
その島は椰子が実り、極楽鳥がさえずる美しい天然の楽土でした。
こういう楽土に生を受けた鬼は、もちろん平和を愛していました。
そこへ突然、武器を持った桃太郎が仲間を従え、鬼の宝物を奪いにやってきました。
・・・犠牲者がでる中、鬼は残された仲間と、桃太郎に降参することにしました。
こうして、桃太郎は、鬼の大切な宝物をすべて奪うことに成功します。

芥川龍之介（「桃太郎」一部改編）

《世界の潮流（19-20世紀）》

● 欧米列強は、軍事力でアジアを支配（原料・市場を求めて）
　⇒「人種主義」を用いて植民地支配を正当化

● 明治政府は、欧米列強に倣った「国民国家」建設を目指す
　⇒すべての国民に対し文化的同質性を規定

アクティビティ2　「ガーベラと平塚らいてう」（1時間）

●概　要

平塚らいてうの視点でジェンダーについて理解を深めることで、現代の諸課題を見つめる。

●ねらい

平塚らいてうの信念を通じて、ジェンダー平等を実現しようとする態度を養う。

●主な対象

中学生～高校生

●用意するもの

・パワーポイント（P152）
・色鉛筆
・筆記用具
・ワークシート（P153）：全員分
・ホワイトボードセット（ミニホワイトボード、マーカー、マーカー消し含む）：グループ数分

●所要時間

45～50分

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
0．予め班をつくり、班ごとに役割を決めておく。 ホワイトボードセット・ふせんなどの道具も事前に配布しておく。 (1)　ワークシートを配り、ガーベラに色を塗る。（5分）	班（3～4人程度）で役割は、進行係・記録係・発表係・道具係など一人一役が基本。
1．「らいてう」についてワークシートを用いて次の問いを考える。 問「らいてうが生きた時代は、どのような時代だったでしょう？」 問「らいてうが現代日本を見たときに、何を憂うでしょう？」 (1)　個人で考えて、ワークシートに記入する。（5分） (2)　班で討論して、ホワイトボードに記入する。（15分） (3)　ホワイトボードを掲示して、班ごとに発表する。	〔史料〕を読んで考える。 班ごとに、現代が抱えるジェンダーギャップについて考えられるように適宜支援を行う。

2．「ジェンダーギャップ指数」を参考にして次の問を考える。 問「らいてうが憂うことがらの根っこ（構造的背景）には、何があるだろう？」 ⑴　班で考えて、ミニホワイトボードに記入する。（15分）	男女格差の構造的背景について考察できるように促す。
ふり返り・まとめ パワーポイントを示しながら「SOGIESC」と人権について問題提起をする。（10分）	ガーベラと平塚らいてうから幸福な世の中を考える。

●用語の解説、資料・解説

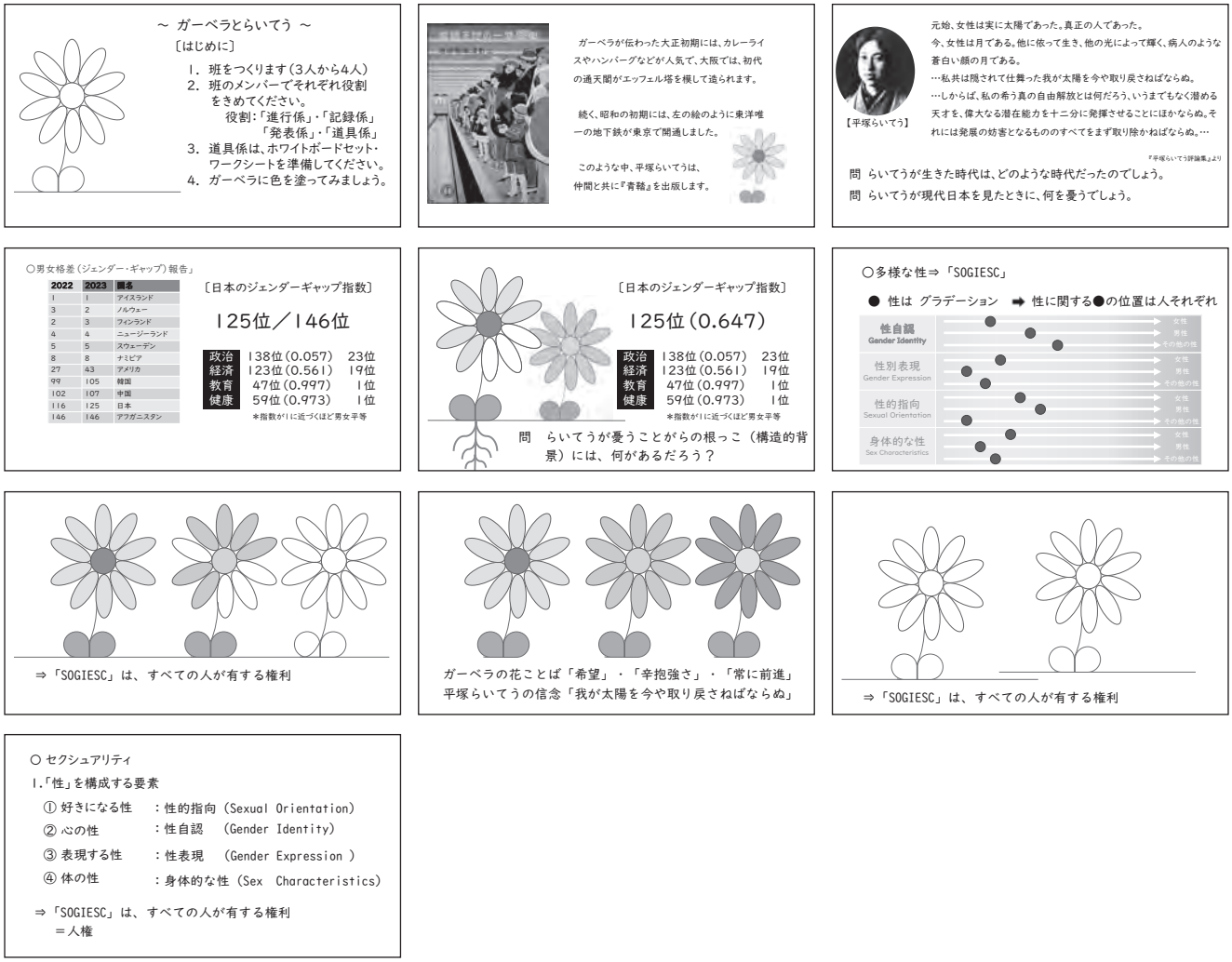
・ガーベラ

南アフリカ原産で近代に日本に渡来。花言葉は「希望」・「辛抱強さ」・「常に前進」。

・「ジェンダーギャップ指数」

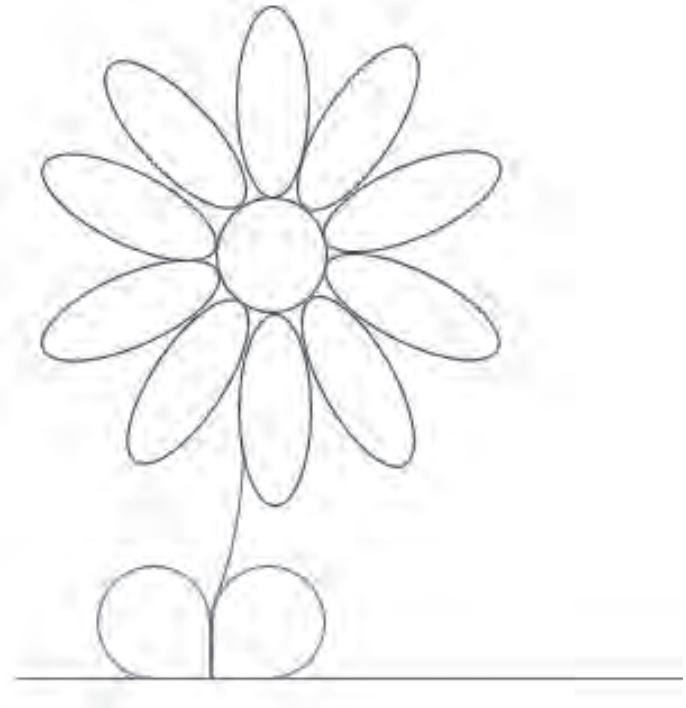
世界経済フォーラムが４観点をもとに公表する男女格差を示す指数。

パワーポイント（見本）



ワークシート

○　下のガーベラに色を塗ってみましょう。



○　次の〔史料〕を読んで、あとの問いを考えてみよう。

〔史料〕

元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。
今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い顔の月である。
…私共は隠されて仕舞った我が太陽を今や取り戻さねばならぬ。
…しからば、私の希う真の自由解放とは何だろう、いうまでもなく潜める天才を、偉大なる潜在能力を十二分に発揮させることにほかならぬ。それには発展の妨害となるもののすべてをまず取り除かねばならぬ。…

『平塚らいてう評論集』より

問　らいてうが生きた時代は、どのような時代だったのでしょう。

アクティビティ3　「幸の素」（1時間）

●概　要

多文化共生の先進地・ナミビアについて理解することで、現代の諸課題を見つめる。

●ねらい

ナミビアで見られた相互扶助の価値観を学び、現代社会を幸せに生きる感覚を養う。

●主な対象

中学生～高校生

●用意するもの

・パワーポイント（P155）
・筆記用具
・ワークシートⅠ（P156）：全員分
・ワークシートⅡ（P157）：グループ数分

●所要時間

45～50分間

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
0．予め班をつくり、班ごとに役割を決めておく。 ワークシートⅠ・Ⅱを授業前に配布しておく。	班（3～4人程度）で役割は、進行係・記録係・発表係・道具係など一人一役が基本。
1．「感じボックス」について、次の指示を提示する。 指示「メンバーの“感じ”をワークシートに書いてみよう」 (1) 他のメンバーの“感じ”を個人で考えて、ワークシートⅠに記入する。（5分） (2) 班で2人ずつペアになって“感じ”を伝えあう。（5分）	各メンバーの印象を「感じボックス」から2つ選び、相互に発表する。（2人で1分、合計3回行う）
2．「幸せのクローバー」について、次の指示を提示する。 指示「『クローバー』の葉に『幸せの4因子』を書いてみよう」	幸せの4因子（「やってみよう！」「ありがとう！」「なんとかなる！」「あなたらしく！」）をワークシートに記入する。

(1) 自分にとっての「幸せの４因子」を個人で考えてワークシートⅠに記入する。(10分)。 (2) 「幸せの４因子」を班で共有して、ワークシートⅡを完成させる。(15分)	
ふり返り・まとめ ナミビアの一部では、貧困の連鎖により「やってみよう！」因子が十分に満たされない現実がある反面、多様な隣人と幸せに暮らすために相互扶助の意識が高いことを紹介する。一方、「レガタム繁栄指数」から、日本の課題を示唆する。(15分)	多文化共生の先進地ナミビアの幸せのかたちと日本の課題を考える。

●用語の解説

・「幸せの４因子」

幸福学において長続きする幸せを構成する４つの因子（「やってみよう！」、「ありがとう！」、「なんとかなる！」、「あなたらしく！」）。

・レガタム繁栄指数

「繁栄している」国をさまざまな指標に基づきランク付けする。日本は2023年には16位だが、Social Capital（社会的つながり）が著しく低い値を示している。

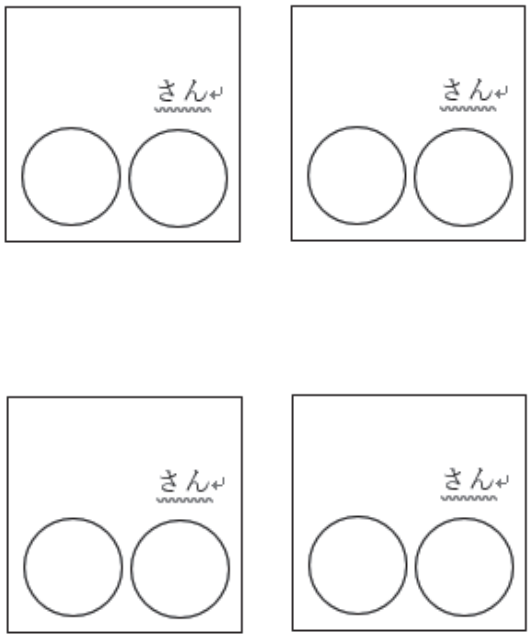
パワーポイント（見本）

ワークシートⅠ

〔作業１〕メンバーの感じを下の〈感じボックス〉から２つ選んで、○の中に数字を書こう。
〔作業２〕「クローバー」の葉に、それぞれの項目を書いてみよう。

〈感じボックス〉

1.冷静な	2.誠実な	3.ユーモアのある	4.気取らない	5.優しい	6.理性的な
7.敏感な	8.勇敢な	9.思いやりのある	10.我慢強い	11.個性的な	12.堂々としている
13.親切な	14.静かな	15.愛想の良い	16.まじめな	17.正直な	18.センスがいい
19.活発な	20.朗らかな	21.頼りがいがある	22.注意深い	23.社交的な	24.決断力がある
25.素朴な	26.情熱的な	27.心が広い	28.謙虚な	29.公平な	30.信念がある



ワークシートⅡ

〔作業３〕班のみんなで、クローバーの葉を埋め尽くしてみよう。

おわりに

Society 5.0が目指される日本において、長続きする幸せを実現するためには、社会的なつながりを深めていくことが肝要である。この様な中、日常の授業においては多面的・多角的な考察と相互承認を基盤においた実践を行っている。今回の実践では、アクティビティ１・２において、ものごとを多角的な視点でとらえること、アクティビティ３では、相互承認を導入にして幸せとは何かを体験的に考えることを目標とした。特に、アクティビティ３では、「個人の幸福」を考えることを出発にして「世界ぜんたい幸福」を考えることを試みた。拙い実践で十分に目標を達成できない実践となったが、今後とも多くの方々のご意見をふまえて授業の改善と子どもたちの幸福を図っていきたい。

参考文献・引用資料

・『新しい開発教育のすすめ方：地球市民を育てる現場から』（開発教育推進セミナー、古今書院、1999）
・『グローバル時代の「開発」を考える―世界と関わり、共に生きる７つのヒント』（西あい・湯本浩之編、明石書店、2017）
・「学校教育学科開設記念講演録どのような小学校教員を育てるか」（稲葉喜徳、『浦和論叢』第58号、浦和大学・浦和大学短期大学部、2018）
・『幸福のメカニズム　実践・幸福学入門』（前野隆司、講談社、2013）
・『アフリカ社会を学ぶ人のために』（松田素二編、世界思想社、2014）

実践事例報告

プログラム作成・実践者　藤原　孝夫　　学 校 名　鳥取県立米子東高等学校

担当教科　地理歴史（日本史）

実践教科　日本史Ｂ（高校３年）

【授業の概要】

⑴ 単元のテーマ

グローバルな課題と日本

⑵ 単元のねらい

グローバルな課題を通じて、国際社会に主体的かつ幸福に生きる感覚を養う。

⑶ 概　要

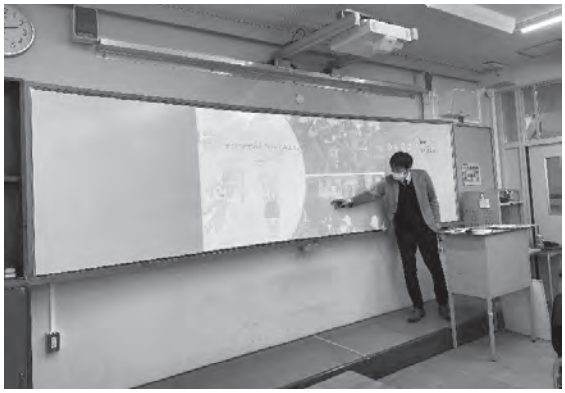
多文化共生の先進地・ナミビアについて理解することで、現代の諸課題を見つめる。

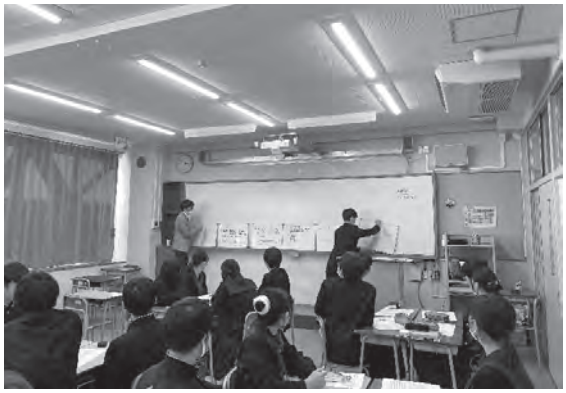
⑷ 指導上の留意点

アイヌやナミビアを通じた学びの際に、彼らの社会・文化を画一的で消極的な側面ばかりが注目されないように留意する。

⑸ 授業実践をした上での感想・ふり返り

アクティビティ３では、相互承認を導入にして幸せとは何かを体験的に考えることを目標とした。「感じボックス」では、相互承認に基づく生徒の「ありがとう！」・「あなたらしく！」因子が高まった。しかし、「幸せの４因子」をクローバーに書く作業では、時間的制約もあり想定したほど作業が進まなかった。前時に内容を予告し、事前に考えておくようするなどの工夫が必要であった。現代におけるNew Comerが抱える生き辛さやそれに目を向け行動する資質を養いたかったが、授業では諸課題の発見にとどまってしまい、行動する資質を養うまでいかなかった。問いの工夫や時間配分など今後の課題としたい。





学びのプログラム集

―2023年度JICA中国・四国 教師海外研修 授業実践報告書―

2024年３月発行

独立行政法人国際協力機構 中国・四国センター

執筆・作成：2023年度JICA中国・四国 教師海外研修参加教員
指導・監修：山中信幸（川崎医療福祉大学非常勤講師・開発教育ファシリテーター）

独立行政法人 国際協力機構
中国センター（JICA中国）
〒739-0046 広島県東広島市鏡山３－３－１
TEL 082-421-6305　FAX 082-420-8082
https://www.jica.go.jp/chugoku/

独立行政法人 国際協力機構
四国センター（JICA四国）
〒760-0028　香川県高松市鍛冶屋町３番地 香川三友ビル１階
TEL 087-821-8824　FAX 087-822-8870
https://www.jica.go.jp/shikoku/